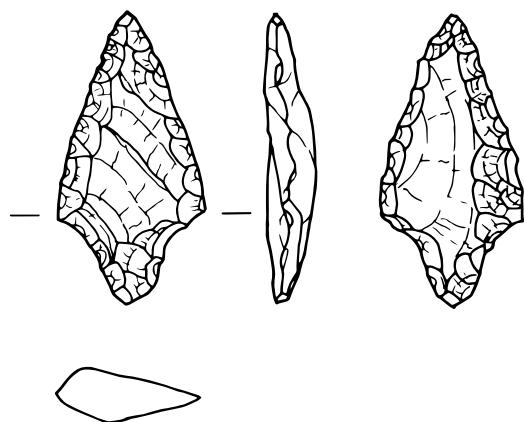


舟木遺跡2

(F地区における平成10年度調査)



2024. 3

淡路市教育委員会

舟木遺跡2

(F地区における平成10年度調査)

2024. 3

淡路市教育委員会

卷首図版 1



1. 堪穴建物 S H - 9 8 0 1



2. 生駒西麓産壺 (S H - 9 8 0 1 出土)

卷首図版 2



1. 粉圧痕土器



2. 焼土塊



3. 赤色物が付着した石器

例　言

- 1、本書は、平成10（1998）年度に旧北淡町教育委員会が実施した土砂採取事業に伴う舟木遺跡16次・17次発掘調査の報告書である。
- 2、遺跡は、兵庫県淡路市舟木字棚原32番1ほかに所在する。
- 3、本書は、平成10（1998）年度に旧北淡町教育委員会の川吉知子が実施した調査記録をもとに、淡路市教育委員会の新田妃三光、伊藤宏幸が編集・執筆したものである。
- 4、調査体制及び調査担当者については、本書第I章に記した。
- 5、本書で報告する遺構及び遺物には、令和2（2020）年3月に刊行した発掘調査報告書『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』に掲載したものを再掲載したものが一部含まれている。本書の中では、それらの遺物について、図版等に再掲載である旨を記載した。
- 6、本書で使用する舟木遺跡の時期区分は、『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』淡路市教育委員会で使用した時期区分に準拠している。
- 7、本書で使用した方位は磁北を基準として表記した。また、使用した標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした海拔高を表している。
- 8、検出遺構は、種類ごとにアルファベット2文字を冠する4桁のアラビア数字を組み合わせた番号で表記した。冠するアルファベットは、溝（S D）、竪穴建物（S H）、土坑（S K）、ピット・柱穴（S P）、落ち込み・段状遺構など（S X）とし、それに続くアラビア数字の上2桁は調査年次の西暦の下2桁を表している。なお、今回の報告では、この表示方法に基づいて調査時に使用していた遺構番号も整理し、掲載した。
- 9、出土遺物は、種別を表す大文字のアルファベット1文字と8桁のアラビア数字を組み合わせた番号を付した。冠するアルファベットは、種別毎に、金属器（M）、石器（S）、弥生土器（Y）、その他の土製品（E）と定めた。本書では、各通し番号とこの遺物番号を併記した。
- 10、遺構の実測及び写真撮影は川吉が行い、遺物の写真撮影は伊藤が行った。
- 11、調査成果に対する評価は、舟木遺跡調査成果検討会での指導助言を受けた。検討会の構成は、第I章に記した。
- 12、出土鉄器の分析は、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センターに依頼し、同大学の村上恭通教授に指導を受けた。鉄器に関する原稿及び実測図は同大学考古学研究室の鄭宗鎬氏が作成した。
- 13、石器の整理・分析は、兵庫県立考古博物館の山本誠氏及び兵庫県教育委員会の園原悠斗氏に指導を受け、搬入土器については京都府教育庁の桐井理揮氏に指導を受けた。搬入土器の実測図は桐井氏が作成した図を使用した。
- 14、石器に付着する赤色物については、種定淳介氏の指導・助言を受けた。
- 15、石器の蛍光X線分析及び土器種実圧痕の同定は、（株）パレオ・ラボに委託した。土器種実圧痕の同定は、本書で報告した土器以外に令和2（2020）年度の発掘調査で出土した土器に確認した圧痕についても分析対象とし、その成果を併せて報告している。
- 16、調査に際しては、舟木町内会及び地権者の方々に多大なる協力をいただいた。
- 17、調査の記録及び出土遺物は、淡路市教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過と調査体制	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	9
第1節 調査区の概要	9
第2節 遺構	11
1 堅穴建物	
2 段状遺構	
第3節 遺物	14
1 弥生土器	
2 土製品	
3 石器	
4 鉄器	
第Ⅳ章 科学分析	30
第1節 レプリカ法による土器種実圧痕の同定	30
第2節 石器の蛍光X線分析	32
第3節 石器に付着する赤色物の分析	35
第Ⅴ章 総括	39
第1節 遺物の評価	39
1 石器	
2 鉄製品と焼土塊	
3 粉圧痕付着土器	
第2節 遺構の評価	40
1 土器からみた堅穴建物 S H - 9 8 0 1	
2 土器からみた段状遺構 S X - 9 8 0 2	
3 石器からみた段状遺構 S X - 9 8 0 2	
第3節 調査区の評価	42

挿 図 目 次

第1図 地区割図	2	第14図 S X - 9 8 0 2 最下層出土土器	
第2図 遺跡の位置①	4	(再掲)	18
第3図 遺跡の位置②	5	第15図 S X - 9 8 0 2 上・中層出土土器	19
第4図 舟木遺跡周辺の遺跡	8	第16図 遺物包含層出土土器	20
第5図 調査区周辺の地形図	9	第17図 焼土塊	21
第6図 調査区遺構配置図及び土層断面図	10	第18図 S H - 9 8 0 1 出土石器	22
第7図 壴穴建物 S H - 9 8 0 1 実測図	11	第19図 S X - 9 8 0 2 出土石器①	23
第8図 段状遺構実測図	13	第20図 S X - 9 8 0 2 出土石器②	24
第9図 S H - 9 8 0 1 西側出土土器	14	第21図 遺物包含層出土石器①	25
第10図 S H - 9 8 0 1 東側出土土器①	15	第22図 遺物包含層出土石器②	26
第11図 S H - 9 8 0 1 東側出土土器②	16	第23図 その他の石器	28
第12図 S H - 9 8 0 1 東側出土土器③		第24図 鉄器	29
	(再掲)		
第13図 S H - 9 8 0 1 上・中層出土土器	18		

表 目 次

表1	未図化剥片一覧表	27
表2	石器の地点別出土状況表	41
表3-1	遺物観察表 弥生土器・土製品(1)	43
表3-2	遺物観察表 弥生土器・土製品(2)	44
表3-3	遺物観察表 弥生土器・土製品(3)	45
表4	石器一覧表	46
表5	鉄器一覧表	46

卷首図版目次

卷首図版 1

- 1 堪穴建物 S H - 9 8 0 1
- 2 生駒西麓産壺 (S H - 9 8 0 1 出土)

卷首図版 2

- 1 粽压痕土器
- 2 焼土塊
- 3 赤色物が付着した石器

写真図版目次

図版 1 遺跡全景と調査区の位置

- 1 遺跡全景 真上上空から

図版 2 調査区全景

- 1 確認調査 (16次) トレンチ全景 (東から)
- 2 調査区 (17次) 全景 (東から)

図版 3 堪穴建物 S H - 9 8 0 1

- 1 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 (南から)
- 2 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 (東から)

図版 4 堪穴建物 S H - 9 8 0 1

- 1 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 土器出土状況
(北から)
- 2 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 土器出土状況
(東から)

図版 5 段状遺構 S X - 9 8 0 1 · 9 8 0 2

- 1 段状遺構 S X - 9 8 0 1 · 9 8 0 2
(南から)
- 2 段状遺構 S X - 9 8 0 2
最下層土器出土状況 (南から)
- 3 段状遺構 S X - 9 8 0 2
最下層土器出土状況 (西から)

図版 6 弥生土器 1

- 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器

図版 7 弥生土器 2

- 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器
段状遺構 S X - 9 8 0 2 最下層出土土器

図版 8 弥生土器 3 土製品

- 段状遺構 S X - 9 8 0 2 最下層出土土器
焼土塊
堪穴建物 S H - 9 8 0 1 上・中層出土土器

図版 9 弥生土器 4

- 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 西側・東側出土土器

図版10 弥生土器 5

- 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器

図版11 弥生土器 6

- 段状遺構 S X - 9 8 0 2 上・中層出土土器
遺物包含層出土土器

図版12 弥生土器 7 鉄器

- 遺物包含層出土土器
鉄器

図版13 石器 1

- 堪穴建物 S H - 9 8 0 1 出土石器
段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器

図版14 石器 2

- 段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器

図版15 石器 3

- 段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器
遺物包含層出土石器

図版17 石器 5

- 遺物包含層出土石器

図版18 石器 6

- 遺物包含層出土石器

図版19 石器 7

- 遺物包含層出土石器

図版20 石器 8

- その他の石器

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

舟木遺跡は、昭和41（1966）年に地元の小学校に通う児童が拾った土器が、弥生土器と確認されたことを契機として発見された遺跡である。その後、土器が採集された地点周辺の分布調査が重ねられ、丘陵上に広大な弥生時代の遺跡が存在することが知られることとなった。旧北淡町教育委員会（平成17（2005）年、津名郡5町の合併により淡路市教育委員会となる。）を調査主体とした平成2（1990）年度に始まる仁井地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査では、遺跡の中心域で大きな竪穴建物を確認するとともに、大量の土器が出土した。それにより、弥生時代後期を中心とする大規模な集落跡であることが明らかになった。検出遺構や出土遺物は遺跡の重要性を再認識させるものでもあった。

今回報告する調査は、平成10（1998）年度に実施した遺跡地内で計画された土砂採取事業に伴う発掘調査である。当初は、工事予定地内における遺構の有無などを把握することを目的として、4本のトレンチを設定した確認調査を実施した。その結果、弥生土器や石器が出土するとともに、弥生時代の遺構の存在を確認したことにより、事業予定地を対象とした発掘調査を実施することとした。確認調査により発掘したトレンチを中心とし、工事予定範囲全体に広げた調査区の面積は300m²である。この調査に伴う整理作業は、発掘調査実施年度に水洗、注記、接合までの作業を実施したが、事務の都合によりそれ以外の作業に着手することができず、しばらくの期間を経過することとなった。

その後、平成27（2015）年度に、淡路市教育委員会を実施主体とする「国生み研究プロジェクト事業」と名づけた調査研究事業に着手した。その事業の中心となる舟木遺跡の重点調査では、それまでに実施された既往調査成果の一部を取り入れ、『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』として令和元（2019）年度に報告書を刊行し、それによって本遺跡は令和3（2021）年3月26日に国史跡の指定を受けることになった。その報告書では、今回報告する調査成果の一部も既往調査の成果として報告したが、そこには本遺跡の出現期を知る重要な遺物や遺構が含まれていたことから、調査全体の報告書刊行が待たれていた。そのため、淡路市教育委員会では、残された旧北淡町教育委員会の調査成果をもとに、令和2（2020）年度から整理作業を進め、報告書を刊行することとした。整理作業にあたっては、出土遺物の検討をとおして調査地における遺構の時期や性格などの検討を行ったが、調査の経過や検出遺構に対する詳細な記録が確認できない部分もあり、遺構に対する評価が十分でない部分も残ることになっている。

第2節 調査経過と調査体制

1 調査経過

調査地は、平成27（2015）年度から始まる舟木遺跡の重点調査に伴い設定した地区割（第1図）の中で、F地区に位置する独立丘陵（図中の網かけ部分）の西斜面にあたる。この丘陵は、周囲がおよそ200m、頂上部と裾部との比高差が約10mの小山状を呈する。

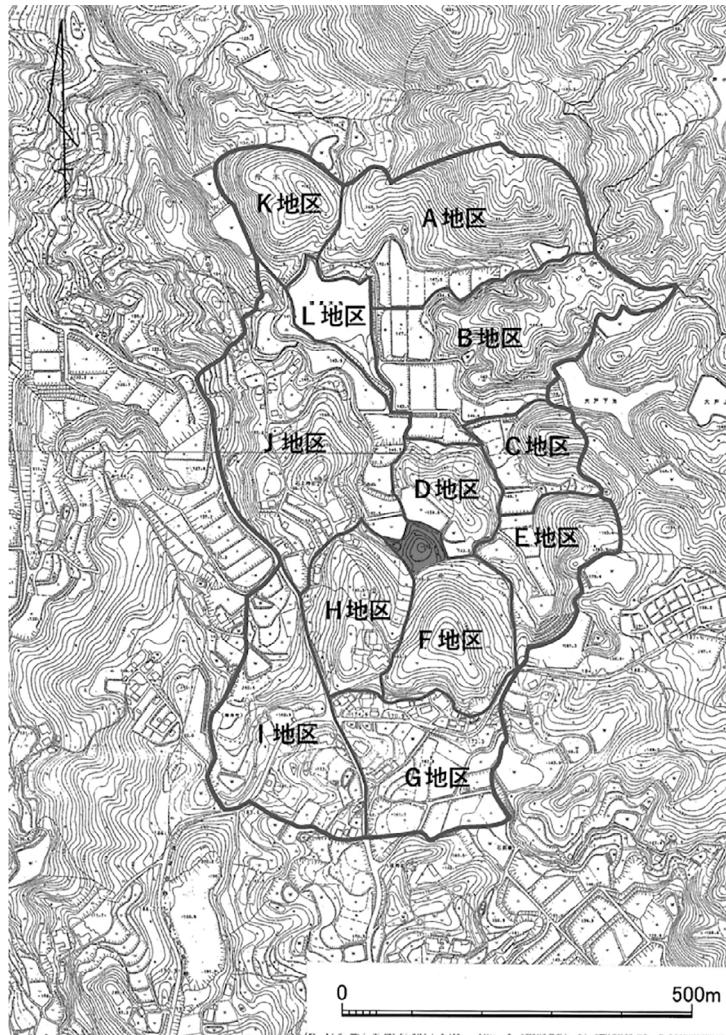
確認調査は、平成10（1998）年8月24日から12月4日の間に実施した。西向き斜面において等高線に

直行する幅2m、長さ23mの東西方向のトレンチを1か所、そのトレンチから北に向かう幅1m、長さ15mと11mの南北方向のトレンチを2か所、同じ方向の南に向かう長さ12mのトレンチ1か所を設定した。東西方向のトレンチでは、斜面上方で竪穴建物と考えられる遺構の一部を検出したほか、斜面下方でも段状遺構とみられる遺構の存在を確認した。それらの遺構からは弥生時代後期の土器が出土したため、当該期の集落跡の存在が確実となった。

この成果をもとに、遺跡の保護と事業計画との調整を行った結果、今回確認した遺構は事業によって削平されることが確認されたため、事業予定地を対象とした発掘調査を実施することとした。この調査は、確認調査に引き続き期間を延長して実施することとし、確認調査トレンチを拡張して実施した。発掘調査の期間は、平

成10（1998）年12月8日から平成11（1999）年1月29日の期間であった。

現地調査終了後、出土遺物の水洗、注記、土器の接合作業を行った時点で整理作業は中断した。舟木遺跡の重点調査により遺跡の評価に取り組む中で、既往調査の成果を見直したところ、整理作業が中断した遺物の中に河内地域からの搬入土器が存在することや、弥生時代の集落出現期を示す土器の一括資料が含まれることなど、舟木遺跡を評価する上で重要な遺物の存在が明らかになったことから、それらの資料を先行して『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』の中で報告することとした。しかし、発掘調査で出土した資料には未整理の土器や石器も多く、整理作業を進め、調査全体の評価を行う必要があった。この他にも既往調査に伴う整理作業が数多く残されている状況に鑑み、淡路市教育委員会では、舟木遺跡の調査成果の整理作業を計画的に進め、調査報告書を順次刊行することによって舟木遺跡の全体像を明らかにし、遺跡の適切な保護に努めることとした。そこで、最初に着手したのが今回報告する旧北淡町教育委員会が平成10年度に実施した16次・17次調査である。



第1図 地区割図

2 調査体制と期間

調査体制と調査期間は以下のとおりである。

平成10（1998）年度

調査主体：旧北淡町教育委員会

担当者 川吉知子

整理員 土井純子、森脇京子

令和2（2020）年度

調査主体：淡路市教育委員会

担当者 新田妃三光

補助員 湯谷恭幸

整理員 田浦あい子、青木一男、松村佳世子、関根育代

令和3（2021）年度

調査主体：淡路市教育委員会

担当者 新田妃三光、伊藤宏幸

補助員 湯谷恭幸

整理員 田浦あい子、青木一男、松村佳世子、関根育代

令和5（2023）年度

調査主体：淡路市教育委員会

文化財係長 新田妃三光

担当者 伊藤宏幸

補助員 湯谷恭幸、沖悠矢

整理員 田浦あい子、青木一男、松村佳世子、関根育代

3 舟木遺跡調査検討会

構成

委員長 和田晴吾（兵庫県立考古博物館 館長）

委員 森岡秀人（関西大学大学院 非常勤講師）

委員 村上恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター センター長）

委員 浦上雅史（洲本市立淡路文化史料館 専門員）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

舟木遺跡は、瀬戸内海の東端に浮かぶ瀬戸内最大の面積を有する淡路島北部の丘陵上に位置する。遺跡の標高は150m～200mで、海岸線からの距離は直線で約2kmを測る。舟木遺跡が立地する丘陵は、標高515メートルの常隆寺山や522mの妙見山を最高峰とする津名山地山麓に広がり、比較的なだらかな地形を呈していることから、その多くは現在も住居が点在する居住エリアとして利用されている。この丘陵部には舟木遺跡のほかにも、弥生時代の遺跡が多数存在することが知られており、弥生時代にも人びとの活動エリアとなっていたことが想像できる。

東西の海を隔てる津名山地には、急峻な山脈を横断する形で数か所の地溝帯が存在しており、そこは東西の海岸部を結ぶ重要な交通路として利用されている。丘陵上に存在する弥生時代の遺跡は、これら地溝帯に沿って分布する傾向が認められる。このことから、地溝帯を利用した交通路は弥生時代にも東西の海岸部を結ぶ陸路として機能していたことが想定される。舟木遺跡は、その一つである東海岸の久留麻地区と西海岸の野島地区とを結ぶ地溝帯の西端に位置しており、内陸の交通路の要衝に位置していた可能性がある。

以上のような場所に立地する舟木遺跡ではあるが、瀬戸内海島嶼部の遺跡によくみられるような海への眺望は有しておらず、盆地状の地形を中心に展開する閉鎖的な空間に営まれることを特徴とする。尾根と谷とが複雑に絡み合う丘陵上に立地する遺跡は、南北約800m、東西約500mの広範囲に広がることも特徴の一つである。盆地の中心に位置する棚原大池は、周囲の尾根と尾根の間を流れる谷筋の水を堰き止めたもので、近世に構築されたと考えられる。現在、盆地内で耕作されている水田は、その水系を利用しているものである。

遺跡の地質構造は、六甲山から連なる領家花崗岩帯を基盤層とし、その上部に堆積する大阪層群が一部に存在する。したがって、発掘調査によって遺構が検出できる遺構面も地区によって土質が異なる。尾根の頂上付近に露出する巨石は、基盤層を形成する花崗岩の転石が露出したものであり、遺跡中央部に鎮座する石上神社の御神体となる巨石もその一つといえる。大きな岩を避け、尾根頂上部に築かれた竪穴建物の位置や石上神社の巨石周辺で採取される多数の土器などの状況から、このような景観は弥生時代には既に存在していたものと想像できる。

島の気候は、年間平均気温が15～17℃で、冬季においても0℃を下回ることが少ない温暖な気候である。年間平均降水量は概ね1,000～1,500mm前後で、温暖少雨の瀬戸内海気候に属する。大阪湾を臨む東海岸は、西からの季節風を遮る山地を背負うことで冬場も温暖な気候に恵まれる日が多くなっているが、



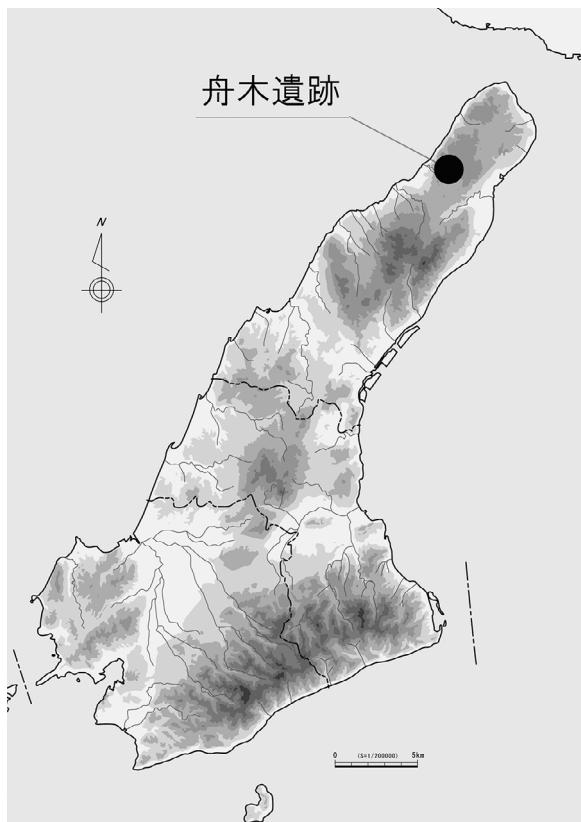
第2図 遺跡の位置 ①

播磨灘に面した西海岸の冬場は強い季節風が吹きつけるなど、島の東西で気候条件が異なる。この気候条件の違いは、地域ごとの多様な生業や産業の展開を促し、土地利用を規定するなど、島の文化をより多様なものとしてきた。

舟木遺跡は、この西海岸に面した丘陵上に位置することから、冬場には播磨灘から吹き上げる西風によって厳しい生活環境を強いられたことも想像できるが、遺跡が営まれた盆地状の地形は、強い季節風を防ぎ、厳しい環境から生活を守るために役立っていた可能性もある。

参考文献

- 北淡町 1975 『北淡町史』
水野清秀ほか 1990 『明石地域の地質』 地質調査所
高橋浩ほか 1992 『洲本地域の地質』 地質調査所
樽野博幸 1988 「地形と地質」『津名町史』 津名町
植松剛・樽野博幸 2000 「自然と風土」『東浦町史』 東浦町



第3図 遺跡の位置 ②

第2節 歴史的環境

舟木遺跡が所在する淡路島北部の歴史は、まるやま遺跡で確認されているナイフ形石器や細石刃・細石刃核といった旧石器時代の石器群が最古の遺物として知られているが、現在のところ舟木遺跡周辺では発見されていない。

続く縄文時代には草創期の有舌尖頭器が島内各地で発見されており、舟木遺跡もその一つである。平成3(1991)年の発掘調査で出土した1点を含め、2点の有舌尖頭器が確認されている。また、遺跡周辺の縄文時代の遺跡には、南へ約6kmの海岸部に位置する育波堂の前遺跡や丘陵上の袖ノ平遺跡で早期押型文土器の出土が報告されている。前期から晩期までの土器が出土する大規模な遺跡としては東海岸の佃遺跡があり、多数の貯蔵穴が発見されているなど、長期間継続した集落の営みが知られている。舟木遺跡においても、縄文時代後期の土器片や当該期の石鏃とみられる石器も発見されているが、現在のところ一定期間の居住を示すような遺構は確認されていない。

弥生時代に入ると、東西海岸に流れ込む河川の河口部で水田稲作を想定させる前期の遺跡が確認されている。三原平野で確認されている平石遺跡や雨流遺跡、井手田遺跡、洲本平野の下内膳遺跡などにみられるように、広い平野部を背景に中期から後期にも継続する拠点的な集落が認められる島の中・南部とは対照的に、大きな河川が発達していない島の北部では長期間継続する遺跡は少ない。中期から後期の間に断絶する集落も多いことから、山地が多くを占める島北部では安定した水田経営を営む環境が少なかった可能性もある。そのような中、中期末に出現し始める丘陵上に立地する遺跡は、後期に急増する状況が島北部で顕著である。そこでは、鉄器生産が確認された五斗長垣内遺跡や朱の精製が確認された二ツ石戎ノ前遺跡など、当時の重要物資の生産に関与した遺跡の存在が知られており、舟木遺跡においても鉄器生産が行われていたことが確認されている。なお、舟木遺跡周辺においても、尾花遺跡をはじめとする弥生時代後期を中心として営まれた遺跡が数多く知られており、その内容が注目されるところである。

後期に増加したこれらの遺跡は庄内期に減少する傾向にあり、布留式期に継続する遺跡はほとんど認められない。五斗長垣内遺跡における鉄器生産は、庄内式期以降の工房が確認できることから、後期末にピークを迎え、庄内式期を迎え急速に縮小したものと考えられる。舟木遺跡も現在のところ、後期初頭に出現し、後期後半に集落規模が最大となった後、庄内期に縮小し、布留式期には消滅するものと考えられているが、そこでは庄内式期にも鉄器生産は継続していることが確認されている。

丘陵上で遺跡が減少し始める庄内式期には、海岸部に位置する貴船神社遺跡や富島遺跡、畠田遺跡などにおいて後期後半に始まる土器製塩が本格化する。なお、舟木遺跡においても庄内式期の製塩土器が出土しており、海岸部の遺跡との関係性も想定できる。その後、海岸部での土器製塩は、古墳時代後期から終末期にかけてピークを迎え、淡路島が御食国とよばれた律令期にも継続する。これらを代表する遺跡には、前述の遺跡の他に浜田遺跡や並松遺跡など、島北部の東西の海岸部で大規模な遺跡が知られている。なお、これらの遺跡で生産された塩が都に運ばれて消費されたことは、平城宮跡などで出土する荷札木簡などからも知ることができる。その中には浜田遺跡が所在する淡路市育波に比定される淡路国育波郷や並松遺跡が所在する淡路市久留麻に比定できる淡路国来馬郷と記された木簡があり、これら製塩遺跡との関係性が注視されるところである。

土器製塩が活発化する一方で、当該期を代表する遺構である古墳の数は少なく、特に前方後円墳は島全域を見渡しても現在のところ1基も確認できない。出土遺物などから前期・中期と考えられる古墳は

洲本市のコヤダニ古墳や南あわじ市の委文古墳など洲本平野や三原平野周辺で何基か確認できるが、その数は少なく、島北部においては現在のところ1基も知られていない状況である。後期にあっては小規模な古墳群が各所に築かれるものの、大規模な古墳は認められず、特に島北部にあっては小規模な箱式棺を埋葬主体とする墳墓が海を見渡す丘陵上や製塙遺跡の中に築かれる例が認められる。そのような例は舟木遺跡の周辺においても、海岸部に営まれる製塙遺跡である畠田遺跡や富島遺跡で確認されているほか、海岸を見下ろす丘陵先端部に築かれた荒神の森古墳や築鼻山古墳などが知られている。

なお、製塙遺跡が活発に活動している期間に丘陵部で確認できる遺跡の数は少なく、弥生時代後期とは全く様相を異にする。その後、丘陵部での活動が顕著となるのは中世以降のことであり、遺跡が発見される範囲は、弥生時代後期の遺跡と重複するものが多く認められる。舟木遺跡周辺においても、井ノ谷遺跡や将監遺跡などの遺跡が知られており、丘陵部における集落の様相も明らかとなりつつある。

また、この時代を代表する遺跡として城館跡がある。島北部においては、国人衆の居城とされる小規模な城館が各地に残されているが、いずれも海路や陸路の要衝の地に営まれたと考えられるものが多く、舟木遺跡の近くにも土壘が残る小田館跡の存在が知られている。弥生時代後期の遺跡と重複する中世遺跡のあり方なども今後注視する必要がある。

このような遺跡の動向に影響を及ぼしているのが、淡路島の地理的環境であると考えられる。古来、瀬戸内海は、大陸や朝鮮半島、北部九州などと近畿地方を結ぶ海路として、文化や情報・物資を運ぶ上で重要な役割を担ってきたであろう。その中にあって、瀬戸内の東端に横たわる島とそれを取り囲む海峡は、瀬戸内海上交通の要衝となっていたことは想像に難くない。それを裏付けるかのように、それぞれの海峡を見下ろす山上には、弥生時代の高地性集落に始まり、中近世の城郭や砲台、近代の軍事要塞まで、それぞれの時代に海峡を掌握するために築かれた遺跡が数多く残されている。

参考文献

兵庫県 1992 『兵庫県史 考古資料編』

洲本市立淡路文化史料館 1992 『淡路島の古墳時代』



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	舟木遺跡	縄文～近世	13	尾花遺跡	弥生	25	瘠松遺跡	中世	37	中屋遺跡	弥生・中世
2	夏池遺跡	弥生	14	将監遺跡	弥生・中世	26	仁井石田遺跡	中世	38	久野々遺跡	弥生・中世
3	舟木原田遺跡	中世	15	鳶ヶ巣遺跡	中世	27	柏田遺跡	弥生・中世	39	久野々下ノ開地遺跡	弥生
4	岩ノ久保遺跡	弥生・中世	16	小田向山遺跡	中世	28	原田穴ノ郷遺跡	弥生	40	久野々原遺跡	弥生・中世
5	早稻田遺跡	中世	17	井ノ谷遺跡	中世	29	一橋池遺跡	弥生	41	金坪遺跡	弥生
6	片白遺跡	中世	18	仁井館	中世	30	おぎわら七口池遺跡	弥生	42	おぎわら遺跡	弥生
7	井の脇遺跡	中世	19	船原遺跡	弥生・中世	31	権田谷遺跡	弥生	43	繁谷遺跡	中世
8	浅原遺跡	中世	20	小田岡遺跡	中世	32	久野々大坪遺跡	弥生	44	井内谷遺跡	弥生
9	明神山遺跡	中世	21	上ノ開地遺跡	弥生	33	久野々原田遺跡	弥生	45	石田南遺跡	中世
10	長畑夏池遺跡	弥生・中世	22	惣田遺跡	弥生	34	原田遺跡	弥生	46	石田北遺跡	弥生・中世
11	仁井東山遺跡	弥生	23	大平遺跡	弥生	35	穴郷遺跡	弥生	47	富島遺跡	縄文～近世
12	小田館	中世	24	又田遺跡	中世	36	鉢谷遺跡	弥生			

第4図 舟木遺跡周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の成果

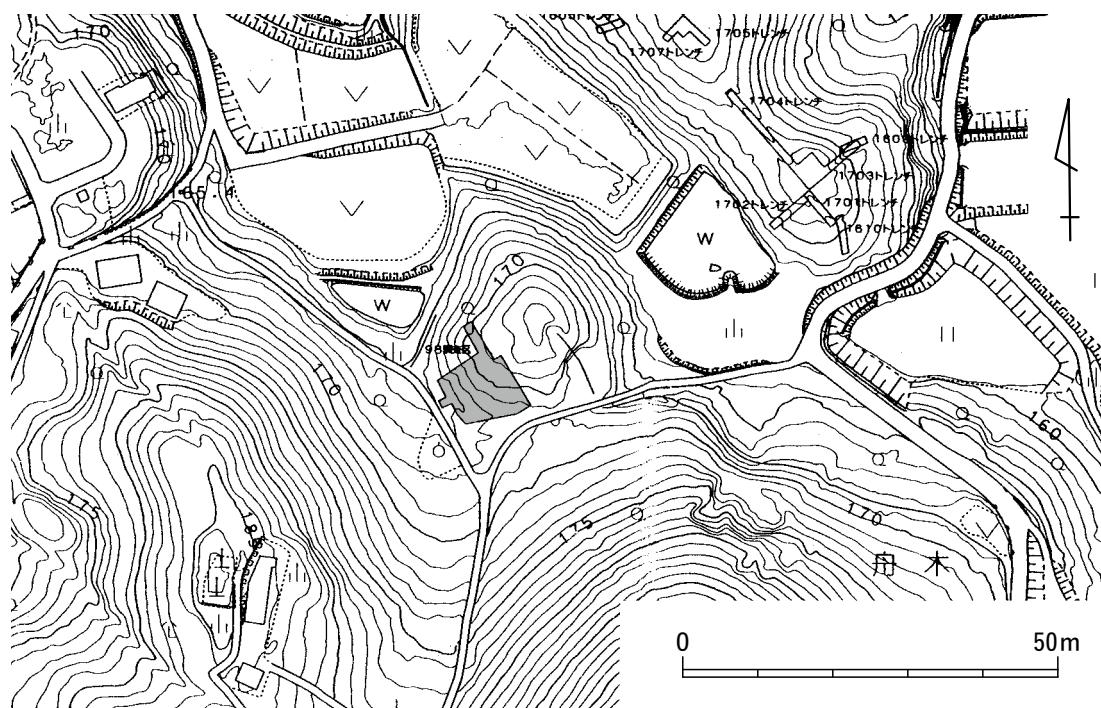
第1節 調査区の概要

調査区は、遺跡中央部の小山状を呈する独立丘陵の西斜面に位置する。丘陵上方の一辺が19m、下方が13m、その間が18mで、斜面下方から見上げて逆台形を呈する調査区である。調査区の基本層序は、腐葉土が堆積する表土下に暗褐色土が堆積し、地山に至る。なお、丘陵斜面上部にあたる調査区東端の一部で、表土と暗褐色土の間に暗茶色土の堆積する範囲が存在する。

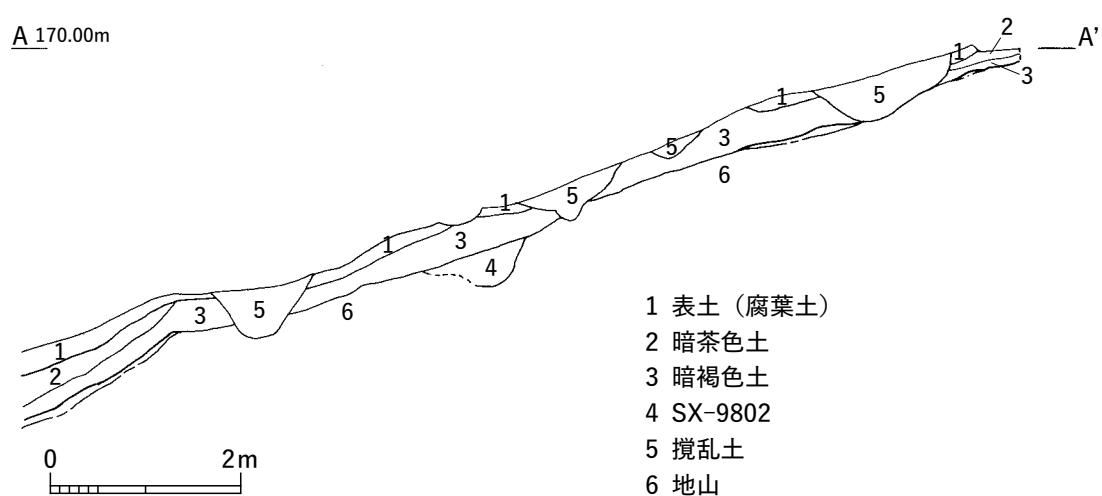
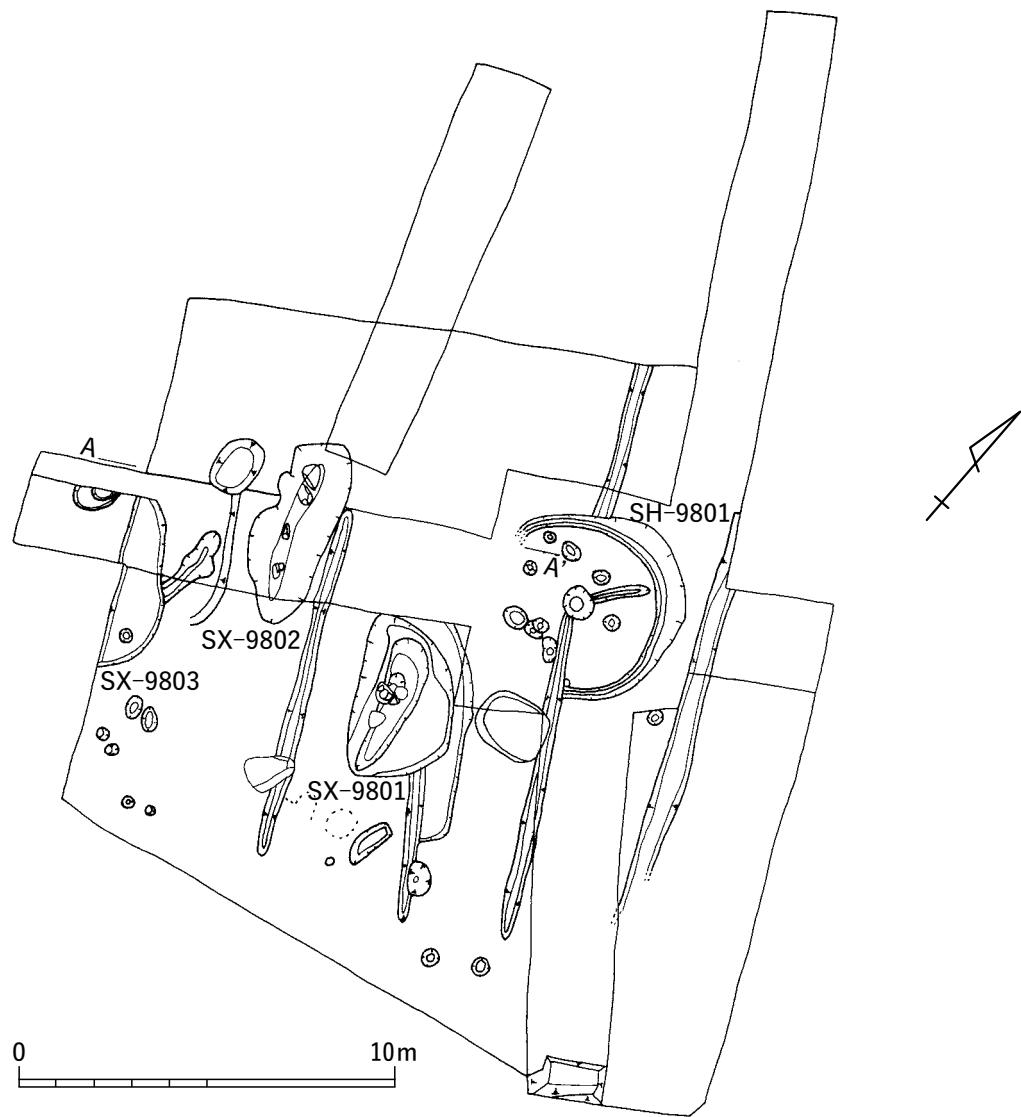
調査区を南北に横切る溝を4条検出した。いずれも現在の地表土直下から掘られており、弥生時代の遺構を切って検出している。溝内から出土した遺物から、これらの遺構は現代の溝であることを確認した。当該地がかつて果樹園として利用されていた際に掘削されたものと考えられる。

弥生時代の遺構は地山面で検出しており、その上に堆積する暗褐色土や暗茶色土からも弥生土器や石器が出土した。検出した遺構には、堅穴建物1棟のほか、斜面をテラス状に掘りくぼめた段状遺構3か所がある。堅穴建物SH-9801は、斜面上方の調査区中央部で検出した。堅穴建物から出土した土器は、弥生時代後期前葉から中葉のものが中心で、サヌカイト製の石器を伴う遺物の中に鉄器が1点がある。一方、段状遺構は、斜面の中程から下方で検出しており、平面形は半円形のものや細長い不定形のものなど多様である。その内、段状遺構SX-9802最下層から出土した土器は、後期初頭の様相を呈する一括性の高いもので、本遺跡で出土する弥生土器としては最古相の土器である。この遺構からはサヌカイト製打製石器や剥片が数多く出土した。

これらのことから、本調査区は弥生時代の集落が出現する時期の遺構が営まれた可能性がある重要な調査区と考えられる。



第5図 調査地周辺の地形図



第6図 調査区遺構配置図及び土層断面図

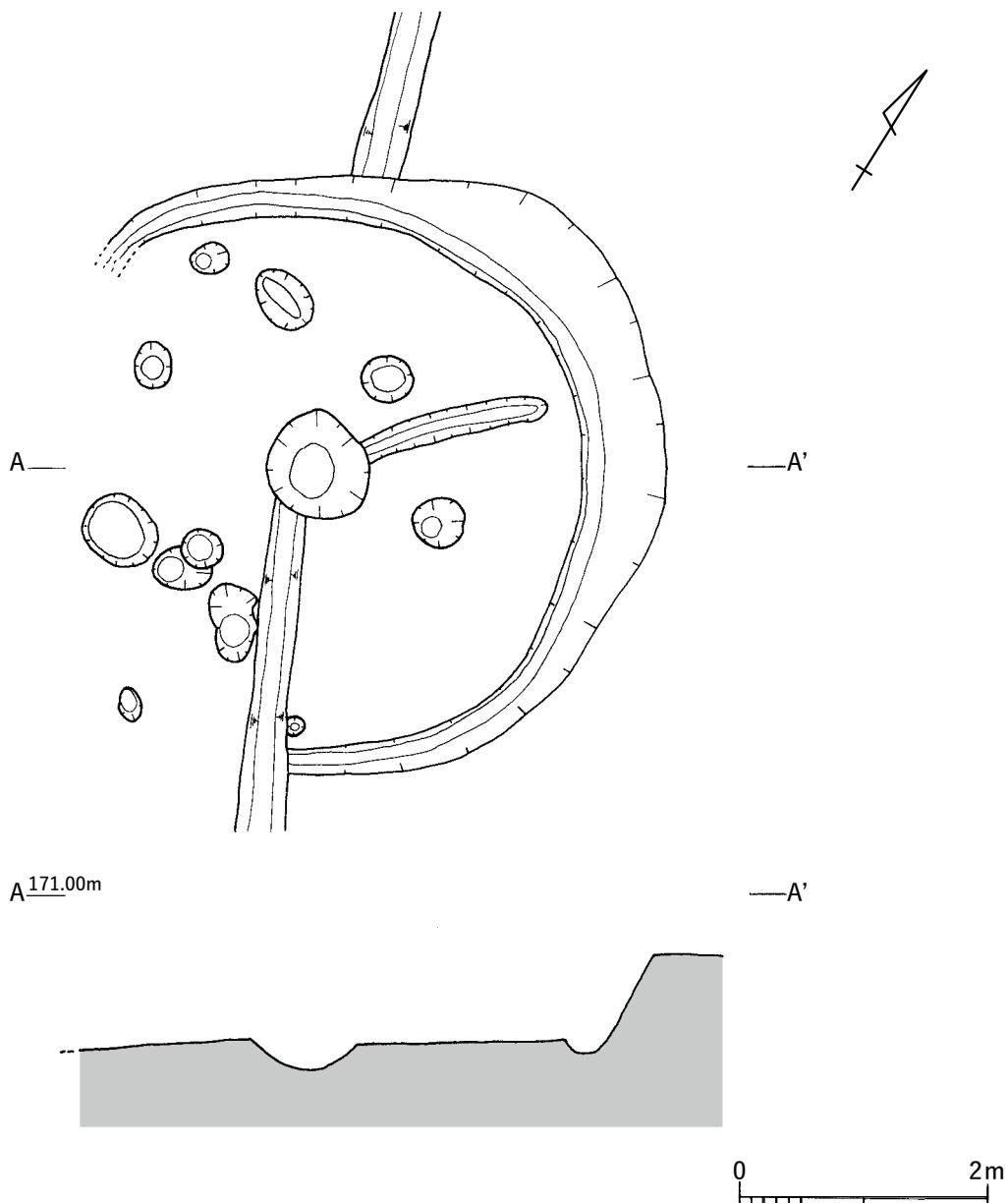
第2節 遺構

1 壇穴建物

SH-9801 (第7図)

斜面上方で検出した円形プランの壇穴建物である。床面で検出した柱の配置は不規則であるが、おそらく4本柱の建物と考えられる。壇穴の直径は4.8mで、壁際には周壁溝が巡る。斜面を掘り込み構築されているため斜面上方の東壁は深いが、斜面下方に向かう西方の壁や周壁溝は流失しており残っていない。東側の壁は深い場所で70cmを測る。周壁溝の幅は20cm、深さは10cmである。床面中央には直径80cm、深さ20cmの円形の中央土坑が掘られている。中央土坑から東に向かって一条の溝が掘られているが、先端は周壁溝の手前で切れる。この溝の幅は20cm、深さ8cmである。

遺構内からは弥生土器や石器、鉄器が出土した。床面上から出土した土器に、河内地域から搬入され



第7図 壇穴建物 SH-9801 実測図

たとみられる広口壺がある。細かく割れた状態で出土したが、口縁部は欠くものの、ほぼ原形に復元できる壺である。また、石器はサヌカイト製の打製石器と石英製の磨石がある。サヌカイト製石器には、石鏸、楔形石器、削器がある。

なお、出土遺物は大きく西側と東側に分けて取り上げられている。それらは建物中央部付近に設定された南北方向の土層観察用の畦を境として取上げられた区分と考えられるが、それぞれの土器には若干の時期差が認められる。このことから、床面上の土器として取り上げられた中に、廃棄された竪穴が埋没する過程で堆積した遺物を含む可能性があるほか、時期の異なる建物や段状遺構などとの切り合い関係にある遺構を同一遺構として掘っている可能性もある。この時期差については、遺物の項で詳述する。

2 段状遺構

S X - 9 8 0 1 (第8図)

調査区中央部で検出した段状遺構である。平面形は半円形で、全長は4.3m、幅1.6m、深さは75cmである。斜面上方にもステップ状の平坦面が存在し、二段掘りのような形状を呈する。段状に削り出した平坦部には幅約80cm、深さ約20cmの溝状の落ち込みが認められ、中央部には直径30cm大の角礫3個が確認された。

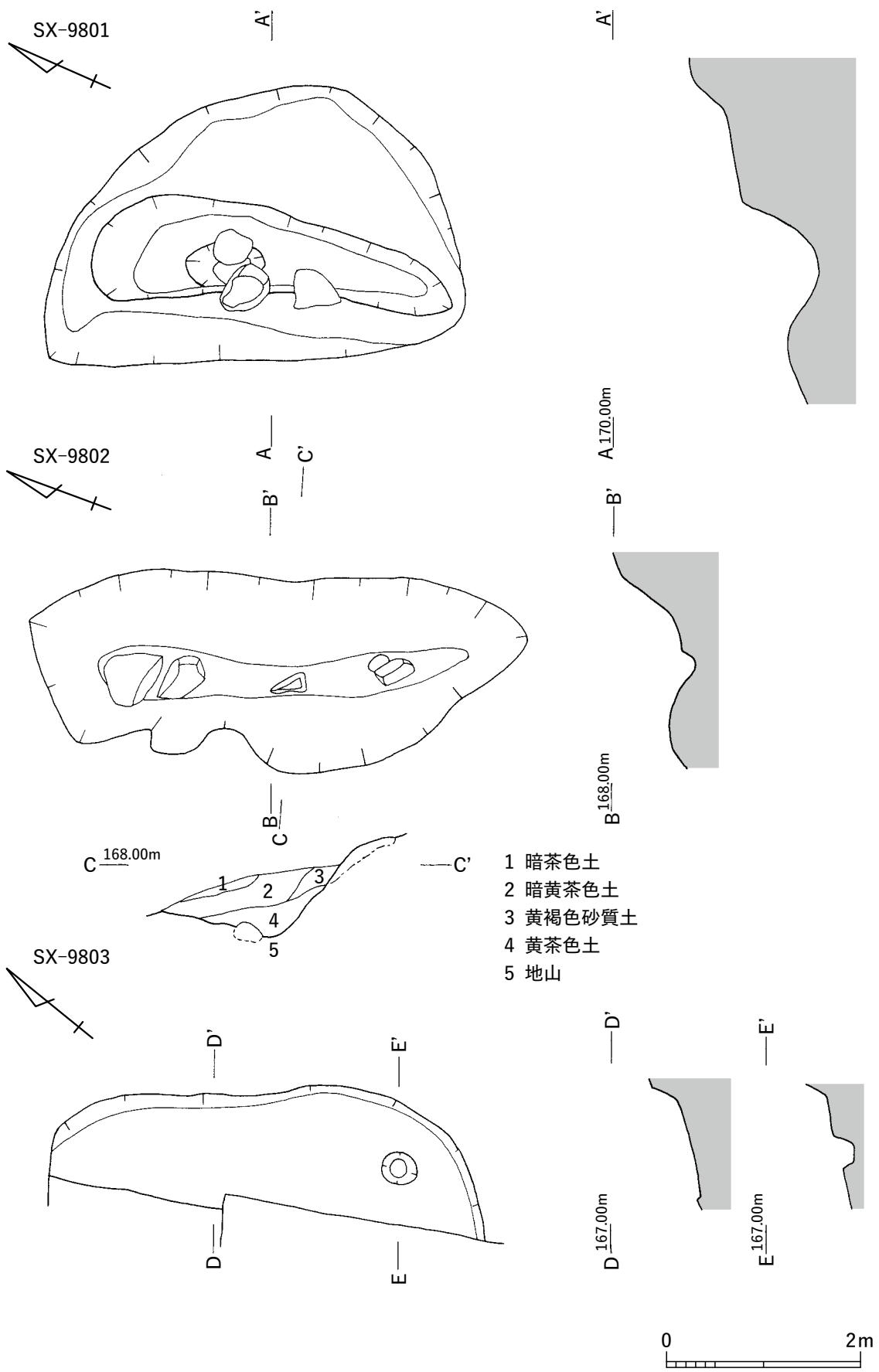
S X - 9 8 0 2 (第8図)

調査区西半で、確認調査トレンチを横切る形で検出した段状遺構である。全長は5.2m、幅1.9m、深さは80cmで、平坦部中央が深さ約30cmの溝状に落ち込む。堆積する土は大きく4層に分かれ、上層より①層：暗茶色土、②層：暗黄茶色土、③層：黄褐色砂質土、④層：黄茶色土の順に堆積し、地山に至る。平坦部中央の落ち込み内には④層が堆積する。①層から③層には石器や土器を多く含み、石器は②層に多い傾向がみられる。最下層から出土した土器として取上げられた一括資料は、④層上面で出土している。なお、④層には土器や石器は含まれないが、炭が多く含まれる状況である。

遺構内からは弥生土器と石器が出土した。最下層から出土した土器は、弥生時代後期初頭の一括性の高い土器であり、本遺跡における弥生時代の最古相を示す土器である。また、石器が多いのもこの遺構の特徴である。石器は全てサヌカイト製の打製石器であり、石鏸、石錐、楔形石器、削器がある。なお、多数出土している剥片にも加工痕や使用痕のあるものがあり、道具として使用された可能性がある。

S X - 9 8 0 3 (第8図)

調査区西端で検出した段状遺構で、平面形は隅が丸い長方形を呈する。全長は4.5m、幅1.3mでさらに調査区外へ広がる。深さは20cmで、他の段状遺構に比べ浅い掘方となっている。平坦部は、斜面の傾斜に沿って東から西に向かって緩やかに傾斜しており、東端と西端の比高差は25cmである。平坦部南端には、直径36cm、深さ20cmのピット1基が存在する。



第8図 段状遺構実測図

第3節 遺物

1 弥生土器

(1) 壺穴建物 (SH-9801) 出土土器

壺穴建物 (SH-9801) 出土土器は前節で述べたとおり、大きく西側と東側に分けて取り上げられている。1～6は西側出土土器、7～37は東側出土土器であり、38～42はそれ以外の同遺構上層などから出土した土器である。ここではその分類に沿って記述する。

西側出土土器 (第9図 1～6)

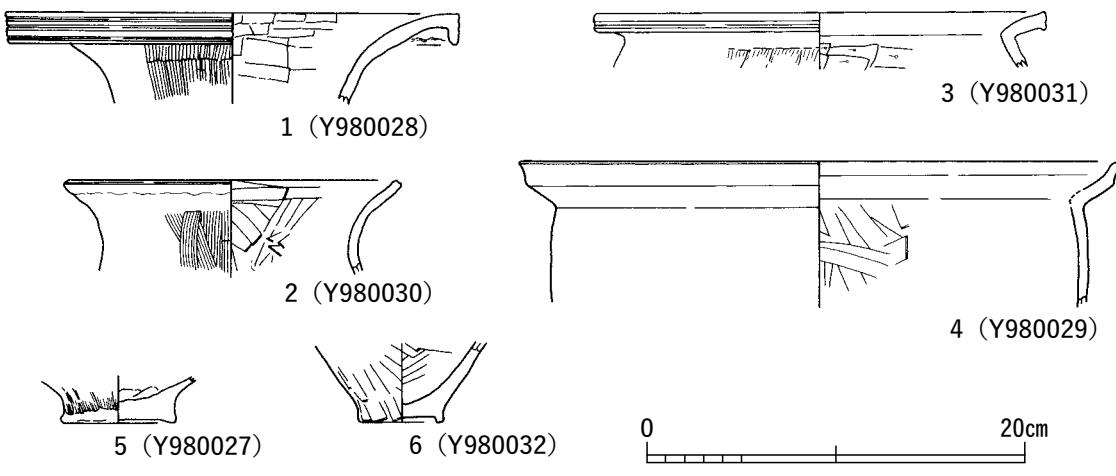
1、2は壺の口縁部である。1は口縁端部が垂下し、端面に3条の擬凹線を巡らす広口壺である。2は短い頸部から内湾気味に開く口縁部を持ち、端部は内傾する面を持つ。端面に1条の擬凹線が巡る。3は甕の口縁部である。屈折して開き、端部は直立する面を持つ。端面には1条の擬凹線が巡る。体部外面は縦方向のハケ、内面はヘラ削りを施す。古いタイプの甕であるが、頸部の屈折はやや甘く、口縁部のヨコナデも退化傾向にあるため端面下端の凹凸が顕著となる。4は大型の鉢である。内湾する体部から屈折して開く短い口縁部で、端部はヨコナデにより外反気味に摘み上げる。5は壺の底部である。突出する大きめの平底で、体部外面はハケ調整である。6は甕の底部である。周縁部が輪高台様に突出する。指押さえによる成形の後、板ナデによる調整を施す。

これらの土器は、中期末から存在する壺1や後期初頭の技法が認められる甕3など、古い様相を持つ土器で、後期前半期に位置付けることができる土器である。

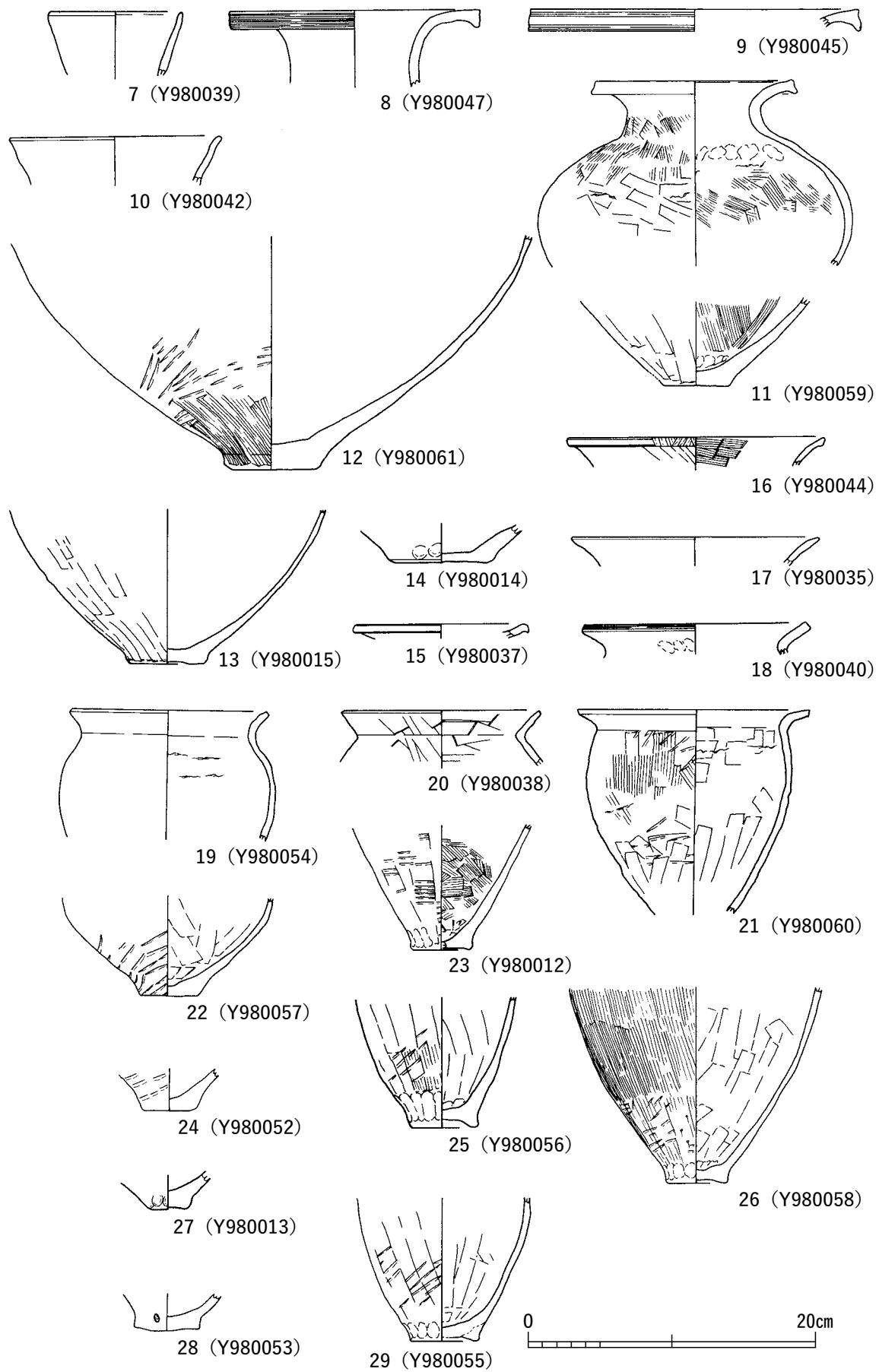
東側出土土器 (第10～12図 7～37)

7～11は壺の口縁部である。7と10は直口壺の口縁部である。7は径が小さく、斜め上方に直線的に立ち上がり、端部は丸く收める。10は径が大きく、立ち上がりは短い。口縁端部はわずかに外反して、端部は丸い。8と9は長めの頸部から強く外反して開く広口壺の口縁部である。端部は下方に肥厚し、面を有する。8は直立する端面に3条の擬凹線を施す。9はやや内傾する端面で、上下端に各1条ずつの擬凹線を施す。11は底部と胴部上半が直接接合できないが、同一個体の壺と考えられる。やや内傾する短い頸部から外反して開く口縁部で、端部は上下にわずかに肥厚し、端部に内傾する面を持つ。横に強く張り、扁平な形状の胴部で、平底の底部となる。

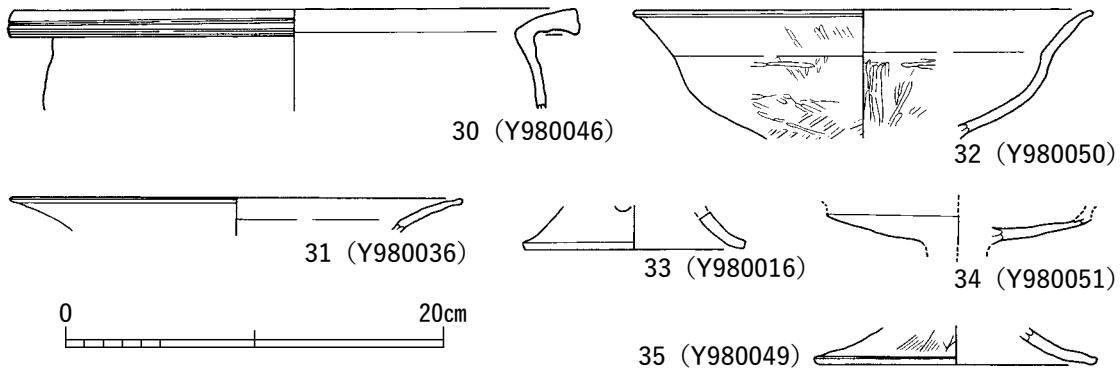
12～14は壺の底部である。12は突出する平底の大きな底部である。内湾しながら大きく開く胴部で、



第9図 SH-9801 西側出土土器



第10図 S H - 9 8 0 1 東側出土土器①



第11図 SH-9801 東側出土土器②

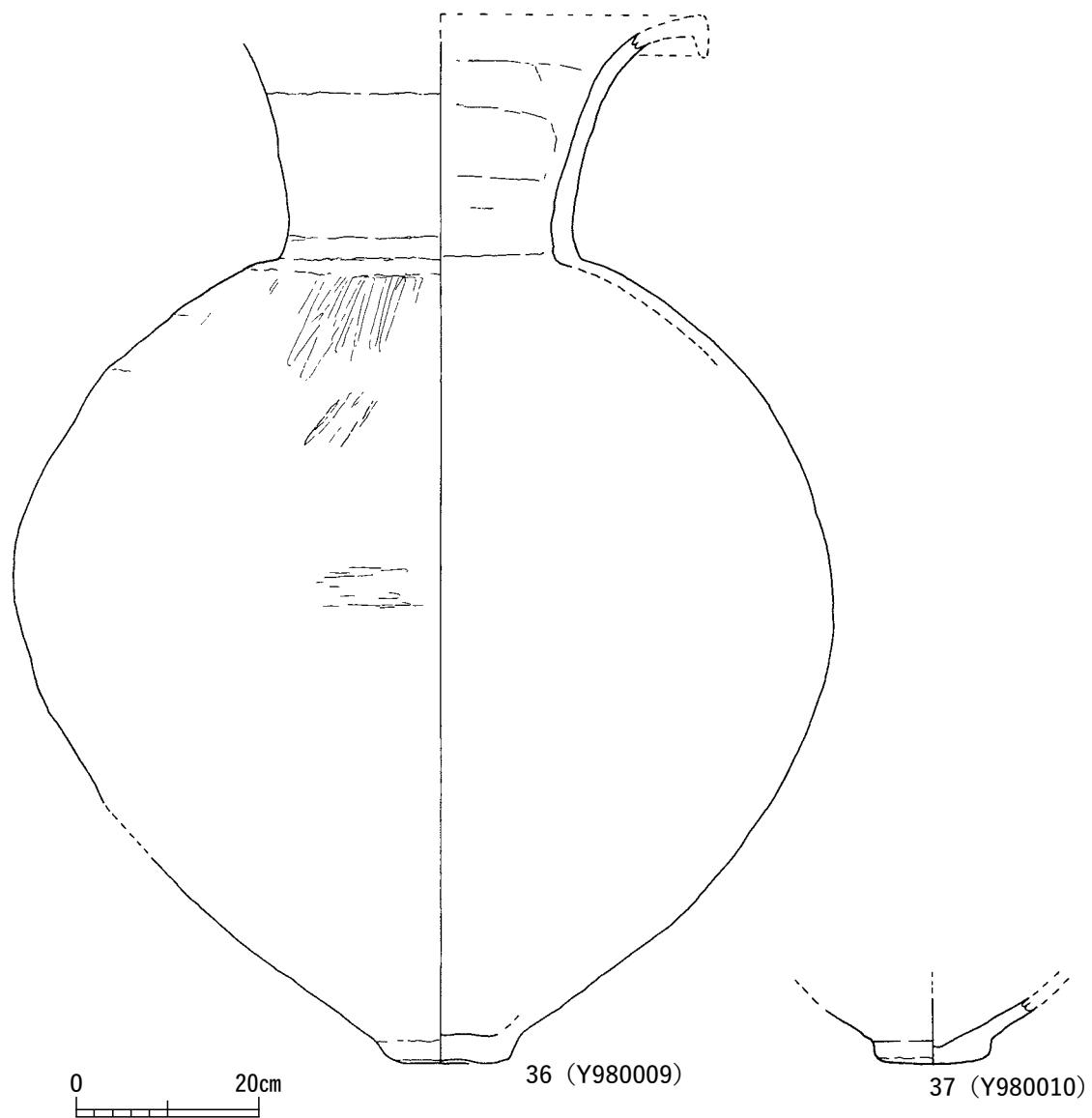
最大径は胴部中位に存在するものとみられる。底部外面には、叩きを消すようなハケ調整が施される。13は外面中央部が僅かにくぼむドーナツ底の底部である。内湾気味に立ち上がる胴部は、最大径を上半に持つ無花果形の体部とみられる。外面は、丁寧な板ナデ調整である。14は大きな平底の底部で、側面に指押さえの痕跡が残る。

15~21は甕の口縁部である。15は端部に丸みを帯びた面を残す。端面下端にヨコナデを省略したことによる粘土のはみ出しが残り、凹凸が生じる。16は外反気味に開き、端部に外傾する面を有する。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整で、端部に叩きによる面形成が施される。いわゆる淡路型甕の口縁部である。17は短く外反する口縁部で、端部は丸い。18は端部に丸みを帯びた面を持ち、端面に1条の擬凹線を施す。ヨコナデが省略気味で、外面に指押さえの痕跡を残す。19は短く外反する口縁部で、端面を形成する面は不明瞭となる。頸部の屈折はあまく、口縁部にかけての外面に指押さえの痕跡が残る。球形に近い形状の体部は、最大径を胴部中位に持つ。20は「く」の字状に屈折して開く口縁部で、端部に面を形成するが不明瞭となる。口縁部外面は縦方向の板ナデ、内面は横方向のハケ調整である。肩の張る体部で、内面にはヘラ削りが認められる。21は短く外反する口縁部で、端部に外傾する面を持つ。外面は指押さえによる凹凸が顕著で、ヨコナデ調整の省略化が認められる。最大径を胴部上半に持つ体部は、外面にハケ調整を施し、叩きを消す。内面は板ナデ調整である。

22~26、29は甕の底部である。22は外面中央部が僅かにくぼむドーナツ状の底部である。大きく開き内湾する胴部は、最大径を中位に持つ。外面は叩き成形の痕跡を残す。23は指押さえにより成形する底部で、周縁部に厚みがあり、中央部が上げ底気味にわずかにくぼむ。側面に明瞭な指頭痕を残す底部から急角度で直線的に立ち上がる体部となる。体部外面は板ナデにより叩きを消し、内面はハケ調整である。24は小さめの平底で、体部外面には叩きが残る。25、29はほぼ同じ形態の底部である。底部周縁に粘土紐を張り付けることにより厚みを持たせ、上げ底気味の底部を作る。指押さえの痕跡を側面に残し、急角度に立ち上がる体部は内湾気味で、長胴形の甕となる。体部外面は板ナデにより叩きを消す。26も周縁部に厚みがあり、中央部が上げ底気味にわずかにくぼむ。指押さえによる成形で、側面に指頭痕を残す。急角度に立ち上がる体部は、わずかに内湾する。外面は丁寧なハケ調整で、内面は板ナデ調整である。外面にススが付着する。

27、28は鉢の底部である。27は上げ底気味の小さな底部で、側面に指押さえの痕跡を残す。28は突出する平底の底部で、内湾気味に立ち上がる体部を持つ。側面に楕円形の押圧痕を認める。

30、31は鉢の口縁部である。30は大型の鉢で、屈折して短く開く口縁部は端部が下方に肥厚し、外傾する面を持つ。端面下端に2条の擬凹線を施す。31は体部から屈折して開く有稜鉢の口縁部で、端部は



第12図 SH-9801 東側出土土器③（再掲）

丸い。

32～35は高杯である。32は内湾する体部から屈折して開く口縁部を持つ高杯である。口縁部の屈折は甘く、内面の稜は不明瞭である。口縁端部はわずかに外反し、丸く収める。内外面ヘラ磨き調整である。34も高杯の杯部である。水平に開き、屈折して立ち上がる有稜高杯の体部である。体部の径は短い。33、35は高杯の脚部である。33は直線的に開き、外反する端部に面を持つ。裾部に径0.8cmの円形透孔を穿つ。35は強く外反して大きく開く脚部である。端部はヨコナデ調整により外面がわずかにくぼむ。端部に面を持つ。

36、37は搬入品の壺（『舟木遺跡1』で既報告の土器を再掲）で、いずれも角閃石を多量に含むチョコレート色の胎土で、生駒西麓産の土器と考えられる。36は、大型の広口壺で、口縁部を欠く。無花果形の体部から屈曲して外反気味に開く頸部である。37も壺と考えられる平底の底部である。

西側出土土器に比べて出土量も多い東側出土土器は、壺8や9、甕18、大型鉢30の口縁部など一部に後期前葉の土器を含むが、その他の土器には新しい様相が認められ、後期中葉から後半期に位置付ける

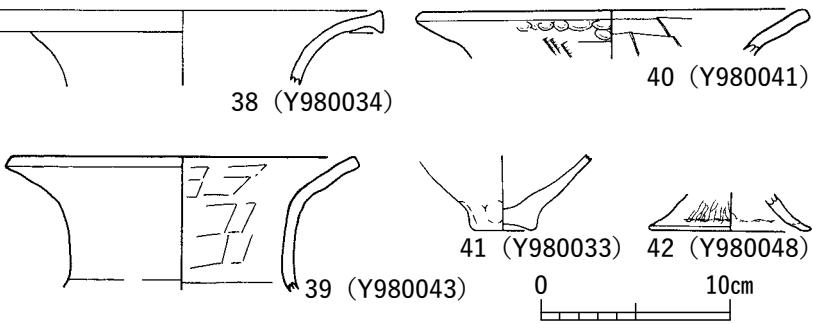
ことができる土器が主体となる。なお、生駒西麓とを考えられる搬入土器は、河内のV-3期と考えられる土器であり、他の多くを占める在地の土器の時期とも齟齬が無いことから、これら東側出土土器は西側出土土器よ

りも新しい後期中葉から後半期の土器とみておきたい。

上・中層出土土器（第13図 38~42）

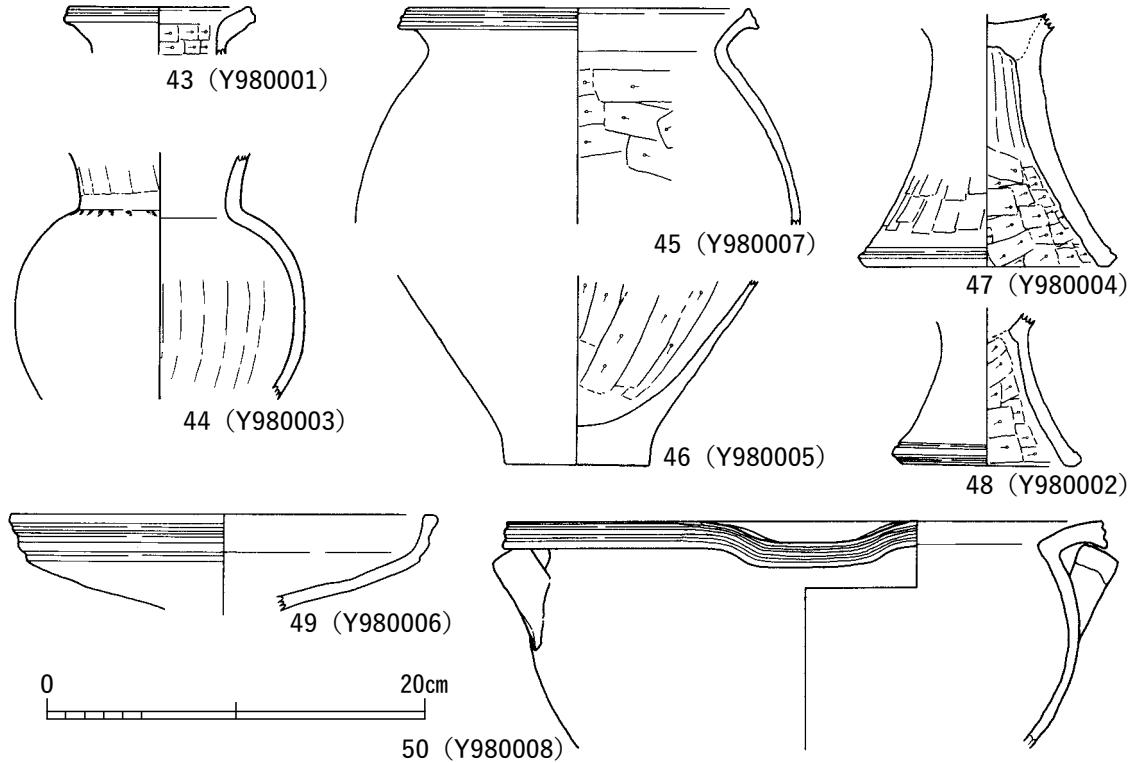
同遺構上・中層から出土した土器である。38、39は壺の口縁部である。38は外反して開く広口壺の口縁部で、端部を上下に肥厚させ端面を形成するが、面は丸みを帯びる。外面には指押さえの痕跡が残る。39は垂直に立ち上がる筒状の頸部から屈折して開く口縁部で、屈折の度合いは甘く、内面の稜は不明瞭である。端部はヨコナデ調整により弱いながら面を形成する。40は甕の口縁部である。短く開く口縁端部は、丸みを帯びた面を形成する。内面は横方向の板ナデ調整が、外面には指押さえに伴う凹凸が明瞭に残る。41は甕あるいは鉢の底部である。周縁部に厚みがある上げ底気味の底部で、側面に指押さえの痕跡を残す。内湾気味に立ち上がる体部である。42は小型の脚部である。わずかに外反し、端部は丸く収める。外面はヘラ磨き調整である。

第13図 SH-9801上・中層出土土器



(2) 段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土土器

段状遺構（S X - 9 8 0 2）出土土器は、一括性の高い最下層出土土器（『舟木遺跡1』で既報告の



第14図 SX-9802最下層出土土器（再掲）

土器を再掲)である43~50と、中層から上層にかけての出土土器である51~59に分かれる。

最下層出土土器 (第14図 43~50)

最下層出土土器は43~50である。43は壺の口縁部である。直立する頸部から僅かに外反して開く口縁部で、端面に1条の凹線を施す。頸部は、内面に施された横方向のヘラ削りにより器壁が薄くなる。口径10cmの小型の壺である。44は壺の体部から頸部にかけての部分である。体部と頸部境の外面に1列の列点文を配する。

45、46は甕である。45は肩の張る体部から「く」の字状に外反する口縁部で、端部を上下に拡張し、内傾する面を有する。端面に2条の凹線を巡らせる。口縁部はヨコナデ調整で、体部内面は口縁部下までをヘラ削りし、外面はナデ調整で仕上げる。46は甕底部で、厚みのある平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる体部である。内面は縦方向のヘラ削り、外面はナデ調整である。

47~49は高杯である。47、48は高杯の脚部で、緩やかな曲線を描きながら開くが、外反度は弱く、直線的である。いずれも裾部外面に1条の凹線を巡らせ、48は端面にも1条の凹線を施文する。外面はナデあるいは板ナデ調整で内面はヘラ削りを施す。49は浅く大きく開く杯部から屈曲して立ち上がる口縁部を持つ高杯で、外面に3条の凹線が巡る。

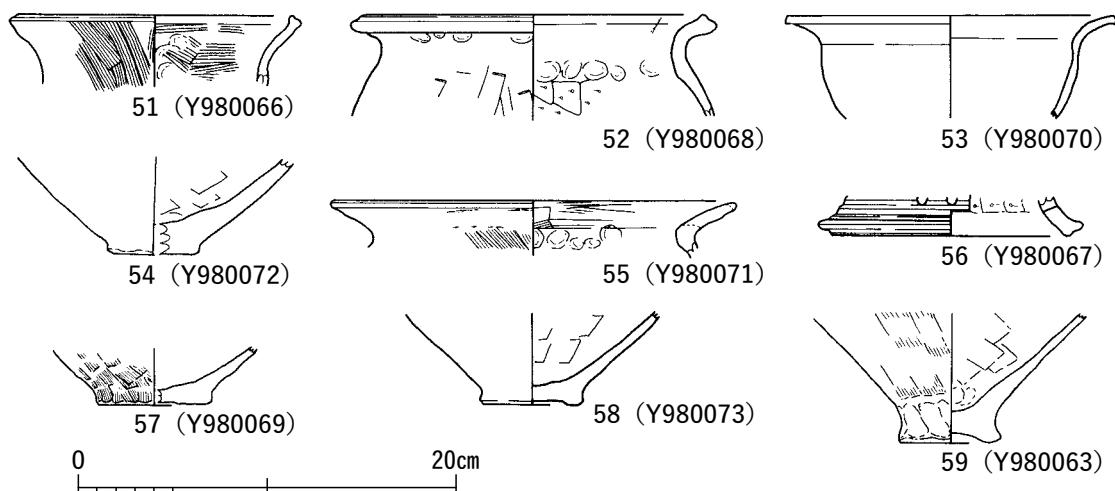
50は大型の把手付鉢である。扁球形の体部から屈曲し、短く外反して開く口縁部を持つ。口縁端部は下方に肥厚し、端面に2条の凹線が巡る。口縁部の一部が下方に押し下げられ、片口状に成形される。把手は左右の肩部にあり、上端部が口縁部下端に接する状態で取り付く。断面は長方形を呈する。口縁部はヨコナデ調整で、体部は内外面ともにナデ調整である。

甕、鉢などにみられる口縁部のヨコナデ調整や体部内面のヘラ削り、凹線文で加飾する甕や高杯、把手付土器の存在など、前様式である中期的様相を残す本遺跡最古相の土器群と考えられる。

上・中層出土土器 (第15図 51~59)

51は壺の口縁部である。短い頸部から内湾気味に開く口縁部を持ち、端部は内傾する面を持つ。端面に1条の擬凹線が巡る。竪穴建物 (S H - 9 8 0 1) 出土の壺2と同じ形態の土器であるが、調整はそれよりも丁寧である。

52、55は甕の口縁部である。52は外反して開く口縁部で、端部に内傾する面を形成するが、端面は丸みを帯びる。端面に1条の擬凹線を施す。外面には指押さえによる凹凸が明瞭に残り、ヨコナデの退化傾向が看取できる。頸部内面に指押さえが残り、体部は内面がヘラ削り、外面はナデ調整である。55は



第15図 S X - 9 8 0 2 上・中層出土土器

屈折して開く口縁部で、端部は不明瞭な面を残す。口縁部内面に横方向のハケ調整、外面に縦方向の調整の後、横方向のナデ調整を施す。体部内面はヘラ削りが口縁部近くにまで及ぶ。外面はハケ調整である。

53は内湾する体部から屈折して開く有稜鉢であるが、屈折度合いは甘く、稜は不明瞭である。口縁部は外反し、端部に面を有する。

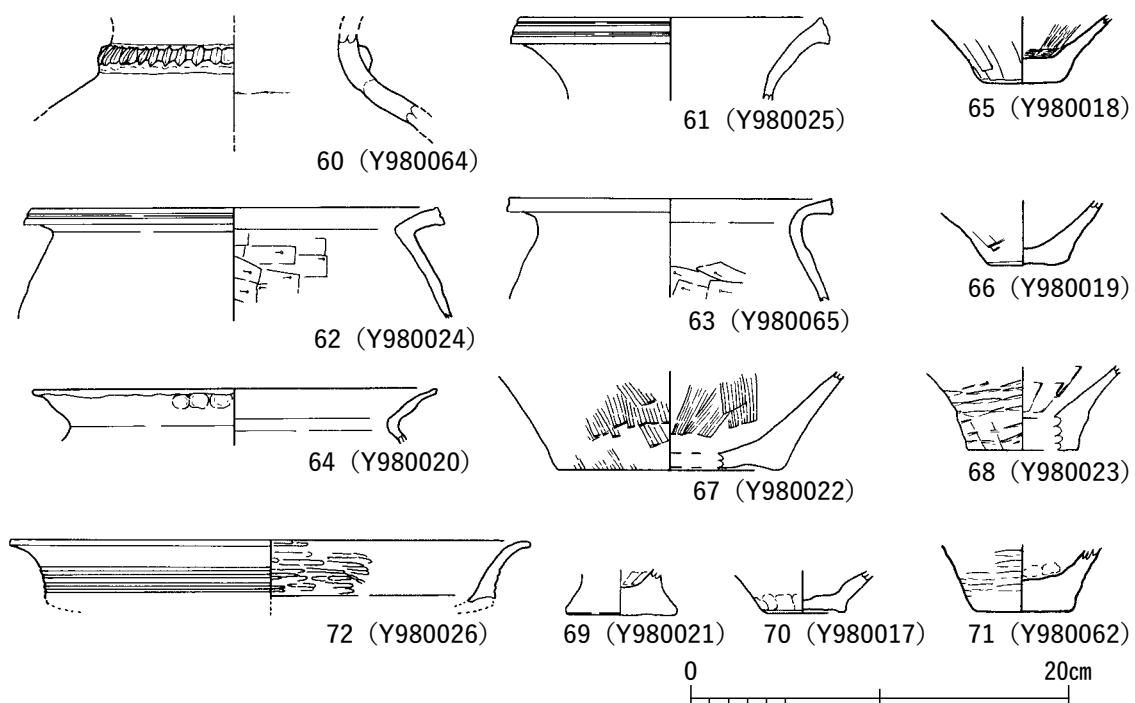
56は高杯の脚端部である。端部は外方に肥厚し、端面を有する。端面に1条、外面に2条の退化凹線を巡らせる。内面はヘラ削りで成形し、裾部に径0.5cmの小さな円形の透孔を2個一対で穿つ。

54、57～59は壺の底部である。54は大きくしっかりとした突出する平底の底部であるが、外面の周縁部が下方からの圧力により角が丸みを帯びる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、厚みがある。内外面は板ナデ調整である。57も大きくしっかりとした平底の底部で、底部外面に叩きの痕跡を残す。体部外面は、ハケ調整により叩きを消す。58は大きくしっかりとした突出する底部で、周縁部が土手状に高まり、上げ底気味になる。体部の立ち上がりは直線的で、内外面板ナデ調整またはナデ調整により仕上げる。59は指押さえによる成形で周縁部が突出気味に高まり、上げ底気味となる底部である。側面に指頭痕を明瞭に残し、そこから立ち上がる体部は直線的である。体部内面は板ナデ、外面をハケ調整で仕上げる。

これら上・中層の土器は、最下層の土器に比べ新しい要素が認められるが、後半期に下るものは少なく、後期前葉の土器と考えられる。

(3) 遺物包含層出土土器 (第16図 60～72)

60、61は壺である。60は厚みを持った大型の壺頸部である。体部との境に刻みを入れた突帶1条を張り付ける。61は外反して開く広口壺の口縁部である。端部を上下に肥厚させ、内傾する端面を持つ。やや丸みを帯びた端面には2条の擬凹線を施す。



第16図 遺物包含層出土土器

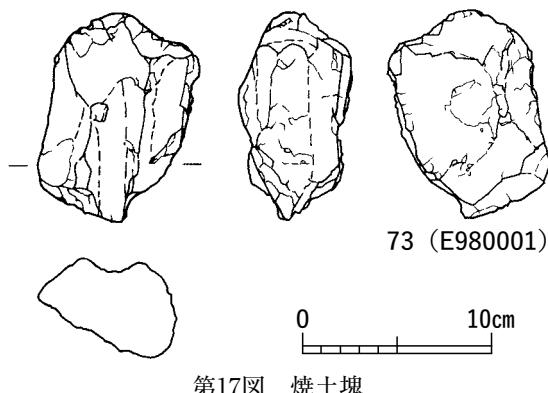
62～64は甕の口縁部である。62は屈折して「く」の字状に開く口縁部である。頸部の屈折は鋭角で、内面には明瞭な稜を形成する。端部には内傾する面を有し、1条の凹線を巡らせる。口縁部は、丁寧なヨコナデ調整、体部外面はハケ又は板ナデ、内面は頸部付近までヘラ削りを施す。63も体部内面にヘラ削りを施す甕である。外反して開く口縁部はヨコナデ調整であるが、外反する頸部内面はゆるやかな曲線を描き、稜は認めない。ヨコナデ調整により口縁端部は直立する面をもつがヨコナデは弱く、外面の一部に指押さえの痕跡を残す。64も屈折して開く口縁部であるが、指押さえによる成形の後の調整が省略化傾向にあるため外面に指押さえによる凹凸が顕著に残るほか、面形成を意識した端面下端が波打つ状態になっている。

65～71は底部である。65、67は壺の底部である。65の周縁部の角は、外面の板ナデ調整により丸みを帯び、丸底を意識した傾向が認められる。内面は板ナデ調整である。67は大きな平底の底部である。指押さえにより外面の周囲がわずかにくぼみ、周縁部に厚みを持つ。内外面ともにハケ調整である。66、68、70、71は甕の底部である。66は中央部がくぼむドーナツ底を内外面からの調整により平底様に平坦化する。68、71は厚みのある小型の底部である。内面は板ナデ調整で、外面に叩きを残す。71の周縁部角は丸みを帯びる。70は外面周縁部が指押さえにより高台様に突出する。側面には指頭痕が明瞭に残る。69は鉢の底部である。厚みのある平底で、端部が外方へ大きく張り出す。内面に板ナデの調整痕を残す。72は有稜高杯である。口縁部は強く外反し、下半に4条の沈線を巡らす。内面にはヘラミガキが認められる。

2 土製品 (第17図 73)

火を受け、焼け固まった粘土の塊が出土している。粘土には多くの砂粒を含み、表面には不規則な凹凸が認められる。図化した資料は、長さ11.0cm、幅8.6cm、厚さ5.4cm、重さ366.4gの塊で、両端部などは破断面となることから、本来はもう少し大きな塊であったものと想定できる。表面は被熱により硬化している。明るい黄褐色を呈する表面色調とは異なり、中心部は暗い灰色を呈し、被熱温度に差があることがわかる。表面中央部には、長さ7.5cm、幅約3cm程度の管状のものが接していたような凹みが認められる。五斗長垣内遺跡の鍛冶工房で出土している粘土塊とよばれる土製品に共通する特徴を持つ遺物である。

調査区中央部の段状遺構S X - 9 8 0 2が検出された周辺の遺物包含層から出土している。



第17図 燃土塊

3 石器

石器は、大半がサヌカイト製の打製石器である。器種組成は、石鏸、石錐、削器のほか、楔形石器や使用痕・加工痕のある剥片などがある。それ以外に石器製作時に生成されたとみられる剥片や石核なども認められるが、それらは一部を図化し、その他は出土地点毎に点数と重さを集計し、地点別の出土傾向を報告することとした。これらサヌカイト製石器は各遺構や遺物包含層から出土しており、それら出土地点毎にまとめて報告する。また、サヌカイト製石器の中に、赤色物が付着するものが7点確認され

た。ベンガラにも見えるものであったことから、その内の3点について科学分析を行った。なお、それ以外には石英の円礫に使用痕が残り、道具として用いたとみられる石器が3点確認されている。それらについては、サヌカイト製石器とは項をあらため、その他の石器として報告する。

(1) 壓穴建物 (SH-9801) 出土石器 (第18図 1~6)

壓穴建物 (SH-9801) 出土石器は、サヌカイト製の打製石器6点を図化した。

1は石鎌である。三角形短茎式で、先端部を欠く。左右のバランスを欠くが、一方の闇を欠損する。断面は、平たんな裏面に比べ表面はふくらみを持ち、最大厚が0.9cmの厚みのある鎌である。

2~4は楔形石器である。いずれも方形に近い形で、2は隣り合う二辺に階段状の剥離痕を認める。3と4は向かいあう二辺に階段状の剥離痕を残し、それを結ぶ一辺が剪断面となる。

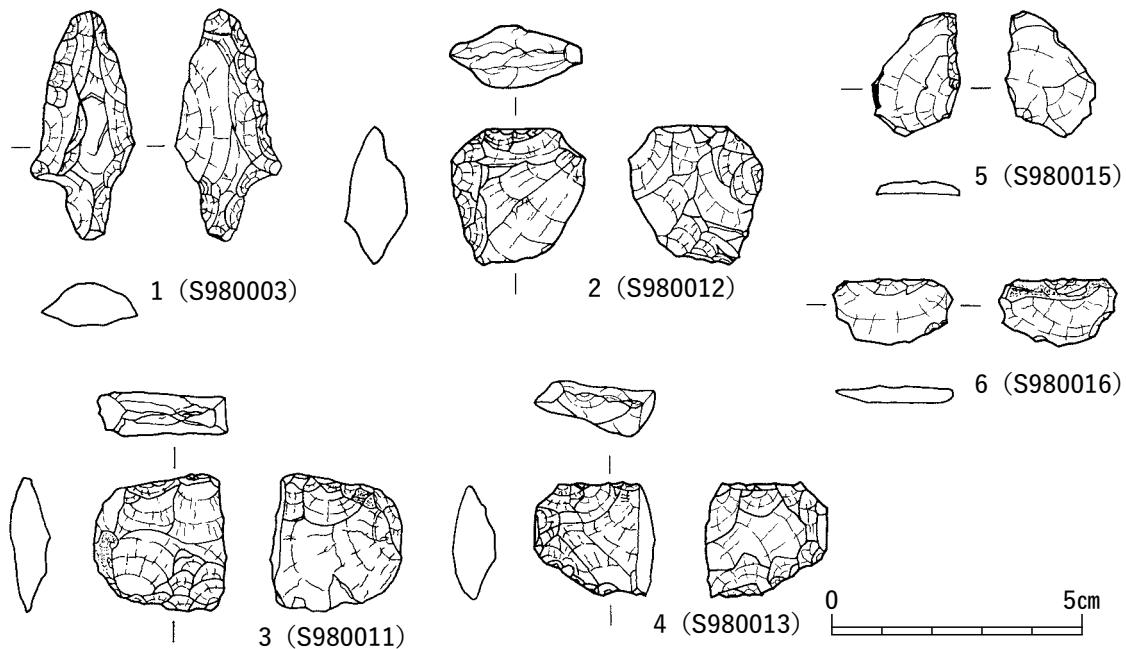
5、6は剥片である。5は全長2.5cm、厚さ0.3cmの扇形を呈する小さな剥片である。16は縦1.3cm、横2.4cm、厚さ0.3cmの横長の剥片で、直線的な一辺に原礫面を残す。曲線的な一辺に欠けが認められ、使用痕の可能性もある。

(2) 段状遺構 (SX-9802) 出土石器 (第19・20図 7~25)

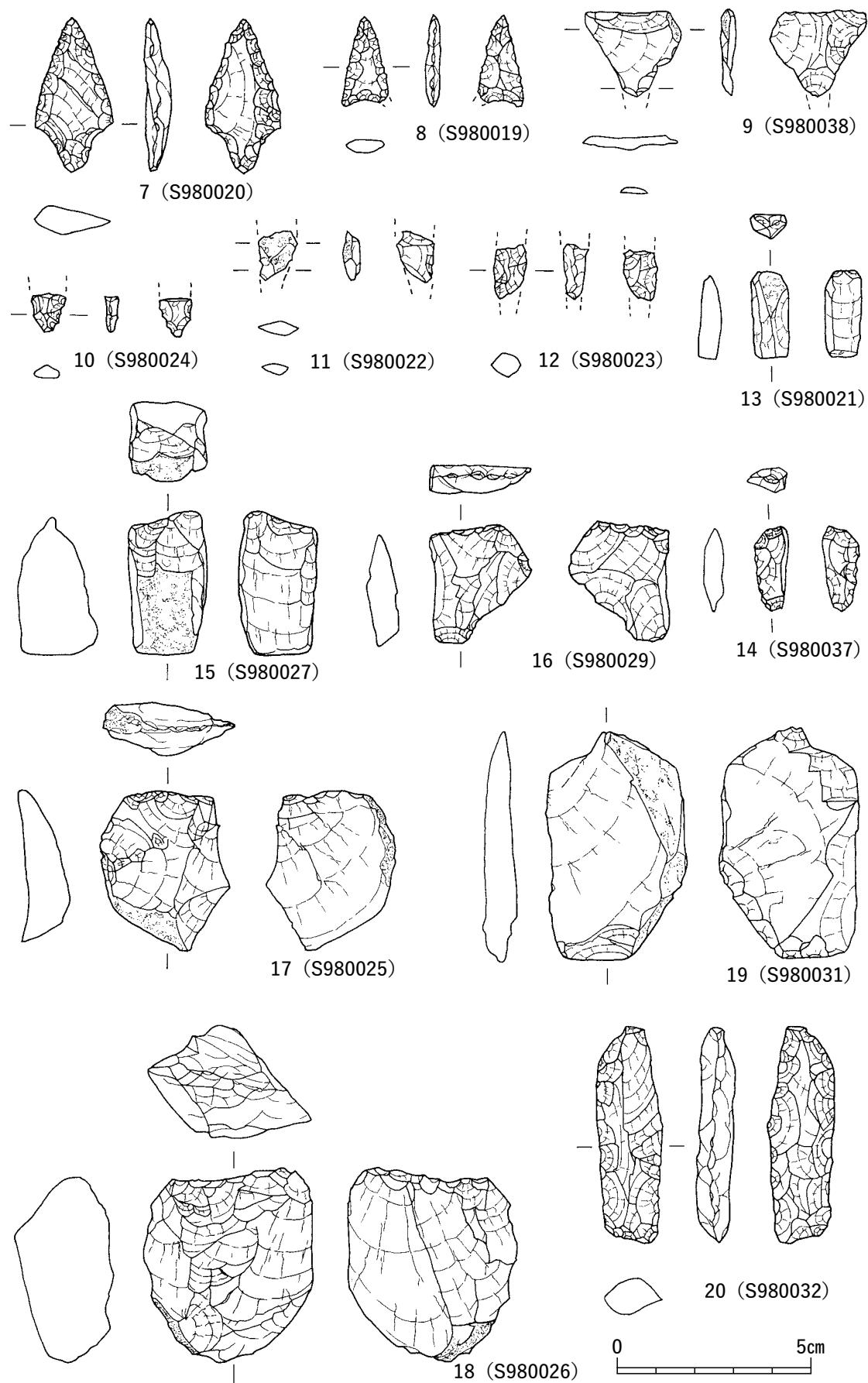
段状遺構 (SX-9802) 出土石器は、サヌカイト製の打製石器19点を図化した。

7、8は石鎌である。7は三角形短茎式である。二側縁は直線的で、先端部は鋭角を成す。一方が厚い楔形断面の横長剥片に刃部加工を施した鎌で、両側縁で厚みが異なる。8は三角形凹基式鎌である。二側縁は直線的で、基部両端は鋭角で尖る。全長2.3cmの小型の鎌である。10は、錐の先端部片の可能性もあるが、先端に錐特有の回転痕が認められないことから石鎌の先端部の可能性が高い。

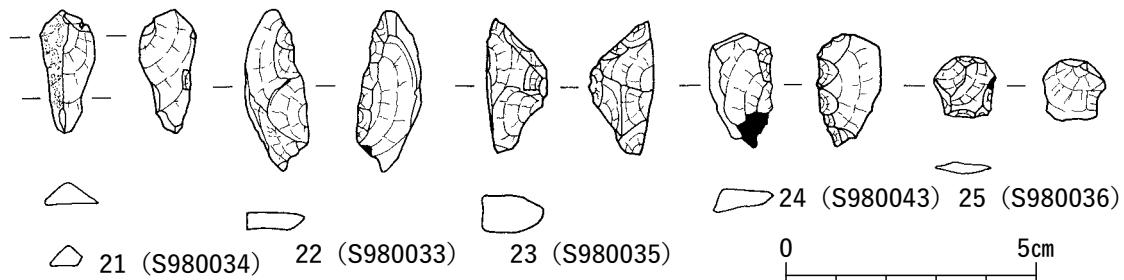
9はつまみ部の形状が明らかな錐である。三角形を呈する剥片の一角を加工し、錐部を作りだしたもので、先端を欠く。錐部からつまみ部に向けて横方向に開き、T字状に作り出すT字有頭式である。作りだされた錐部は短かったものと想定される。12は錐部の断片である。断面が菱形を呈し、厚さ0.5cmで厚みのある断面である。11は厚さ0.3cmと薄く、上下両端を欠く。錐部の断片の可能性もある。



第18図 SH-9801出土石器



第19図 SX-9802出土石器①



第20図 SX-9802出土石器②

13、14は縦長の剥片である。いずれも長さ約2cm、幅1cm弱で、短辺に階段状の剥離痕を残し、長辺が剪断面となる。スパール様に小口側からの剥離により、断面が三角形の縦長剥片を作り出し、厚みを確保する方法が採られていることから、石錐の未製品の可能性がある。

15～17は楔形石器である。15は表面に原礫面を残す厚さ3.8cmの長方形剥片で、短辺の一辺に剥離痕が認められる。長辺は裁断面となる。16は向かいあう二辺の長さが異なる台形の剥片で、平行する二辺に剥離痕を認める。一側縁は裁断面となる。17は不定型な剥片の一辺に剥離面を認めるものである。他の側縁には原礫面が残る。

18は厚さ2.8cmと厚みのある石核である。

19、20は削器である。19は厚さ1.0cm、一部に原礫面を残す長方形の剥片の縁辺に使用痕が認められる。20は長さ5.6cm、幅1.6cmの縦長剥片の両側縁に鋭利な刃部加工を施す。厚さ0.9cmとやや厚みのある削器である。20には赤色付着物が認められる。

21～25は剥片である。一辺が1.2～3.2cmの小さな剥片であるが、21～23には一部に加工痕が認められるもので、利器としての使用が想定できる。21、22、24には赤色付着物が認められる。

(3) 遺物包含層出土石器 (第21・22図 26～44)

26は石鎌である。三角形短茎式の鎌で、二側縁がやや湾曲し、先端部はやや丸みを帯びる。

27は剥片である。全長2cm程度の小さな三角形を呈するもので、二次的な加工痕が認められる。先端部を欠いており、小さな鎌の可能性もある。

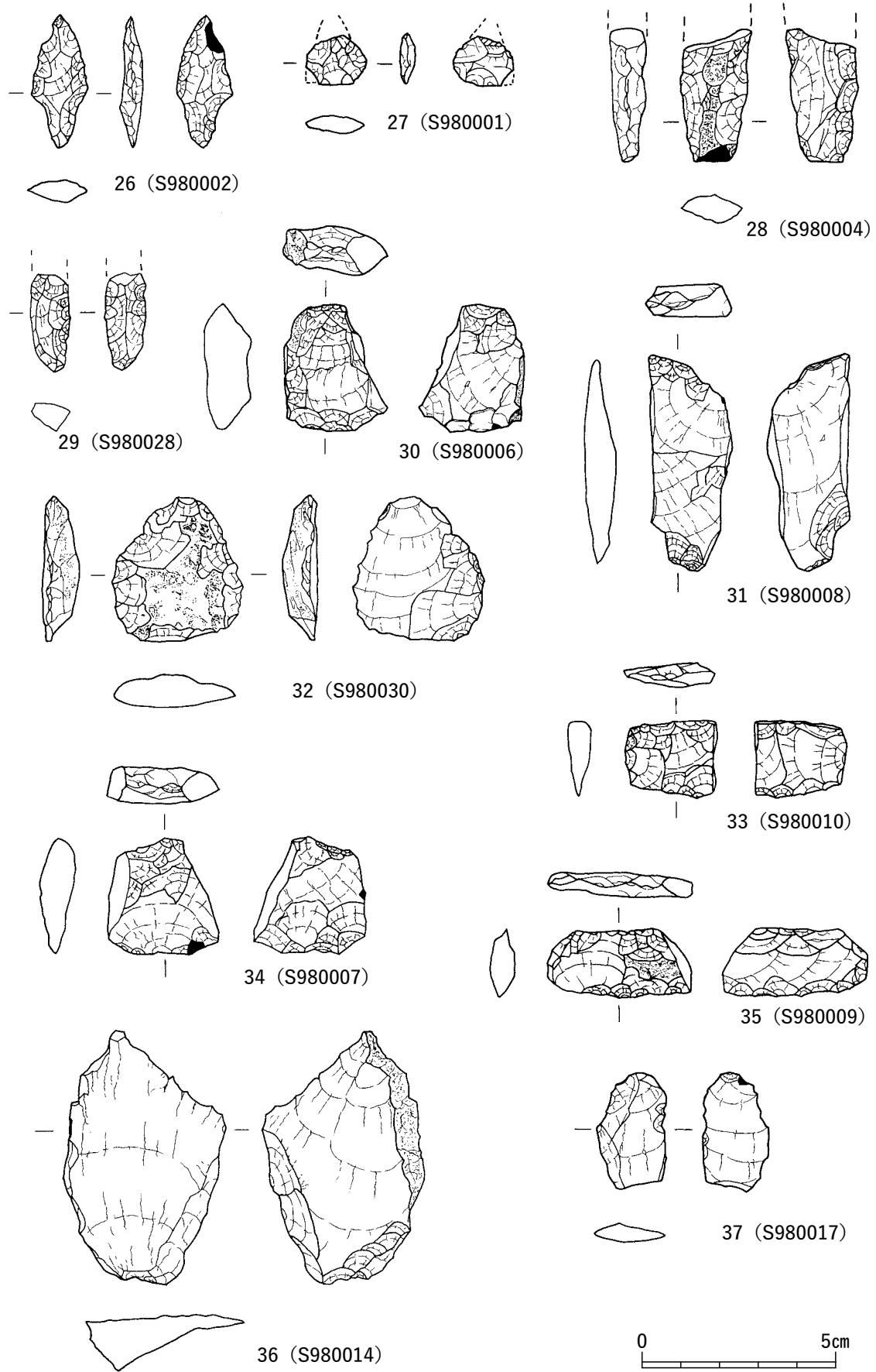
28、32は削器である。28は残存長3.4cm、幅1.9cmの縦長剥片の両側縁に刃部加工を施す。両端を欠いており、石鎌の未製品の可能性もある。32は橢円形剥片の背面に原礫面を残し、側縁に連続する刃部加工を施すものである。

29は石錐である。全長2.5cmで、基部を欠く。先端部に回転痕が認められる。断面が三角形を呈する錐である。表面に赤色物が付着する。

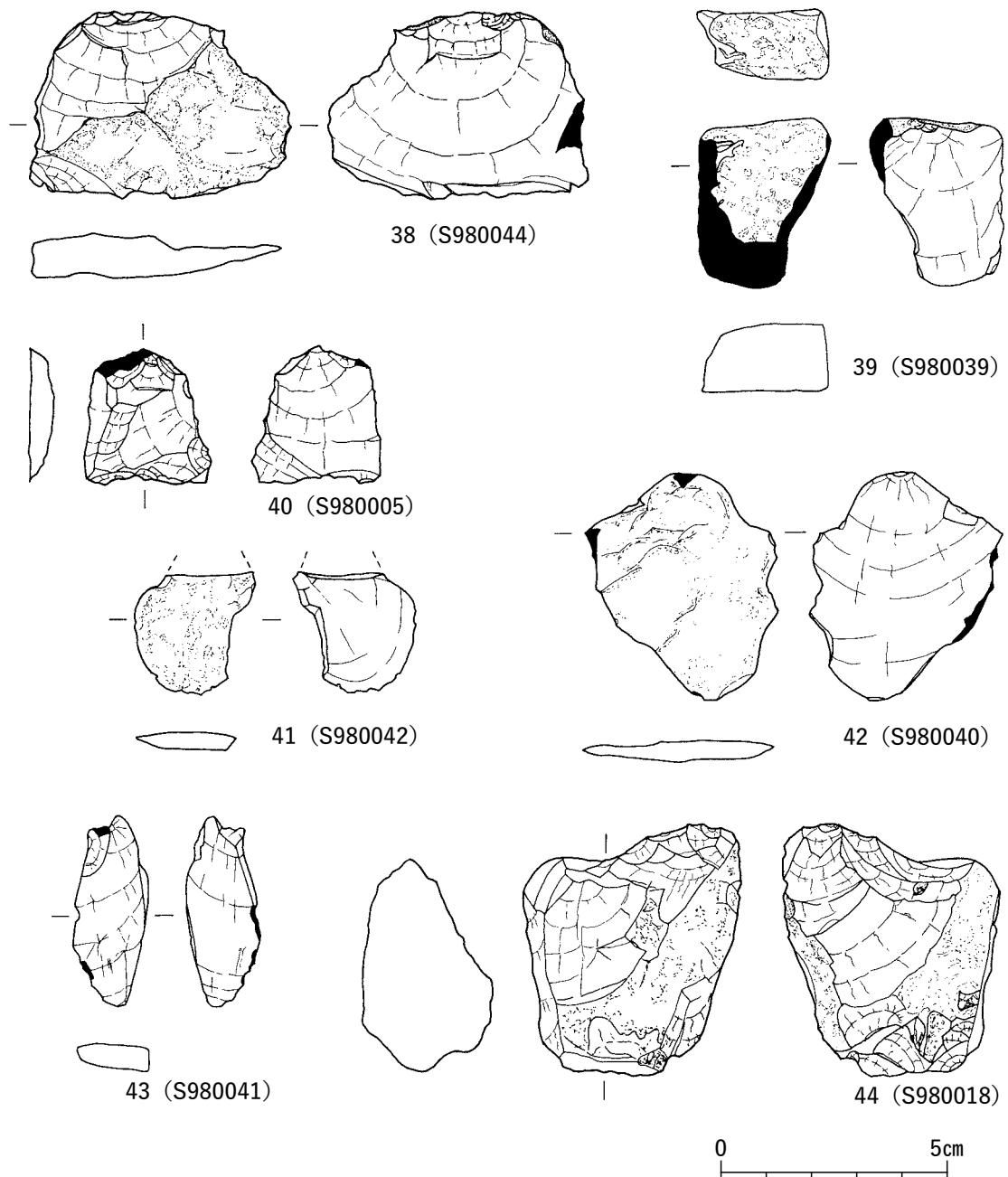
30、31、33～35は楔形石器である。30は台形の相対する平行した二辺とそれを結ぶ一辺の三辺に剥離痕を有する。残りの一辺は剪断面となる。31は長方形の相対する短辺二辺に剥離面を持ち、長辺の二辺は剪断面となる。34は台形の相対する二辺に剥離面があり、残る二辺は剪断面となる。33は横長剥片の長辺二辺に剥離面があり、短辺の一辺が剪断面となる。33は削器の可能性もある。

36～38、40～43は剥片である。その内、36、40には二次的な加工痕が認められる。背面に原礫面を残す38、41、42と両面が剥離面となる40、43がある。

39、44は石核である。39は長さ3.7cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmで背面に原礫面が残る。39は長さ5.6cm、4.7cmで、厚さ2.8cmの両面に原礫面が残る。いずれも小さめの円礫から剥片を採取したものと考えられる。



第21図 遺物包含層出土石器①



第22図 遺物包含層出土石器②

39には赤色物の付着が認められる。

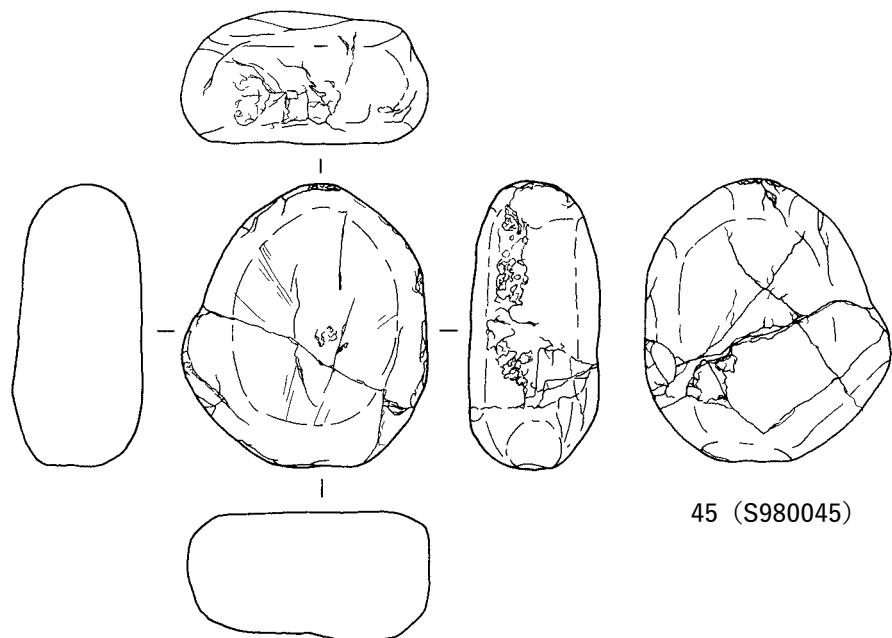
(4) サヌカイト剥片

図化できなかった剥片の一覧を、表1にまとめた。出土した剥片の総重量は333.0gで、これは出土したサヌカイト製石器の総重量655.1gの50.8%に相当する。出土した地点別にみれば、E地区と段状遺構(S-X-9802)から多く出土する傾向がうかがえる。

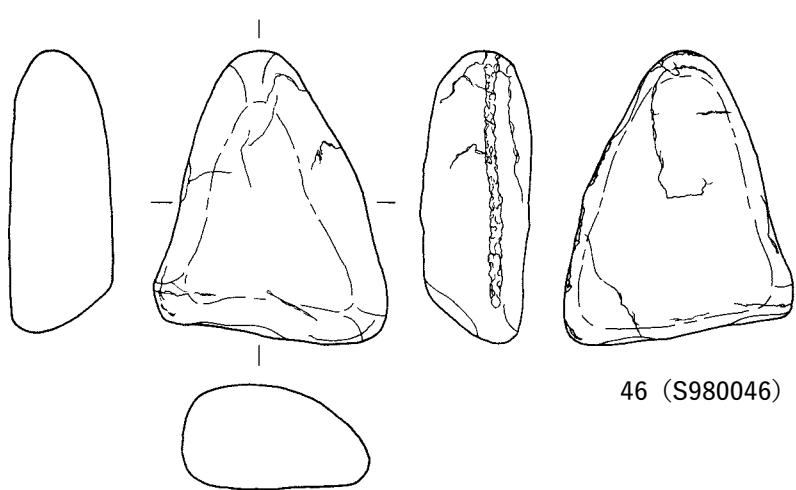
取上番号	遺構	地区	層位	タテ	ヨコ	厚さ	重さ(g)	備考
2	A ~ B			6.3	3.3	1.1	20.2	
12	E1		2	2.1	1.5	0.2	0.6	
129	E2		1	1.2	1.4	0.2	0.2	
129	E2		1	1.5	1.5	0.3	0.6	
129	E2		1	1.9	2.3	0.2	0.8	
129	E2		1	2.1	3.1	0.5	2.7	
129	E2		1	2.4	1.0	0.4	0.7	
14	E3			6.0	6.6	2.5	71.4	
109	E		1	2.4	1.2	0.3	1.2	
109	E		1	2.7	1.6	0.4	1.7	
115	E		1	3.0	1.3	0.7	2.4	
115	E		1	2.8	1.7	0.5	2.2	
116	E		2	1.7	1.9	0.2	0.9	
116	E		2	1.6	1.2	0.2	0.3	
116	E		2	1.4	1.1	1.3	0.4	
116	E		2	1.3	1.0	0.3	0.2	
116	E		2	1.0	1.0	0.2	0.2	
123	E			1.5	1.7	0.5	1.5	
123	E			1.4	1.6	0.3	0.5	
35	E	地山直上		5.1	3.5	1.4	26.8	
31	F1	1~2		1.3	3.0	0.5	1.7	
31	F1	1~2		1.6	0.7	0.3	0.2	
31	F1	1~2		1.5	1.6	0.6	1.3	
31	F1	1~2		1.3	1.7	0.3	0.7	
124	F			1.1	1.4	0.2	0.7	
124	F			2.4	1.6	0.3	0.9	
124	F			2.4	1.8	0.3	1.4	
124	F			3.3	1.4	0.4	1.4	
124	F			2.5	1.6	0.3	1.4	
37	G			1.8	2.1	0.5	1.8	
37	G			1.8	2.1	0.4	1.3	
40	SX-9802	北東	上	2.6	2.5	0.6	2.5	
40	SX-9802	北東	上	1.9	2.3	0.8	3.7	折れ
40	SX-9802	北東	上	1.9	2.6	0.8	2.4	折れ
40	SX-9802	北東	上	1.6	2.2	0.3	1.3	
40	SX-9802	北東	上	1.6	1.6	0.3	0.5	
40	SX-9802	北東	上	1.5	0.8	0.3	0.5	折れ
40	SX-9802	北東	上	1.4	1.2	0.2	0.3	
40	SX-9802	北東	上	1.2	0.9	0.2	0.3	
40	SX-9802	北東	上	1.0	1.1	0.2	0.1	
40	SX-9802	北東	上	1.0	0.6	0.2	0.1	折れ
41	SX-9802	北西	上	2.0	2.2	1.0	3.4	
41	SX-9802	北西	上	1.8	1.7	0.7	1.3	
41	SX-9802	北西	上	2.0	1.5	0.3	0.5	
41	SX-9802	北西	上	1.7	1.5	0.3	0.7	
41	SX-9802	北西	上	1.3	1.2	0.5	1.0	
41	SX-9802	北西	上	1.6	0.9	0.3	0.3	
41	SX-9802	北西	上	1.7	1.0	0.1	0.1	
41	SX-9802	北西	上	1.2	1.2	0.3	0.4	
41	SX-9802	北西	上	1.1	1.2	0.2	0.3	
41	SX-9802	北西	上	1.4	0.9	0.2	0.3	
41	SX-9802	北西	上	1.8	0.9	0.2	0.2	
41	SX-9802	北西	上	1.7	0.8	0.3	0.4	
41	SX-9802	北西	上	2.0	0.9	0.3	0.4	
41	SX-9802	北西	上	1.0	0.9	0.2	0.2	
41	SX-9802	北西	上	0.8	0.9	0.2	0.2	
41	SX-9802	北西	上	1.0	0.9	0.1	0.1	
41	SX-9802	北西	上	0.5	1.2	0.1	0.1	
41	SX-9802	北西	上	0.8	1.0	0.2	0.1	
41	SX-9802	北西	上	0.7	1.1	0.1	0.2	
42	SX-9802	南東	上	0.6	1.2	0.1	0.1	
43	SX-9802	南西	上	2.4	1.6	0.2	0.9	
43	SX-9802	南西	上	1.9	1.7	0.3	0.9	
43	SX-9802	南西	上	2.2	1.3	0.3	0.7	
43	SX-9802	南西	上	2.9	0.9	0.3	0.8	
43	SX-9802	南西	上	1.2	1.3	0.5	0.7	
43	SX-9802	南西	上	2.0	1.0	0.2	0.5	
43	SX-9802	南西	上	1.2	1.8	0.2	0.4	
43	SX-9802	南西	上	1.4	1.4	0.2	0.4	
43	SX-9802	南西	上	1.3	1.2	0.2	0.3	
43	SX-9802	南西	上	1.3	1.0	0.3	0.3	
43	SX-9802	南西	上	1.3	1.0	0.2	0.2	

取上番号	遺構	地区	層位	タテ	ヨコ	厚さ	重さ(g)	備考
43	SX-9802	南西	上	1.0	1.4	0.1	0.2	
43	SX-9802	南西	上	1.3	1.1	0.2	0.2	
43	SX-9802	南西	上	0.6	1.3	0.2	0.1	
43	SX-9802	南西	上	1.0	0.9	0.2	0.1	
43	SX-9802	南西	上	0.9	0.5	0.1	0.1	
45	SX-9802	南東	下	1.3	1.4	0.2	0.4	
46	SX-9802	南西	下	3.2	1.8	0.5	2.6	
46	SX-9802	南西	下	1.4	2.2	0.4	0.8	
46	SX-9802	南西	下	2.6	3.0	0.5	4.4	
46	SX-9802	南西	下	1.5	2.7	0.4	1.2	
46	SX-9802	南西	下	2.5	1.7	0.7	2.5	
46	SX-9802	南西	下	1.9	2.0	0.6	1.7	
46	SX-9802	南西	下	1.2	2.9	0.4	0.9	
46	SX-9802	南西	下	1.5	2.1	0.3	0.7	
46	SX-9802	南西	下	2.2	1.8	0.6	1.1	
46	SX-9802	南西	下	1.7	2.0	0.4	0.8	
46	SX-9802	南西	下	1.2	2.1	0.3	0.6	
46	SX-9802	南西	下	1.2	1.9	0.4	0.9	
46	SX-9802	南西	下	1.3	1.8	0.2	0.5	
46	SX-9802	南西	下	1.2	1.8	0.3	0.5	
46	SX-9802	南西	下	1.1	1.7	0.3	0.4	
46	SX-9802	南西	下	1.5	1.3	0.4	0.6	
46	SX-9802	南西	下	1.3	1.3	0.5	0.6	
46	SX-9802	南西	下	1.7	1.0	0.3	0.3	
46	SX-9802	南西	下	1.7	0.8	0.3	0.3	
46	SX-9802	南西	下	1.2	0.9	0.8	0.8	
46	SX-9802	南西	下	0.7	1.2	0.3	0.2	
46	SX-9802	南西	下	1.3	0.9	0.3	0.3	
46	SX-9802	南西	下	1.2	1.0	0.4	0.4	
46	SX-9802	南西	下	1.4	0.8	0.3	0.2	
46	SX-9802	南西	下				1.2	多数
48	SX-9802	中央セクション		2.1	2.1	0.5	1.6	
48	SX-9802	中央セクション		1.7	1.9	0.3	1.1	
48	SX-9802	中央セクション		1.9	1.6	0.4	1.6	
48	SX-9802	中央セクション		1.5	1.0	0.5	0.6	
48	SX-9802	中央セクション		0.8	0.7	0.1	0.1	
48	SX-9802	中央セクション		0.6	1.1	0.2	0.1	
48	SX-9802	中央セクション		2.4	2.5	0.3	2.2	
49	SX-9802	中央セクション		1.4	1.6	0.2	0.7	
49	SX-9802	中央セクション		1.2	1.5	0.2	0.4	
49	SX-9802	中央セクション		1.2	1.1	0.2	0.5	
49	SX-9802	中央セクション		0.8	1.0	0.2	0.2	
49	SX-9802	中央セクション					0.1	多数
50	SX-9802	北東	下	2.2	2.3	1.2	5.7	
50	SX-9802	北東	下	1.2	1.8	0.8	1.0	
50	SX-9802	北東	下	2.3	4.0	0.5	4.4	
50	SX-9802	北東	下	2.3	1.6	0.5	1.5	
50	SX-9802	北東	下	1.3	1.3	0.2	0.3	
50	SX-9802	北東	下	1.1	0.9	0.7	0.3	
50	SX-9802	北東	下	1.4	0.6	0.2	0.2	
50	SX-9802	北東	下	0.8	1.4	0.2	0.1	
51	SX-9802	北西	下	2.5	1.7	0.9	2.1	
56	SX-9802	中央セクション		1.8	5.3	0.8	6.3	
56	SX-9802	中央セクション		1.4	2.3	0.3	0.9	
56	SX-9802	中央セクション		0.8	2.4	0.4	0.5	
56	SX-9802	中央セクション		1.1	2.0	0.2	0.4	
56	SX-9802	中央セクション		1.8	1.1	0.1	0.2	
56	SX-9802	中央セクション		1.4	1.4	0.3	0.5	
56	SX-9802	中央セクション		1.5	1.7	0.3	0.8	
56	SX-9802	中央セクション		1.1	1.1	0.3	0.4	
56	SX-9802	中央セクション		1.0	1.1	0.2	0.1	
56	SX-9802	中央セクション		1.6	1.0	0.2	0.2	
56	SX-9802	中央セクション		0.9	1.4	0.2	0.3	
56	SX-9802	中央セクション		1.2	1.0	0.2	0.1	
56	SX-9802	中央セクション		1.2	1.1	0.2	0.3	
56	SX-9802	中央セクション		0.5	1.2	0.2	0.1	
56	SX-9802	中央セクション		0.7	0.8	0.2	0.1	
56	SX-9802	中央セクション		0.6	0.9	0.3	0.1	
56	SX-9802	中央セクション		1.4	1.5	0.4	0.5	
98	SH-9801			2	2.6	2.5	0.4	3.2
99	SH-9801	北拡張部		2	1.1	1.2	0.2	0.2
114	SH-9801	中央セクション		3	2.7	2.0	1.2	4.4

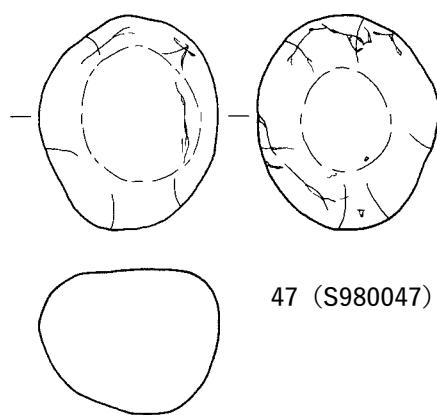
表1 未図化剥片一覧表



45 (S980045)



46 (S980046)



47 (S980047)



第23図 その他の石器

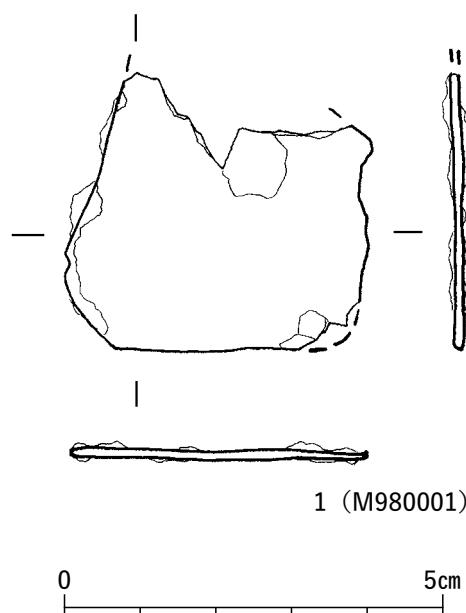
(5) その他の石器 (第23図 45~47)

石英製の石器3点をその他の石器として報告する。45は段状遺構 (S X - 9 8 0 2) 出土石器である。11.2cm×9.7cm、厚さが5.0cmの楕円形で扁平な石器で、中央部で割れている。平坦な一面が平滑で、顯著な磨り痕が認められることから磨石とした。側面には敲打痕が認められることから、敲石としても使用された可能性がある。46は遺物包含層から出土した石器である。長径が11.6cm、短径が9.2cm、厚さ4.2cmの三角形を呈する扁平な石器である。三角形の一辺に弱いながら敲打痕が認められることから敲石として扱った。47は竪穴建物 (S H - 9 8 0 1) 出土の石器である。8.5cm×7.5cm、厚さ5.8cmの円礫の一面が平坦な形状で、その面が平滑であることから磨石とした。

4 鉄器 (第24図 1)

鉄器は、竪穴建物 (S H - 9 8 0 1) から出土した。厚さ1.0~1.5mmの板状鉄製品であり、上縁に破面をもつ。下縁は直線的であり、その左端部はやや角をもって斜めに立ち上がり、曲線的な側縁にいたる。右端部はわずかな欠損部を介して緩やかな曲線を描きながら立ち上がる。いずれの縁辺にも刃部は確認されず、均質な厚みをもつ鉄板である。現存長3.6cm、最大幅4.1cmを測る。

出土位置は、南西拡張部となっており、壺1や甕3と一緒に取り上げられていることから、西側土器に伴う可能性がある。



第24図 鉄器

第IV章 科学分析

第1節 レプリカ法による土器種実圧痕の同定

1 はじめに

舟木遺跡の弥生時代後期の土器に確認された種実圧痕の可能性がある圧痕について、レプリカ法により同定した。

2 資料と方法

資料は、あらかじめ淡路市教育委員会によって種実の圧痕がついている可能性があると判断され、抽出された土器2点である。土器の時期は、弥生時代後期である。

分析では、まず肉眼および実体顕微鏡を用いて土器を観察し、圧痕について丑野・田川（1991）などを参考に、次の手順でレプリカを作製した。はじめに、圧痕内を水で洗い、パラロイドB72の9%アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、シリコン樹脂（JMシリコン レギュラータイプ）を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後は、アセトンを用いて圧痕内および周囲の離型剤を除去した。

次に、作製したレプリカを実体顕微鏡下で観察し、同定の根拠となる部位が残っている圧痕レプリカを同定した。その後、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510）で観察、撮影を行い、計測可能な個体については計測した。

3 結果

2点の土器から4点の圧痕のレプリカを作製し、同定した結果、いずれも草本植物のイネ科と同定された（表1）。以下では、分類群の記載を行い、図版に走査型電子顕微鏡写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003）に準拠した。

（1）イネ *Oryza sativa L.* 粉 イネ科

上面観が橢円形で、側面観が長橢円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。断面に厚みがある点で、粉殻ではなく粉であると判断した。

表1 舟木遺跡出土土器の圧痕同定結果一覧（大きさの括弧内は残存値）

試料No.	遺物番号	地区	部位	位置	時期	同定結果		大きさ (mm)		
						分類群	部位	長さ	幅	厚さ
1	28(Y980053)	-	底部	外面	弥生時代後期	イネ	粉	6.4	3.2	2.5
2						イネ	粉	6.7	3.6	(1.9)
3	189*	Tr8 B-1	底部	外面	弥生時代後期	イネ	粉	-	-	-
4						イネ	粉	-	-	-

*令和2(2020)年度発掘調査出土土器で、詳細は今後刊行する報告書に掲載予定。

4 考察

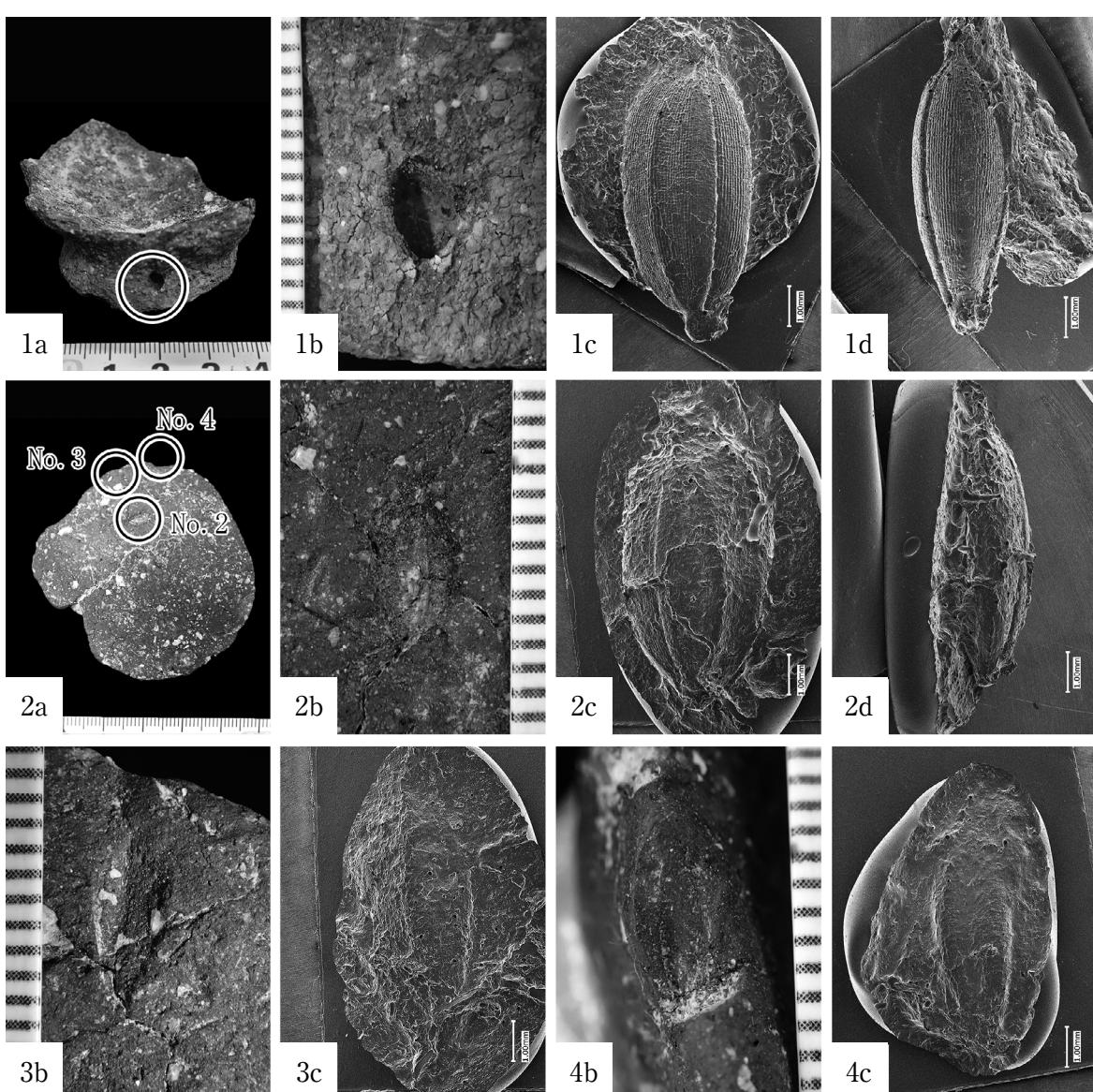
舟木遺跡の弥生時代後期の土器に確認された種実圧痕のレプリカを同定した結果、穀物のイネが確認された。イネ圧痕は粉の状態であり、イネの保管や脱穀の場と土器製作の場が近かった可能性があ

る。なお、近畿地方で最も古いイネ圧痕は、伊丹市口酒井遺跡の口酒井式土器に確認されている（中沢、2019）。レプリカ法によって同定された事例がまだ少ない近畿地方において、今回の試料は弥生時代後期の事例として重要である。今後悉皆的な圧痕調査が行われれば、さらに試料が増えると期待される。

山本 華（パレオ・ラボ）

引用文献

- 中沢道彦（2019）レプリカ法による土器圧痕分析からみた弥生開始期の大陸系穀物. 考古学ジャーナル, 729, 14-19.
- 丑野 穀・田川裕美（1991）レプリカ法による土器圧痕の観察. 考古学と自然科学, 24, 13-36.
- 米倉浩司・梶田 忠（2003）BG Plants 和名－学名インデックス（YList）, <http://ylist.info>



図版1 舟木遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真

1. イネ粉（No.1）、2. イネ粉（No.2）、3. イネ粉（No.3）、4. イネ粉（No.4）
- a : 土器写真（スケール：1目盛り 1mm、○：圧痕の位置）、b : 圧痕部分の拡大写真（スケール：1目盛り 1mm）、
c・d : 圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真

第2節 石器の蛍光X線分析

1 はじめに

淡路市舟木に所在する舟木遺跡より出土したサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象試料は、遺跡より出土したサヌカイト製石器8点である（表1）。試料は、サンドブラストを用いて風化層を一部除去し、新鮮な面を露出させて測定箇所とした。

表1 分析対象遺物

試料No.	遺跡名(略号)	遺物番号	器種	地区	遺構	土層	出土年月日
1	DNFKb(NFK16)	4 (S980013)	楔形石器		SH-9801 南側拡張部		1998年11月27日
2	DNFKb(NFK16)	5 (S980015)	剥片		SH-9801 北拡張部	2層	1998年11月25日
3	DNFKb(NFK16)	44(S980018)	石核	E		1層	1998年12月4日
4	DNFKb(NFK17)	8 (S980019)	石鏃	E	SX-9802 北東	上層	1999年1月19日
5	DNFKb(NFK17)	7 (S980020)	石鏃	E	SX-9802	中央セクション	1999年1月21日
6	DNFKb(NFK17)	15(S980027)	楔形石器	E	SX-9802 南西	下層	1999年1月21日
7	DNFKb(NFK17)	9 (S980038)	石錐	E	SX-9802 北西	上層	1999年1月19日
8	DNFKb(NFK17)	42(S980040)	剥片	B			1998年8月26日

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を、サヌカイトに適用した。方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

表2 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
奈良	讃岐	春日山	春日山みかん畑内(10)
		国分台1	自衛隊演習場付近(21)、神谷神社付近(8)、高産靈神社谷(1)、国分台下みかん畑(4)、蓮光寺山南東麓(1)
		国分台2	神谷神社付近(3)、高産靈神社谷(4)
		国分台3	自衛隊演習場付近(1)、神谷神社付近(2)、高産靈神社谷(7)、国分台下みかん畑(1)、蓮光寺山南東麓(25)、出雲神社周辺(5)
		赤子谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)
		法印谷	法印谷(10)
		金山1	北峰道路脇(9)、金山南麓(8)、金山北東部(27)
		金山2	北峰道路脇(1)、金山南麓(23)
		城山	城山南側(5)、城山北側(5)
		東奥1	雄山(5)、雌山(5)、神谷神社付近(4)、出雲神社周辺(23)、奥池付近(11)
		東奥2	神谷神社付近(3)、出雲神社周辺(2)、奥池付近(5)
		双子山	双子山南嶺(10)
		香色山	佐伯神社付近(30)、宮ヶ尾古墳周辺(1)
		大麻山北麓	宮ヶ尾古墳周辺(2)

1) Rb分率=Rb強度 × 100 / (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
2) Sr分率=Sr 強度 × 100 / (Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
3) Mn強度 × 100 / Fe強度
4) log(Fe強度/K強度)
そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度 × 100 /

Fe強度の判別図（1）と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図（2）を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。

さらに、上記指標値に加え、サヌカイト用に以下の2指標値を計算し、この2指標値を用いた判別図（3）も作成した。

$$5) \text{ Zr分率} = \text{Zr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$6) \text{ Ca強度} / \text{K強度}$$

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。表2にサヌカイトの判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を示す。

3 分析結果

表3にサヌカイト製石器の測定値および算出された指標値を、図1～3に、サヌカイト原石の判別図にサヌカイト製石器の分析結果をプロットした図を示す。判別図では視覚的にわかりやすくするために、各判別群を機能で取り囲んである。

測定の結果、試料No.5が金山1群の範囲にプロットされた。その他7点は、いずれも合致する判別群がなく、産地不明であった。ただし、試料No.1、2、6の3点は互いに近い位置にプロットされており、同一の判別群である可能性が高い。ここでは仮に不明1群とした。表3に産地推定結果を示す。

表3 測定値および産地推定結果

試料No.	K強度(cps)	Ca強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\text{Mn} * 100 / \text{Fe}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	Zr分率	$\frac{\text{Ca}}{\text{K}}$	判別群	エリア
1	227.2	359.9	133.1	6070.6	630.7	1498.7	312.7	1457.6	16.17	2.19	38.43	1.43	37.38	1.58	不明1	不明
2	234.9	371.4	137.4	6454.4	673.2	1562.0	324.5	1527.5	16.47	2.13	38.22	1.44	37.37	1.58	不明1	不明
3	166.7	439.9	138.3	5954.6	447.2	1397.8	214.4	793.4	15.68	2.32	49.00	1.55	27.81	2.64	?	不明
4	162.5	523.1	146.2	7604.9	381.4	1495.4	242.4	1146.0	11.68	1.92	45.80	1.67	35.10	3.22	?	不明
5	231.6	473.7	197.5	8828.3	626.0	1679.6	342.1	2070.5	13.27	2.24	35.60	1.58	43.88	2.05	金山1	讃岐
6	272.9	426.8	155.9	7121.6	760.3	1771.1	364.8	1736.0	16.41	2.19	38.23	1.42	37.48	1.56	不明1	不明
7	227.8	464.7	144.5	7644.3	596.4	1690.6	321.8	1407.1	14.85	1.89	42.10	1.53	35.04	2.04	?	不明
8	189.5	441.2	155.2	7413.9	493.7	1406.7	286.2	1823.1	12.31	2.09	35.08	1.59	45.47	2.33	?	不明

4 おわりに

舟木遺跡より出土したサヌカイト製石器8点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った。その結果、7点は産地不明であったものの、1点は金山産の可能性が高いと推定された。

竹原弘展（パレオ・ラボ）

引用文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定。かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」：511-517、かながわ考古学財団。

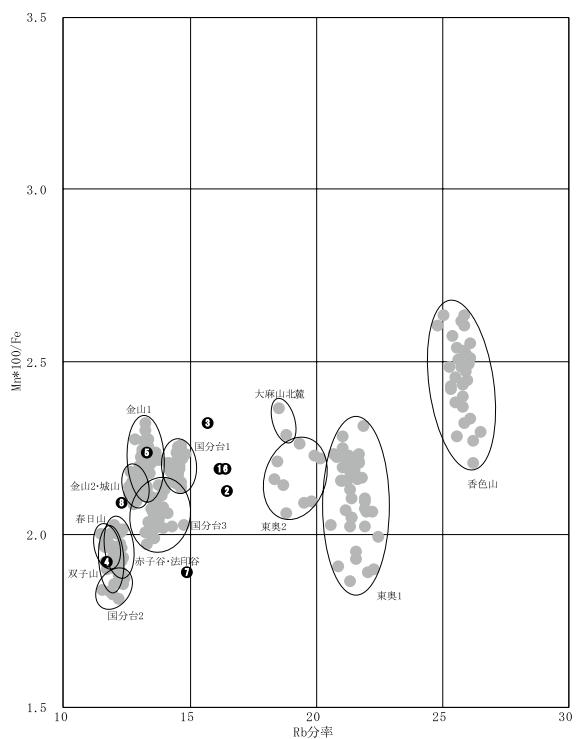
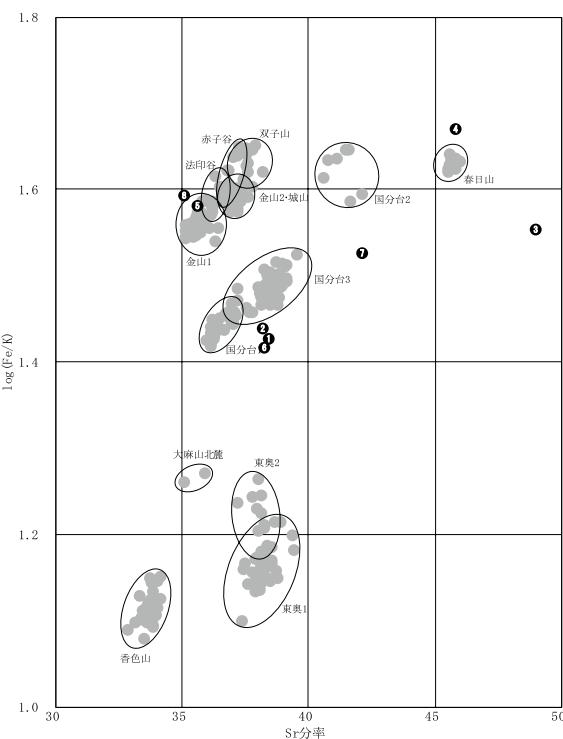


図1 サヌカイト産地推定判別図(1)



第3節 石器に付着する赤色物の分析

1 はじめに

淡路市舟木に所在する舟木遺跡より出土したサヌカイト片に付着する赤色物について、蛍光X線分析を行い、赤色物の種類を検討した。

2 試料と方法

分析対象は、サヌカイト片3点に付着する赤色物である（表1）。実体顕微鏡下でデザインナイフを使用して、赤色部分を極微量採取しポリエステル粘着テープに貼り付けて、分析試料とした。採取位置を図版1-1A、2A、3Aに示す。

表1 分析対象遺物

試料No.	遺跡名(略号)	遺物番号	器種	地区	遺構	土層	年月日	備考
1	DNFKb(NFK17)	21(S980034)	剥片	E	SX-9802 南西	上層	1998年1月19日	サヌカイト表面に赤色物が付着
2	DNFKb(NFK16)	39(S980039)	石核	E		1層	1998年11月30日	
3	DNFKb(NFK17)	24(S980043)	剥片	E	SX-9802 南西	上層	1998年1月19日	

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1000 μAのロジウムターゲット、キャピラリ径が100 μmまたは15 μm、検出器はSDD検出器である。検出可能元素は炭素(C)～アメリシウム(Am)である。

本分析での測定条件は、管電圧50kV、管電流1000 μA(自動設定による)、キャピラリ径15 μm、測定時間100sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。

分析の結果、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)が検出された。

生物顕微鏡観察により得られた画像を図版1-1B、2B、3Bに示す。いずれも不定形で、赤色パイプ状の粒子は観察されなかった。

4 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬, 2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μmのパイプ状の粒子形状からなるものが多く報

告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田, 1997）、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬, 1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料からは、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。一方で鉄が検出されているため、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。パイプ状粒子は観察されず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった。

5 おわりに

サスカイト片3点に付着する赤色物について検討した。その結果、いずれも鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

竹原弘展（パレオ・ラボ）

引用文献

- 成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料I—赤彩土器—. 考古学ジャーナル, 438, 10-14.
成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 26, 13-61.
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

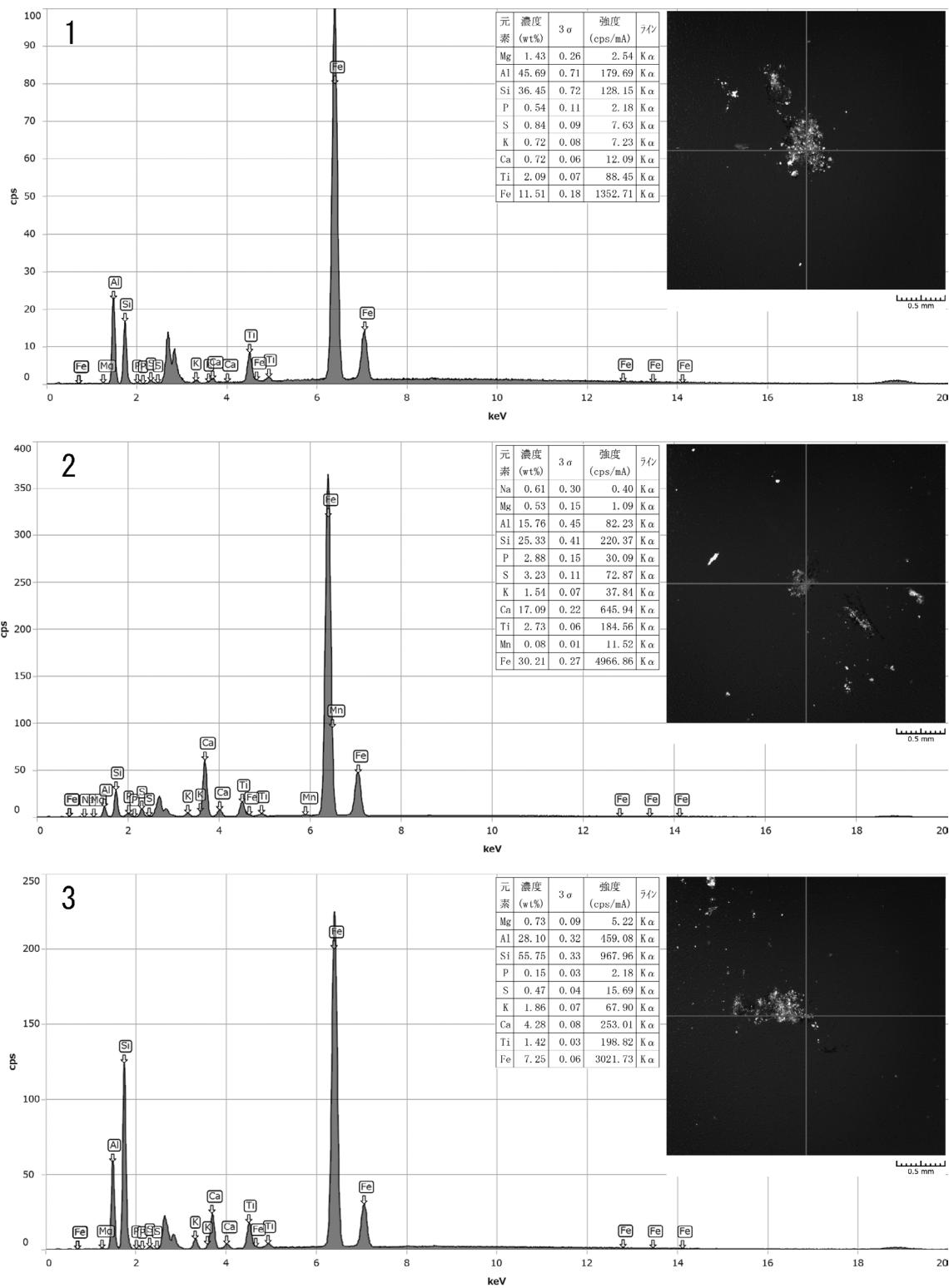
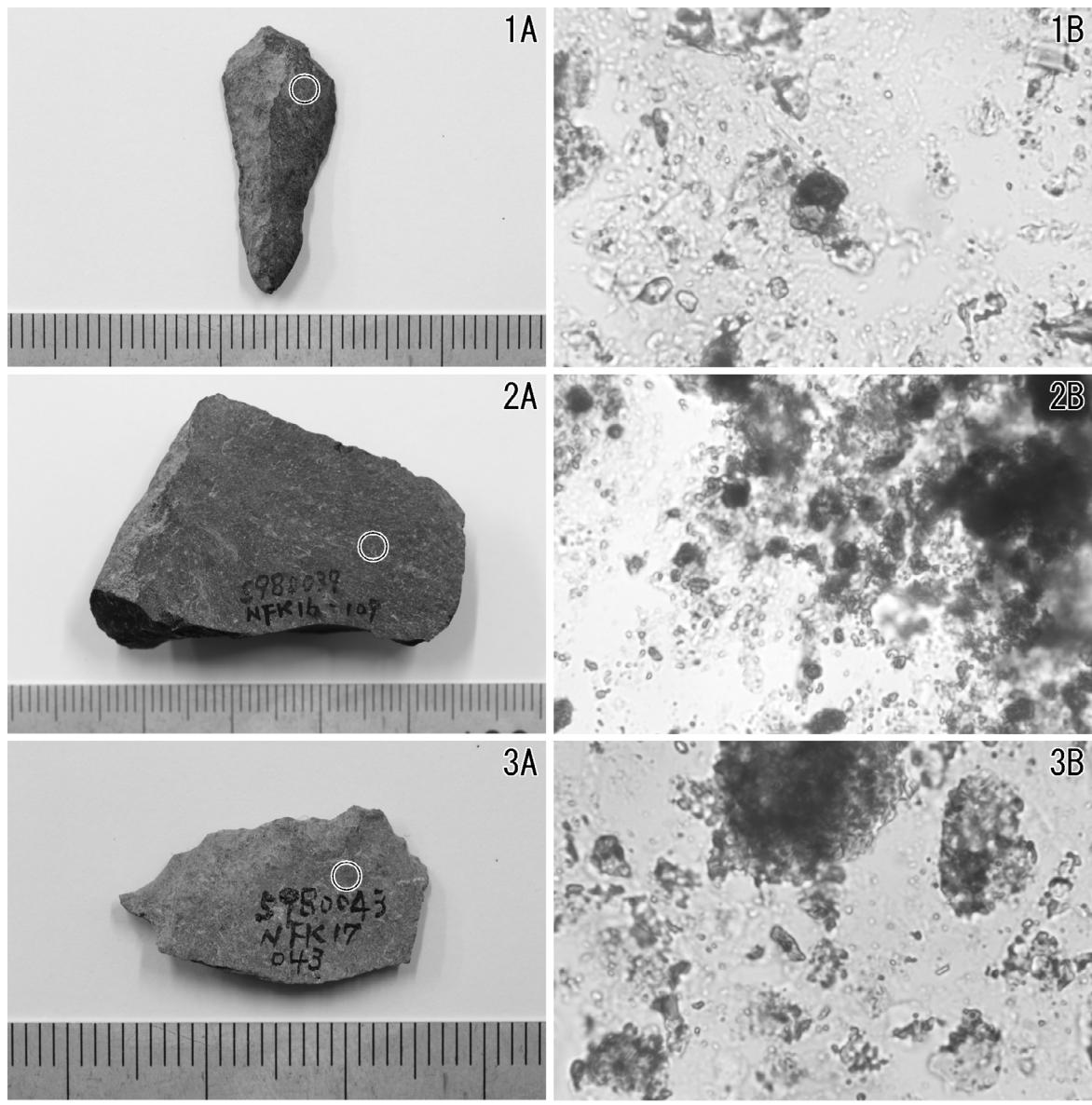


図1 採取試料の蛍光X線分析結果（左上数字は試料No.）



図版1 試料採取位置(A)と採取試料の生物顕微鏡写真(B) (右上数字は試料No.、スケール：10μm)

第V章 総括

第1節 遺物の評価

1 石器

本調査区では、サヌカイト製の打製石器が多数出土していることが大きな特徴である。石器の組成は石鏸、石錐、削器のほか、楔形石器、剥片、石核などがある。風化によって石材の肉眼観察が困難な状況ではあるが、外観上の特徴のほか薄く剥離する痕跡が多く認められることや一部のサンプルを用いた蛍光X線分析の結果で金山産石材を使用している石器が存在していることを考慮すれば、本遺跡で出土している石器や剥片の多くが金山産石材を用いている可能性が高いものと評価できよう。

また、石器組成の中で楔形石器が多くを占める点も特徴的である。楔形石器は、両極打法を用いて剥離された石核、ないしは楔としての機能を持つ石器と評価されるが、「サヌカイト製の石器と剥片類の総体を関連づける石器製作の体系の中で理解する」^{註1}という観点からすれば、石器製作関連遺物と定義することも可能である。両極打法は、サヌカイトの中でも薄く剥離する特性を持つ金山産に多用される傾向にあるとされ、本遺跡の資料は金山産サヌカイトを用いた石器製作の痕跡として重要な位置付けができるといえる。加えて、剥片や石核等の原石を除く石器製作を示す資料一式が一定量出土していることも石器製作が行われたことを示しているといえよう。

また、石鏸に短茎鏸が多くを占める組成は、中期後葉以降の近畿～四国東部の様相に類似するものであり、当該期の石鏸のあり方としては普遍的な組成といえる。一方で、石錐は後期以降出土する遺跡はまれであり、それが一定量存在する組成は特徴的といえよう。後期後半に認められる鉄製品に錐や針が多く認められている点は、石器組成とも共通する。それは、鉄製穿孔具を必要とした集落において、石器を使用していた段階からそれを必要とする要因が存在した可能性を示しており、高所に営まれた集落の背景を理解する上での手がかりの一つとなる可能性がある。

以上のような石器から見た特徴を有する本遺跡は、石器製作工房が確認されている五斗長垣内遺跡とともに、石器製作から鉄器製作へと転換する様相を看取することができる遺跡として重要である。

なお、出土したサヌカイト製石器の内、7点に赤色物が付着していることが確認されている。蛍光X線分析の結果、鉄由来のものであることが明らかとなっており、顔料であるとすればベンガラであると指摘された。同時代の五斗長垣内遺跡（淡路市）や二ツ石戎ノ前遺跡（洲本市）では、敲石の一部に赤色物が薄く付着する例が報告されており、赤色顔料としてベンガラの可能性が指摘されている。何故、石器の一部にベンガラが付着するのかは定かではないが、二ツ石戎ノ前遺跡では水銀朱の精製が行われていることから、赤色物はベンガラである蓋然性が高く、成分が類似する五斗長垣内遺跡でも同様の可能性が高いものとされている。今回確認された赤色物が赤色顔料として使用されたベンガラであるかどうかは定かではないが、今後の類例に注意を払う必要がある。

2 鉄製品と焼土塊

竪穴建物（SH-9801）からは鉄製品が1点（2片の鉄片が接合）出土している。厚さが1.0～1.5mmで上縁を破損して欠くが、本来の大きさが残る下縁が約4cmの方形あるいは長方形の板状の鉄製品で

刃部は認められない。同様の鉄製品が五斗長垣内遺跡の鍛冶工房からも出土しており、鉄器製作に用いる鉄素材と評価されていることから、本鉄製品も同様の可能性がある。

出土した位置は、建物西側土器に伴って出土している。出土した建物には炉跡や鍛冶関連遺物などが認められないことから、鉄器製作が行われていたとは評価できないが、この鉄製品が素材であるとすれば、この建物が営まれた時期あるいは廃棄されて間もない時期に鉄器製作が営まれていた可能性がある。

また、遺物包含層からは焼けた粘土の塊が出土している。表面中央部には管状のものが接していたような凹みが認められる。同様の土製品は、これも五斗長垣内遺跡の鍛冶工房で出土しており、鉄器製作に利用された送風管を固定する用途などに用いられたもので、鍛冶作業の存在を示す遺物と評価されている。

今回の調査区において鍛冶遺構は確認されていないが、前述の鉄製品の存在と考え合わせるならば、周辺に鍛冶遺構が存在する可能性が高いものと評価できよう。

3 粉圧痕付着土器

堅穴建物（SH-9801）出土土器の中に粉痕のつく土器が確認されている。鉢とみられる土器底部の側面に1か所、黒く小さな凹みが認められた。レプリカ法による分析の結果、イネ粉の圧痕であることが明らかになった。また、同時に分析を行った令和2（2020）年度実施の調査（今後報告予定）で出土した鉢とみられる土器底部にも3か所の粉圧痕が確認されており、それらの土器がいずれも在地のものであることから、本遺跡にイネ粉が存在したことが想定される。

淡路島におけるイネに関する資料としては、飛谷遺跡（洲本市五色町）で土器内部に付着した炭化米が確認されている。平地との比高差が40mの尾根上に立地する後期初頭に営まれた集落であるが、遺跡の眼下には水田稲作が可能な平地が存在しており、居住したであろう人びとが稲作を営んだことを想定するには無理のない立地である。また、下内膳遺跡（洲本市）では、中期末段階の水田遺構も確認されている。いずれも未報告の資料ではあるが、これらの状況から舟木遺跡が営まれていた時期に島内で稲作が行われていたことは確実とみてよいであろう。

その中で、平地との距離が遠く、水田稲作を営んだ遺構や遺物が確認されていない本遺跡において、イネ粉がいかに存在したのか。鉄器生産との関係や小規模な谷水田の存否なども含め、水田稲作に適さない場所に立地に本遺跡が営まれた背景を理解する上で重要な資料の一つとなろう。

第2節 遺構の評価

1 土器からみた堅穴建物 SH-9801

堅穴建物SH-9801から出土した土器は、第Ⅲ章で述べたとおり、大きく西側と東側に分けて取り上げられている。これらは、建物を横断する形で残された南北方向の土層観察用の畔を境に分けられているものと想定される。

西側出土土器は、中期末から存在する可能性のある広口壺や後期初頭の技法が認められる甕など、後期前半期に位置付けることができる土器である。舟木遺跡の時期区分^{註2}でいうところの舟木2～3期に相当する後期前半期の土器と考えられる。一方、東側出土の土器は、西側土器に共通する後期前半に属

する特徴を持った壺や甕、鉢などが存在する一方、後半期に出現すると考えられる口縁端部に叩き目を有する淡路型甕が存在するほか、その他の土器にも後半に位置付けられる土器が存在する。なお、生駒西麓産の搬入土器とみられる大形の広口壺は河内V-3期の所産と判断でき、口縁部を欠くものの、ほぼ原形に復元できる出土状況は建物の時期を想定する重要な資料と考えられる。これら土器の様相は、後期中葉に位置づけられる舟木3~4期を中心として一部に舟木5期に下る土器を含む状況とみることができる。

このように西側と東側に分けて取り上げられた土器には若干の時期差を持っており、西側の土器に比べ東側の土器が新しい傾向が認められる。このような時期差の存在は、建物廃絶後に堆積した上層埋土に含まれる土器と床面に残された土器とを同時に掘り上げている場合、切り合い関係にある竪穴建物や段状遺構など時期の異なる遺構に含まれる土器を同時に掘り上げている場合などが想定される。他の遺構との切り合いが存在する場合、建物時期の判断は若干異なることになるが、現状においては後期中葉の舟木3~4期を中心として、舟木5段階に下る可能性もある建物と判断しておきたい。

2 土器からみた段状遺構 SX-9802

段状遺構SX-9802最下層出土土器の様相は、甕の体部や高杯脚部内面にヘラ削り技法が用いられるほか、口縁部はヨコナデ調整で仕上げ、凹線文による加飾が認められる。また、高杯脚部と体部の接合部には円盤充填技法が用いられるなどの特徴が認められる。

甕では、本遺構上層から出土した土器の中にも同様の製作技法を持つものが認められるが、口縁部外面に指押さえによる凹凸が顕著であり、ヨコナデ調整の退化傾向が認められる。それに比べ、SX-9802最下層出土甕の口縁部の仕上げは丁寧で、外面に凹凸は認められない点はより古い傾向といえよう。また、高杯は椀形高杯の流れをくむもので、中期的様相が強く残る器種である。脚部は、いずれも内面にヘラ削りを施すもので、外反度が弱く、直線的に開く脚部である。なお、把手付大形鉢は、口縁部の作りに甕などと共通する特徴を有していることから、これら古い様相の土器と共に伴するものと考えておきたい。

以上のことから、本遺構最下層出土土器の一群は、舟木遺跡における弥生土器の最古相を示す舟木1期段階の土器群であり、弥生時代の集落が本調査区周辺から始まった可能性を示しているものと評価できよう。

3 石器からみた段状遺構 SX-9802

サスカイト製打製石器の組成からみて、本遺跡で石器製作が行われたことが確実と考えられることは前項で述べたとおりである。出土地点毎の石器の出土状況をまとめた表2のように、本調査区における石器はE地区遺物包含層及び段状遺構(SX-9802)から多く出土しており、全体の7割以上を占めている。一方、剥片の重量を集計した出土比率でみても、この2地点

	石器				剥片	
	点数(点)	比率(%)	重さ(g)	比率(%)	重さ(g)	比率(%)
A~B地区	3	11.1	25.7	8.0	32.6	9.8
C地区	0	0.0	0	0.0	0	0.0
D地区	0	0.0	0	0.0	37.8	11.4
E地区	8	29.6	136.8	42.5	118.6	35.6
F地区	0	0.0	0	0.0	31.7	9.5
G地区	0	0.0	0	0.0	3.1	0.9
SX-9802	12	44.5	132.5	41.1	98.9	29.7
SH-9801	4	14.8	27.1	8.4	10.3	3.1
合計	27	100.0	322.1	100.0	333.0	100.0

表2 石器の地点別出土状況表

から出土する剥片が全体の65%以上を占めている。この段状遺構（S X - 9 8 0 2）がE地区に存在していることを考慮すれば、段状遺構（S X - 9 8 0 2）周辺に石器が集中しているといえよう。

出土土器からみたように、段状遺構（S X - 9 8 0 2）が営まれた時期が、本遺跡で弥生時代の集落が出現する最古段階であるとすれば、この石器のあり方は当該期における集落で利用された利器が石器に依拠していたことを示しているのではなかろうか。さらに、剥片が集中する傾向からは、当該期に石器製作が行われていた証左ともいえよう。この遺構と石器製作との関係性は定かではないが、本遺構の周辺で石器製作が行われていた可能性があるものと想定することができよう。

第3節 調査区の評価

以上のように、本調査区で出土した遺物や検出された遺構は、弥生時代後期初頭～中葉を中心とする時期のもので、それは、庄内式期まで継続する舟木遺跡における弥生集落の前半期に相当する時期である。それは、後期後葉にはおよそ40haもの面積に拡大する集落が、本調査区周辺から始まった可能性があることを示しているものといえよう。今回検出された竪穴建物は、最古段階からやや時期が下る可能性が高いが、今後、本調査区周辺で初源期の建物など、弥生時代の集落が出現した段階の人びとの暮らしを知ることができる遺構が検出される可能性があるものと想定される。

また、本調査区で出土した遺物や検出された遺構には、舟木遺跡における弥生時代の集落を理解する上において重要な資料が多数含まれているものと評価できる。一つは、サヌカイト製の石器製作と使用の問題、そこから置きかわったと考えられる鉄器製作の問題、また本遺跡と稻作との関係性や搬入土器からみた他地域との関係性など、その視点は多岐にわたる。そこには、この集落が高所に営まれることになる背景を解き明かす重要な視点を含んでいるものと考えられる。今後の本地区における調査に期待するものである。

註1 阿部芳郎 1996「縄文後期のサヌカイト製石器群にみられる剥離面構成と技術」『島津岡大遺跡・7』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

註2 本文中で使用する舟木遺跡の時期区分は、2020年刊行の調査報告書『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』淡路市教育委員会で使用した時期区分に準拠しており、弥生時代後期前半が舟木1～3期、後期後半が舟木4～6期、庄内式期が舟木7～9期に相当する。

参考文献

伊藤宏幸ほか 2020 『舟木遺跡1（B・D地区の調査）』淡路市教育委員会

岸本一宏ほか 1998 『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IV 禿山遺跡ほか』兵庫県教育委員会

寺沢薰 森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿I』木耳社

森岡秀人 2003 「淡路型叩き甕」の提唱と摂津-環大阪湾をめぐる交流の一要素-』『初期古墳と大和の考古学』学生社

遺物觀察表

表3-1 弥生土器・土製品（1）

遺物№	器種	出土地点(遺構)	出土層位	法量(cm)	残存率(%)	形態・技法の特徴	色調	胎土	焼成	調査次数	備考	
1 Y980028	弥生土器	壺	SH-9801 南西拡張部	2層 口径: 24.0(復元) 器高: 4.8(残存)	10	口縁部: 垂下口縁で端面に擬凹線3条 ヨコナデ 頸部: 外反して開く頸部 外面は縱方向のハケ 内面は横方向の板ナデ	内外: 7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗い 石英、長石	良好	16次		
2 Y980030	弥生土器	壺	SH-9801 中央セクション	2層 口径: 17.6(復元) 器高: 5.6(残存)	10	口縁部: わざかに内湾し、端部に擬凹線1条 ヨコナデ 頸部: 外反して開く頸部 外面は縱方向のハケ 内面は板ナデ	外: 5YR6/6 橙 内: 5YR7/4 にぶい橙	精良 石英、長石、 クサリ碌	良好	16次	51(Y980066)と同じ タイプだが、調整は やや難舟木2 畿内にはない器種で、東部瀬戸内の様相	
3 Y980031	弥生土器	壺	SH-9801 西側	2層 口径: 23.7(復元) 器高: 3.0(残存)	10	口縁部: 「人」の字に屈折して開き、端部に直立する面を持つ。端面に擬凹線1条 ヨコナデ 体部: 外面は縱方向のハケ 内面は口縁部下までへら削り	内外: 7.5YR6/4 にぶい橙	粗い 長石	良好	16次		
4 Y980029	弥生土器	鉢	SH-9801 西側		口径: 31.8(復元) 器高: 7.8(残存)	10	口縁部: 屈折して開き、端部を上方へ摘み上げる ヨコナデ 体部: 外面は磨滅の為、観察不能 内面は板ナデ	内外: 7.5YR7/6 橙	精良 石英、長石、 クサリ碌	良好	16次	
5 Y980027	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 西側		底径: 6.0 器高: 2.4(残存)	10	底部: 中央がわざかに凹む平底 外面はナデ 内面は指押さえ 体部: 外方に大きめに開いて立ち上がる 外面は縱方向のハケ 内面は磨滅の為、観察不能	外: 5YR5/8 明赤褐 内: 5YR5/6 明赤褐	やや粗い 石英、長石	良好	16次	
6 Y980032	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 西側		底径: 4.2(復元) 器高: 4.2(残存)	10	底部: 外用が高台様に突出する 側面は指押さえ調整後に板ナデ 内面ナデ 体部: 斜め上方に直線的に立ち上がる 外面部ナデ	外: 5YR6/6 橙 内: 5YR6/3 にぶい橙	精良 石英、長石	良好	16次	
7 Y980039	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 9.2(復元) 器高: 4.5(残存)	20	口縁部: 斜め上方へ開く直口の口縁で端部は丸い 内面ヨコナデ	外: 7.5YR6/6 橙 内: 7.5YR7/4 にぶい橙	精良 石英、長石	良好	16次		
8 Y980047	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 17.6(復元) 器高: 5.4(残存)	10	口縁部: 下方に肥厚し、端面上下端に擬凹線3条 ヨコナデ 頸部: 強く外反して水平に開く 内面、磨滅の為、観察不能	内外: 5YR6/6 橙	粗い 石英、クサリ碌	良好	16次		
9 Y980045	弥生土器	壺	SH-9801 東側		口径: 23.0(復元) 器高: 1.5(残存)	5	口縁部: 下方に肥厚し、端面上下端に擬凹線2条 ヨコナデ	外: 7.5YR6/6 橙 内: 7.5YR6/8 橙	やや粗い	良好	16次	
10 Y980042	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 14.6(復元) 器高: 3.3(残存)	5	口縁部: 外傾して短く直線的に開き、端部は丸い 指押さえによる凹凸	内外: 5YR7/4 にぶい橙	精良 石英、長石	良好	16次		
11 Y980059	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 13.8 腹径: 21.8 底径: 4.6 器高: 19.0(復元)	70	口縁部: 短く外反し、内傾する端面を持つ ヨコナデ 頸部: 短く外反する 内面はナデ 体部: 横に強く張り、中位に最大径を持つ 外面はハケの後、ナデ 内面はハケで局部に指押さえ 底部: 平底 側面は指押さえによる凹凸が残る	内外: 5YR6/6 橙	やや粗い 石英、クサリ碌	良好	16次		
12 Y980061	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側		底径: 6.5 器高: 16.3(残存)	30	体部: 球形に近い形状で、中位に最大径を持つ 外面は叩きの後ナデ 内面は磨滅の為、観察不能 底部: 実出する平底 側面は叩きの後、ハケ	内外: 7.5YR6/6 橙	やや粗い 石英、長石	良好	16次	
13 Y980015	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側	床面上 底径: 5.2 器高: 10.8(残存)	30	体部: 球形に近い形状で、中位に最大径を持つ 外面は板ナデ 内面はナデ 底部: 実出する平底	外: 7.5YR7/4 にぶい橙 内: 7.5YR6/1 褐灰	やや粗い 石英、長石、 クサリ碌	良好	16次		
14 Y980014	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側	2層 底径: 6.4(復元) 器高: 2.6(残存)	20	底部: 平底 外面は指押さえにより中央が若干凹む 内面は指押さえによる凹凸 体部: 外方に大きく開いて立ち上がる 内面、磨滅の為、観察不能	内外: 5YR5/6 明赤褐	精良 石英、長石	良好	16次		
15 Y980037	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 11.8(復元) 器高: 1.0(残存)	5	口縁部: 端部が下方にわざかに肥厚し、端部に丸みを帯びた面を持つ 端部のナデ調整が甘い	内外: 2.5YR5/8 明赤褐	精良 石英、長石	良好	16次		
16 Y980044	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 17.8(復元) 器高: 2.2(残存)	10	口縁部: 端部が下方にわざかに肥厚し、端面に叩きを持つ 外面は縱方向の板ナデ 内面は横方向のハケ	外: 7.5YR7/6 橙 内: 7.5YR7/4 にぶい橙	精良 石英、長石	良好	16次		
17 Y980035	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 17.2(復元) 器高: 2.0(残存)	5	口縁部: わざかに外反し、端部は丸い 内面、磨滅の為、観察不能	外: 5YR6/6 橙 内: 5YR7/8 橙	精良 長石	良好	16次		
18 Y980040	弥生土器	壺	SH-9801 東側		口径: 16.0(復元) 器高: 2.2(残存)	5	口縁部: 丸みを帯びた端面に擬凹線1条 ヨコナデが省略され、指押さえが残る	内外: 5YR5/6 暗赤褐	やや粗い	良好	16次	
19 Y980054	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 13.6 腹径: 15.0(復元) 器高: 8.9(残存)	20	口縁部: わざかに外反し、丸みを帯びた端面 ヨコナデが省略され、指押さえの凹凸 体部: 球形に近い形で、最大径を中位に持つ 内面、磨滅により、観察不能	内外: 7.5YR7/6 橙	粗い 石英、長石	良好	16次		
20 Y980038	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 13.8(復元) 器高: 3.9(残存)	10	口縁部: 屈折して直線的に開き、丸みを帯びた端面 外面は縱方向の板ナデ 内面は横方向のハケ 体部: 厚張る体部 外面は磨滅により、観察不能 内面はへら削り	内外: 2.5YR5/8 明赤褐	精良 石英、長石	良好	16次		
21 Y980060	弥生土器	壺	SH-9801 東側	2層 口径: 16.2 腹径: 14.4(復元) 器高: 14.5(残存)	90	口縁部: 外反気味で開き、端部に面を持つ 外面は指押さえによる凹凸 内面はナデ 体部: 強い弱い体部で、最大径を中位に持つ 外面は上半分縱方向のハケ、下半分が板ナデ 内面は板ナデ	内外: 10YR6/6 明黄褐	やや粗い 石英、長石	良好	16次		
22 Y980057	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側		底径: 4.0 器高: 6.8(残存)	40	底部: ノーナップを指押さえで調整 内面に中央から放射状に残る工具痕 体部: 球形に近い形で、最大径を中位に持つ 外面は叩き 内面は板ナデ	外: 5YR5/6 明赤褐 内: 5YR6/6 橙	やや粗い 長石	良好	16次	
23 Y980012	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側	2層 底径: 4.0 器高: 8.7(残存)	20	底部: 中央が僅かに凹み、上げ底氣味 内面に叩き 内面に中央から放射状に残る工具痕 側面に指押さえ 体部: 斜め上方に直線的に開く 外面は叩きの後、板ナデ 内面はハケ	外: 2.5YR5/6 明赤褐 内: 10YR6/6 明黃褐色	やや粗い 石英、長石	良好	16次		
24 Y980052	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側		底径: 3.4 器高: 2.9(残存)	10	底部: 小さな平底 内面はナデ 体部: 斜め上方に開く 外面は叩き 内面はナデ	外: 2.5YR5/6 明赤褐 内: 7.5YR6/6 橙	粗い 長石	良好	16次	
25 Y980056	弥生土器	底部(壺)	SH-9801 東側		底径: 4.6 腹径: 11.3 器高: 9.1(残存)	40	底部: 底部外周に粘土紐を貼り付け、中央が凹む 内面ナデ 側面に指押さえによる指頭痕が残る 体部: 内造気味に急角度に立ち上がり、張りの弱い細めの体部 外面は叩きの後に板ナデ 内面は板ナデ	外: 7.5YR6/4 橙 内: 10YR6/4 にぶい黄橙	粗い 石英、長石	良好	16次	29(Y980055)に類似

表3-2 弥生土器・土製品（2）

遺物№	器種	出土地点(遺構)	出土層位	法量(cm)	残存率(%)	形態・技法の特徴	色調	胎土	焼成	調査次数	備考
26 Y980058	弥生土器 底部(甕)	SH-9801 東側		底径：4.0 腹径：17.4 器高：13.6(残存)	40	底部：外周が厚く、中央が凹む 側面に指押さえによる指頭痕が残る 体部：内湾気味に急角度に立ち上がり、張りの弱い細めの板ナデ 外面は叩きの後にハケ 内面は板ナデ	外：7.5YR6/4 桜 内：7.5YR6/8 桜	やや粗い 石英、長石	良好	16次	外面にスス付着
27 Y980013	弥生土器 底部(鉢)	SH-9801 東側	2層	底径：4.0 器高：13.7(残存)	10	底部：中央が凹む小さな底部 内外面、磨滅の為、観察不能 側面に指押さえによる指頭痕が残る	内外：5YR7/6 桜	精良 石英、長石、 クサリ縞	良好	16次	
28 Y980053	弥生土器 底部(鉢)	SH-9801 東側		底径：4.6 器高：2.8(残存)	20	底部：突出する平底 内外面、磨滅の為、観察不能 体部：内湾気味に立ち上がり、張りの弱い細めの板ナデ 外面は叩きの後に板ナデ 内面は板ナデ	内外：5YR5/8 明赤褐	粗い 石英、長石	良好	16次	底部側面にモミ痕
29 Y980055	弥生土器 底部(甕)	SH-9801 東側		底径：4.3 腹径：12.0 器高：10.0(残存)	40	底部：底部外周が粘土紐を貼り付け、中央が凹む 内外面ナデ 側面に指押さえによる指頭痕が残る 体部：内湾気味に急角度に立ち上がり、張りの弱い細めの板ナデ 外面は叩きの後に板ナデ 内面は板ナデ	外：7.5YR4/3 桜 内：7.5YR6/6 桜	やや粗い 石英、長石、 クサリ縞	良好	16次	25(Y980056)に類似
30 Y980046	弥生土器 鉢	SH-9801 東側	2層	口径：30.0(復元) 器高：5.3(残存)	10	口縁部：屈折して開き、端部が下方に肥厚し、端面に擬凹線2条 内外面はヨコナデで、外面上は指押さえによる凹凸が残る 体部：肩が張る体部の大型の体 内外面、磨滅の為、観察不能	外：10YR8/4 浅黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい桜	やや粗い 石英、長石	良好	16次	
31 Y980036	弥生土器 鉢	SH-9801 東側	2層	口径：23.8(復元) 器高：1.8(残存)	5	口縁部：外反気味に開く口縁部で、端部が丸い 内外面はヨコナデ 内面は横方向の板ナデの痕跡残る	内外：2.5YR5/6 明赤褐	精良 石英、長石	良好	16次	
32 Y980050	弥生土器 高杯	SH-9801 東側		口径：24.0(復元) 器高：6.8(残存)	10	口縁部：屈折は弱く、端部は丸い 内外面はラマ磨き 端部はヨコナデ 体部：内湾し、浅めの体部 内外面、ラマ磨き	内外：2.5YR5/8 明赤褐	精良 石英、長石、 雲母	良好	16次	
33 Y980016	弥生土器 脚部(高杯)	SH-9801 床面上		底径：13.6(復元) 器高：2.3(残存)	5	裾部：わずかに外反し、端部に面を持つ 内外面、磨滅の為、観察不能 脚部：直径0.8cmの円形透孔	外：2.5YR4/6 赤褐 内：10R5/6 赤	粗い 石英、長石	良好	16次	
34 Y980051	弥生土器 高杯	SH-9801 東側		底径：14.0(復元) 器高：1.4(残存)	5	体部：水平に開く体部で、端部に口縁部の剥離痕 内外面、磨滅の為、観察不能	外：7.5YR8/4 浅黄橙 内：7.5YR7/6 桜	精良 石英、長石、 クサリ縞	良好	16次	
35 Y980049	弥生土器 脚部(高杯)	SH-9801 東側		底径：15.0(復元) 器高：1.9(残存)	5	裾部：外反して大きく開き、端部に面を持つ 端部はヨコナデ 外面は般若向のハケ 内面はナデ	内外：2.5YR6/8 桜	精良 長石	良好	16次	
36 Y980009	弥生土器 壺	SH-9801 東側		口径(頸部)：22.5 腹径：44.8 底径：5.3 器高：57.0(残存)	90	頸部：体部から軽く曲し、外反して長く伸びる 内外面ナデ 体部：無花果形で、最大径を体部上半に持つ 外面はラマ磨き 内面はナデ 底部：突出する底部	内外：7.5YR4/4 桜	やや粗い 角閃石	良好	16次	生駒西麓産搬入土器
37 Y980010	弥生土器 底部(壺)	SH-9801 東側		底径：6.2 器高：3.5(残存)	10	底部：突出する平底 体部：内湾気味に立ち上がる 内外面ナデ	内外：7.5YR4/4 桜	やや粗い 角閃石	良好	16次	生駒西麓産搬入土器
38 Y980034	弥生土器 壺	SH-9801	2層	口径：24.0(復元) 器高：6.8(残存)	10	口縁部：端部が下方に肥厚し、面を持つ 内外面、磨滅の為、観察不能 頸部：外反して開く 内外面、磨滅の為、観察不能	内外：2.5YR5/6 明赤褐	粗い 石英、長石	良好	16次	
39 Y980043	弥生土器 壺	SH-9801 上層		口径：18.4(復元) 器高：7.8(残存)	10	口縁部：端部に突みを帶びた面を持つ 外面は横方向の板ナデ 内面は横方向の板ナデ	内外：5YR6/6 桜	やや粗い	良好	16次	
40 Y980041	弥生土器 壺	SH-9801 上層		口径：20.3(復元) 器高：2.5(残存)	5	口縁部：端部に突みを帶びた面を持つ 外面は指押さえによる凹凸 内面は横方向の板ナデ	内外：7.5YR6/6 桜	精良 石英、長石、 雲母	良好	16次	
41 Y980033	弥生土器 底部(甕又は鉢)	SH-9801 北側	2層	底径：3.4 器高：3.9(残存)	10	底部：外周が厚く、中央部が凹む 側面に指押さえ 体部：内湾気味に立ち上がる 内外面、磨滅の為、観察不能	内外：2.5YR5/8 明赤褐	精良 石英、長石	良好	16次	
42 Y980048	弥生土器 脚部(高杯)	SH-9801		底径：8.4(復元) 器高：1.9(残存)	10	裾部：外反度は弱く、端部は丸い小型の脚 端部はヨコナデ 外面は般若向のハラ磨き 内面は磨滅の為、観察不能	外：5YR5/3 にぶい赤褐 内：5YR6/4 にぶい桜	精良 石英、長石、 クサリ縞	良好	16次	
43 Y980001	弥生土器 壺	SX-9802 南	最下層	口径：9.6 器高：2.6(残存)	20	口縁部：屈折して短く開き、端面に擬凹線1条 内外面はヨコナデ 頸部：短く直立する 外面はヨコナデ 内面はラマ削り(器壁が剥離の可能性)	内外：5YR6/8 桜	精良	良好	17次	再掲
44 Y980003	弥生土器 底部(壺)	SX-9802 中央	最下層	頸部径：9.4(残存) 腹径：15.2 器高：13.2(残存)	30	頸部：直立気味に立ち上がり、外反して口縁部に至る 外面、磨滅の為、観察不能 内面は横方向の板ナデ	外：5YR4/2 灰褐 内：2.5YR4/8 赤褐	精良	良好	17次	再掲
45 Y980007	弥生土器 壺	S X - 9 8 0 2 中央	最下層	口径：19.0(復元) 腹径：23.1 器高：11.5(残存)	30	口縁部：外反して開き、端部を上下に肥厚させた 外縁する 端面に擬凹線2条 外反する頸部の屈曲は弱い 内外面はヨコナデ 体部：やや肩の張る体部 外面はナデ 内面はラマ削り	内外：5YR5/6 明赤褐	やや粗い	良好	17次	再掲
46 Y980005	弥生土器 底部(甕)	S X - 9 8 0 2 南	最下層	底径：7.6 器高：10.0(残存)	20	底部：厚みのある平底 体部：急な角度で、直線的に立ち上がる 外面はヨコナデ又は板ナデ 内面はラマ削り	内外：5YR5/6 明赤褐	やや粗い	良好	17次	再掲
47 Y980004	弥生土器 脚部(高杯)	S X - 9 8 0 2 南	最下層	底径：12.8 器高：13.4(残存)	40	裾部：端部は面を持ち、外下面下端擬凹線1条 外面はヨコナデ 内面はラマ削り 体部：わずかに外反するが、外反度弱い 外面下半部板ナデ、上半部はナデ 内面下半部ヘラ削り、上半部は工具痕	内外：5YR5/6 明赤褐	精良	良好	17次	再掲
48 Y980002	弥生土器 脚部(高杯)	S X - 9 8 0 2 南	最下層	底径：9.1 器高：8.1(残存)	50	裾部：端面及び外下面下端に擬凹線各1条 内外面ヨコナデ 体部：わずかに外反するが、外反度弱い 外面は磨滅の為、観察不能 内面はラマ削り	内外：2.5YR3/6 暗赤褐	精良	良好	17次	再掲
49 Y980006	弥生土器 高杯	S X - 9 8 0 2 南	最下層	口径：22.4(復元) 器高：5.1(残存)	20	口縁部：体部から屈折して矮く立ち上がり 外縁に上向きの面を持つ 外面に2条の退化凹線 一端が口様に下方に湾曲する 内外面ヨコナデ 体部：わずかに内反し、水平に開く浅い体部 内外面磨滅の為、観察不能	内外：5YR5/8 明赤褐	精良	良好	17次	再掲
50 Y980008	弥生土器 鉢	S X - 9 8 0 2 南	最下層	口径：31.6 器高：12.0(残存)	50	口縁部：屈折して外反して開き、端部を下方に肥厚させた 外縁に上向きの面を持つ 一端が口様に下方に湾曲する 内外面ヨコナデ 体部：強く肩の張る体部で、最大径を上半に持つ 肩部に貼り付けた把手2力所	内外：7.5YR6/8 桜	精良	良好	17次	再掲

表3-3 弥生土器・土製品（3）

遺物No.	器種	出土地点(遺構)	出土層位	法量(cm)	残存率(%)	形態・技法の特徴	色調	胎土	焼成	調査次数	備考
51 Y980066	弥生土器	壺	S X - 9 8 0 2 北西	上層	口径：14.6(復元) 器高：3.7(残存)	10 口縁部：わずかに内湾し、端部に擬凹線1条 頸部：外反して開く、短い頸部 外面は縱方向のハケ 内面は横方向のハケ	外：5YR6/6 橙 内：5YR7/6 橙	精良 石英、長石、 クサリ礫	良好	17次	2(Y980030)と同じ タイプだが、調整はより丁寧
52 Y980068	弥生土器	甕	S X - 9 8 0 2 南西	下層	口径：18.0(復元) 器高：5.4(残存)	20 口縁部：外反し、外傾する端部に擬凹線1条 頸部：外側にヨコナデ 外面にヨコナデ 体部：外面は縱方向のハケ 内面はヘラ削りで、肩部に指押さえ	内外：5YR5/6 明赤褐	精良 石英、長石、 クサリ礫	良好	17次	
53 Y980070	弥生土器	鉢	S X - 9 8 0 2 南西	上層	口径：17.4(復元) 器高：5.4(残存)	20 口縁部：屈折して外反し、端部に面を持つ 頸部：外側にヨコナデの後で不明瞭 外面にヨコナデ 体部：外湾する体状 内外面、磨滅の為、観察不能	外：7.5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にびい黄橙	やや粗い 石英、長石	良好	17次	
54 Y980072	弥生土器	底部(壺)	S X - 9 8 0 2 南西	上層	底径：4.0(復元) 器高：5.2(残存)	20 底部：突出する平底 体部：内湾気味に立ち上がる 内外面、ナガ又は板ナデ	内外：5YR5/6 明赤褐	粗い 石英、長石	良好	17次	
55 Y980071	弥生土器	甕	S X - 9 8 0 2 南西	上層	口径：21.2(復元) 器高：3.0(残存)	10 口縁部：屈折して直線的に開き、丸みを帯びた端 面を持つ 外面にヨコナデ 外面はヨコナデ前に施された縱方向の調 整痕、内面は横方向のハケ調整を残す 体部：外面は縱方向のハケ 内面はヘラ削りで、肩部に指押さえ	内外：5YR5/6 明赤褐	精良 石英、長石	良好	17次	
56 Y980067	弥生土器	脚部(高杯)	S X - 9 8 0 2 北東	下層	底径：12.4(復元) 器高：1.9(残存)	10 裾部：わずかに外反し、外方に肥厚する端部に面 を持つ 外面に強いヨコナデ 脚部：径0.5cmの圓形透孔を2穴一组で穿つ 外面の裾部に近い位置に複数の擬凹線 内面はヘラ削り	内外：2.5YR5/8 明赤褐	精良 石英、長石	良好	17次	
57 Y980069	弥生土器	底部(壺)	S X - 9 8 0 2 南西	上層	底径：6.2(復元) 器高：3.0(残存)	10 底部：平底 外面に叩き 体部：やや内湾気味に立ち上がる 外面はハケ 内面は磨滅の為、観察不能	外：5YR1.7/1 黒 内：5YR5/4 にびい赤褐	やや粗い 石英、長石	良好	17次	
58 Y980073	弥生土器	底部(壺)	S X - 9 8 0 2 南西	上層	底径：5.0 器高：4.9(残存)	20 底部：外周が手状に高まる上げ底状 体部：直線的に立ち上がる 内外面、ナガ又は板ナデ	外：10YR5/6 黄褐 内：5YR5/6 明褐	やや粗い 石英、長石	良好	17次	
59 Y980063	弥生土器	底部(壺)	S X - 9 8 0 3 南西	上層	底径：5.0 器高：6.8(残存)	20 底部：外周が外方向にわずかにつまみ出し、中央 部が凹む 外面指押さえで、側面に指頭痕が残る 内面は指押さえ 体部：直線的に立ち上がる 外面にハケ 内面に板ナデ	外：5YR6/6 明赤褐 内：7.5YR6/6 橙	粗い 石英、長石	良好	17次	
60 Y980064	弥生土器	壺		2層	頸部径：11.2 (復元) 器高：5.1(残存)	10 頸部：体部との境に烈点文を入れた貼り付け凸帶 1条 外面にハケ 内面は磨滅の為、観察不能	内外：7.5YR6/4 にびい橙	精良 石英、長石、 クサリ礫	良好	17次	
61 Y980025	弥生土器	壺		1層	口径：16.0(復元) 器高：4.3(残存)	10 口縁部：外反し、端部が下方に肥厚して端面を持 端面に擬凹線2条 内外にヨコナデ 頸部：外反して開く 内外面磨滅の為、観察不能	内外：7.5YR5/4 にびい褐	粗い 石英、長石	良好	16次	
62 Y980024	弥生土器	甕		1層	口径：21.6(復元) 器高：5.8(残存)	10 口縁部：屈折して「L」の字状に開き、外傾する 端面に擬凹線1条 内外にヨコナデ 体部：肩が張る体状 外面はハケ又は板ナデ 内面はヘラ削り	内外：7.5YR5/4 にびい褐	粗い 石英、長石、 クサリ礫	良好	16次	
63 Y980065	弥生土器	甕		2層	口径：17.2(復元) 器高：5.3(残存)	10 口縁部：外反して開き、端部に面を持つ 外面にヨコナデ 体部：外面はハケ又は板ナデ 内面はヘラ削り	外：5YR5/4 にびい赤褐 内：5YR6/6 明赤褐	粗い 石英、長石	良好	17次	
64 Y980020	弥生土器	甕		1層	口径：21.4(復元) 器高：2.9(残存)	5 口縁部：屈折して開き、端部は丸い 外面に指押さえ 内面は磨滅の為、観察不能 体部：内面は磨滅の為、観察不能 内面磨滅の為、観察不能	内外：7.5YR7/4 にびい橙	精良 長石	良好	16次	
65 Y980018	弥生土器	底部(壺)		1層	底径：4.5(復元) 器高：3.5(残存)	10 底部：突出する底部が板状工具による調整で丸 みを帯びる 内面は板状工具による調整 体部：開き気味に立ち上がる 外面はハケ又は板ナデにより砂粒が動く 内面は板ナデ	内外：7.5YR6/6 橙	精良 長石	良好	16次	
66 Y980019	弥生土器	底部(甕)		1層	底径：3.6 器高：3.4(残存)	10 底部：ヨーナツ底で平底状に調整 外面に板状工具痕 体部：やや内湾気味に立ち上がる 内面磨滅の為、観察不能	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/3 にびい橙	精良 石英、長石、 雲母	良好	16次	
67 Y980022	弥生土器	底部(壺)		1層	底径：12.0(復元) 器高：5.1(残存)	10 底部：厚みを持つ用が突出する大きな平底 外周外周に指押さえ 体部：急角度に直線的に立ち上がる 内外面ハケ	外：7.5YR5/6 明褐 内：7.5YR5/4 にびい褐	やや粗い 石英、長石	良好	16次	
68 Y980023	弥生土器	底部(甕)		1層	底径：6.0(復元) 器高：4.1(残存)	10 底部：厚みのある小さな平底 底部側面から体部外面にかけて一体的な叩 き 内面に板状工具痕 体部：底部との境界が不明瞭で、直線的に立ち上 がる 外面に叩き 内面に板ナデ	外：2.5YR4/4 にびい赤褐 内：5YR6/4 にびい橙	やや粗い 長石	良好	16次	
69 Y980021	弥生土器	底部(鉢)		1層	底径：3.0 器高：2.4(残存)	20 底部：外方に大きく肥厚する厚みのある平底 外面はナデ 内面は板状工具痕	内外：5YR5/4 にびい赤褐	やや粗い 石英、長石	良好	16次	
70 Y980017	弥生土器	底部(甕)		1層	底径：3.0 器高：2.5(残存)	10 底部：外周が突出し、上げ底気味 体部：外周は指押さえで、側面に指頭痕 内面に叩き 内面は磨滅の為、観察不能	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/4 にびい橙	精良 石英、長石、 クサリ礫	良好	16次	
71 Y980062	弥生土器	底部(甕)			底径：5.0 器高：5.5(残存)	10 底部：厚みのある小さな平底 底部側面から体部外面にかけて一体的な叩 き 内面に指押さえ 体部：底部との境界が不明瞭で、直線的に立ち上 がる 外面に叩き 内面は磨滅の為、観察不能	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR7/6 橙	やや粗い	良好	17次	
72 Y980026	弥生土器	高杯			口径：27.8(復元) 器高：3.7(残存)	10 口縁部：体部から腰を持って、強く外反して立ち 上がる 立ち上がりは短く、端部は丸い 外腹下半に沈線4条 外面はヨコナデ 内面はヨコナデの後、横方向のヘラ磨き	外：7.5YR6/4 にびい褐 内：10YR6/2 灰黃褐	やや粗い 長石	良好	16次	
73 E980001	土製品	焼土塊			全長：11.0 幅：8.6 厚さ：5.4	表面に長さ7.5cm、幅3cmの管状のものが接した ような凹みがある。		やや粗い		16次	

表4 石器一覧表

遺物No.	器種	出土地点・遺構	層位	法量				材質	備考	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
1	S980003	石鎌	SH-9801 西側		4.6	2.0	0.9	6.4	サヌカイト	三角形短茎式
2	S980012	楔形石器	SH-9801 南西拡張部	2	2.7	2.7	1.2	8.3	サヌカイト	
3	S980011	楔形石器	SH-9801 南西拡張部	2	2.7	2.6	0.9	7.0	サヌカイト	
4	S980013	楔形石器	SH-9801 南側拡張部		2.2	3.4	0.9	5.4	サヌカイト	
5	S980015	剥片	SH-9801 北拡張部	2	2.5	1.7	0.3	1.4	サヌカイト	
6	S980016	剥片	SH-9801 東側	床面	1.3	2.4	0.3	1.1	サヌカイト	
7	S980020	石鎌	SX-9802 中央セクション		3.9	2.0	0.6	4.0	サヌカイト	三角形短茎式
8	S980019	石鎌	SX-9802 北東	上層	2.3	1.2	0.3	0.6	サヌカイト	三角形凹茎式
9	S980038	石錐	SX-9802 北西	上層	2.3	2.5	0.3	1.4	サヌカイト	
10	S980024	石鎌(錐先端の可能性)	SX-9802 中央セクション		0.9	0.8	0.3	0.2	サヌカイト	
11	S980022	石錐?	SX-9802 北西	上層	1.2	1.0	0.3	0.4	サヌカイト	
12	S980023	石錐	SX-9802 南西	上層	1.3	0.7	0.5	0.5	サヌカイト	
13	S980021	剥片(石錐未製品?)	SX-9802 北西	上層	2.2	0.9	0.7	1.5	サヌカイト	
14	S980037	剥片(石錐未製品?)	SX-9802 南西	下層	2.1	0.9	0.5	1.0	サヌカイト	
15	S980027	楔形石器	SX-9802 南西	下層	3.8	2.0	2.1	20.6	サヌカイト	
16	S980029	楔形石器	SX-9802 北東	上層	3.2	2.5	0.7	5.2	サヌカイト	
17	S980025	楔形石器	SX-9802 南西	下層	4.1	3.4	1.0	14.8	サヌカイト	
18	S980026	石核	SX-9802 南西	下層	5.1	4.2	2.8	53.9	サヌカイト	
19	S980031	削器(スクレイバー)	SX-9802 南西	下層	5.9	3.5	1.0	21.2	サヌカイト	
20	S980032	削器(スクレイバー)	SX-9802 南西	上層	5.6	1.6	0.9	9.7	サヌカイト	赤色物付着
21	S980034	剥片(加工痕あり)	SX-9802 南西	上層	2.4	1.1	0.4	1.0	サヌカイト	赤色物付着
22	S980033	剥片(加工痕あり)	SX-9802 南東	上層	3.2	1.1	0.4	1.4	サヌカイト	赤色物付着
23	S980035	剥片(加工痕あり)	SX-9802 北東	上層	2.6	1.2	0.7	2.3	サヌカイト	
24	S980043	剥片(加工痕あり)	SX-9802 南西	上層	2.2	1.2	0.4	1.1	サヌカイト	赤色物付着
25	S980036	剥片	SX-9802 南西	下層	1.2	1.1	0.2	0.3	サヌカイト	
26	S980002	石鎌	E		3.4	1.4	0.6	1.9	サヌカイト	三角形短茎式 赤色物付着
27	S980001	剥片(加工痕あり)	E	1層	1.3(残存)	1.5(残存)	0.4	0.7	サヌカイト	
28	S980004	削器(スクレイバー)	B1~2	地山直上	3.4(残存)	1.9	0.8	5.2	サヌカイト	
29	S980028	石錐	E4		2.5	1.0	0.7	1.8	サヌカイト	赤色物付着
30	S980006	楔形石器	A		3.3	2.6	1.2	12.0	サヌカイト	
31	S980008	楔形石器	E	1層	5.5	2.3	0.8	10.7	サヌカイト	
32	S980030	削器(スクレイバー)	E3	2層	3.7	3.2	0.7	10.8	サヌカイト	
33	S980010	楔形石器	E		1.9	2.3	0.6	3.1	サヌカイト	
34	S980007	楔形石器	B1~2	地山直上	3.0	2.9	0.9	8.5	サヌカイト	
35	S980009	楔形石器	E		1.7	3.6	0.6	5.2	サヌカイト	
36	S980014	剥片(加工痕あり)	D2	黄茶褐色土	6.6	4.2	1.4	31.6	サヌカイト	
37	S980017	剥片	D2	2層	3.0	1.7	0.5	2.1	サヌカイト	
38	S980044	剥片	F	地山直上	4.1	5.7	0.9	22.0	サヌカイト	
39	S980039	石核	E	1層	3.7	2.8	1.5	19.0	サヌカイト	赤色物付着
40	S980005	剥片(加工痕あり)	A		2.9	2.7	0.4	4.1	サヌカイト	
41	S980042	剥片	E	1層	2.6	2.6	0.4	2.6	サヌカイト	
42	S980040	剥片	B		5.0	4.2	0.4	8.3	サヌカイト	
43	S980041	剥片	D		4.2	1.5	0.5	4.1	サヌカイト	
44	S980018	石核	E2	1層	5.6	4.7	2.8	84.3	サヌカイト	
45	S980045	磨石	SX-9802 北西	下層	11.2	9.7	5.0	859.1	石英	
46	S980046	敲石	B2		11.6	9.2	4.2	557.9	石英	
47	S980047	磨石	SH-9801東		8.5	7.1	5.8	497.0	石英	

表5 鉄器一覧表

No.	遺物番号	器種	出土地点 (遺構)	層位	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	M980001	鉄器 (板状鉄器)	SH-9801 南西拡張部	2層	3.6	4.1	0.1~0.15	5.2	2個に割れている

写 真 図 版

遺跡全景と調査区の位置 図版1



1. 遺跡全景 真上上空から
矢印が調査区の位置

図版2 調査区全景



1. 確認調査（16次）トレンチ全景（東から）

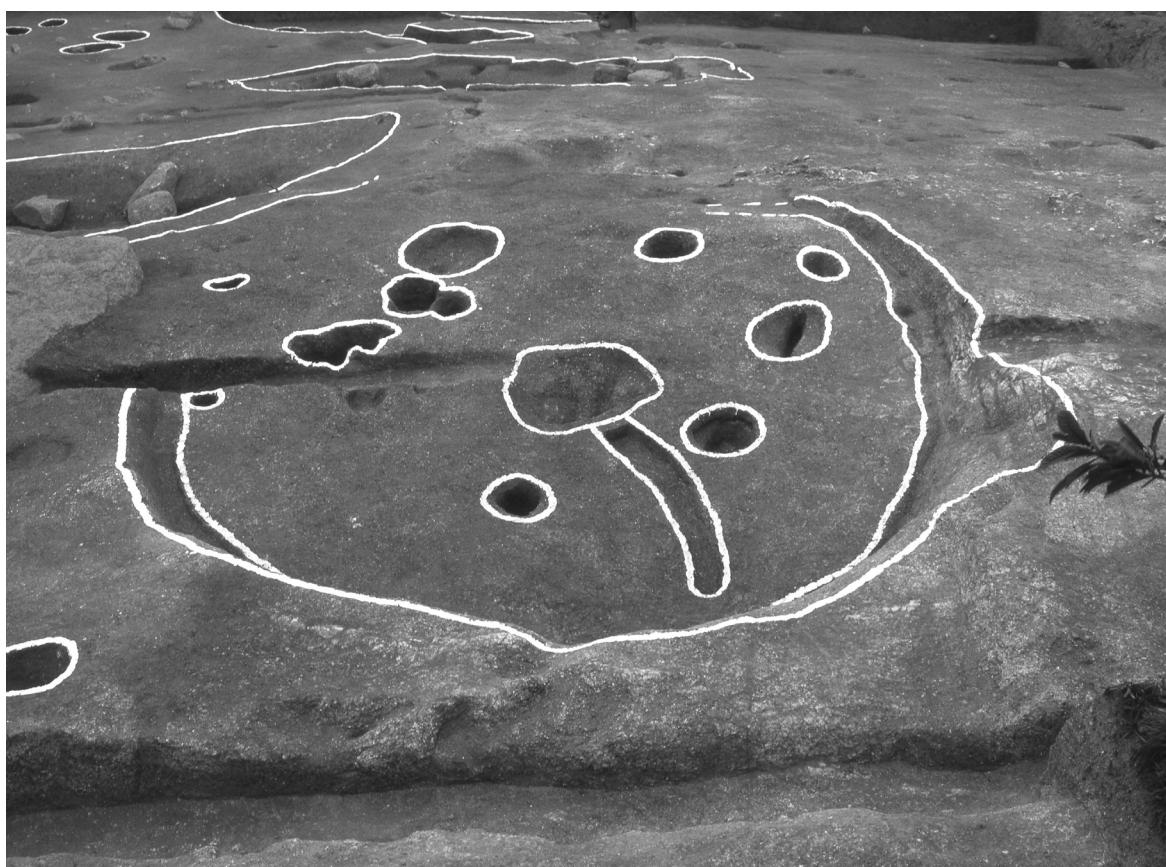


2. 調査区（17次）全景（東から）

豊穴建物 S H - 9 8 0 1 図版 3



1. 豊穴建物 S H - 9 8 0 1 (南から)



2. 豊穴建物 S H - 9 8 0 1 (東から)

図版4 横穴建物SH-9801



1. 横穴建物SH-9801土器出土状況（北から）



2. 横穴建物SH-9801土器出土状況（東から）

段状遺構 S X - 9 8 0 1 ・ 9 8 0 2 図版 5



1. 段状遺構 S X - 9 8 0 1 ・ 9 8 0 2 (南から)

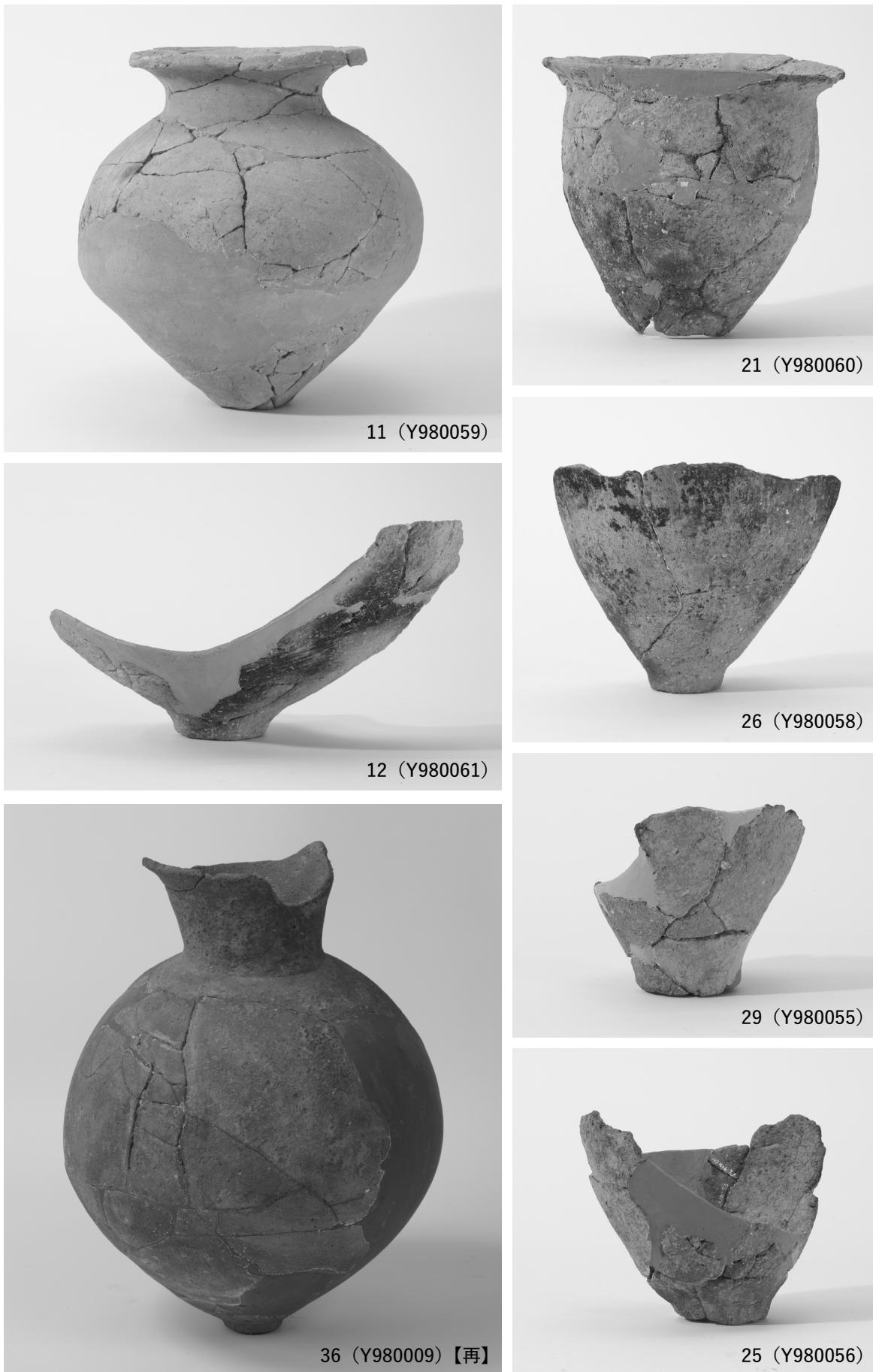


2. 段状遺構 S X - 9 8 0 2
最下層土器出土状況 (南から)



3. 段状遺構 S X - 9 8 0 2
最下層土器出土状況 (西から)

図版6 弥生土器1



堅穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器

弥生土器 2 図版 7



28 (Y980053)



43 (Y980001) 【再】



37 (Y980010) 【再】



44 (Y980003) 【再】



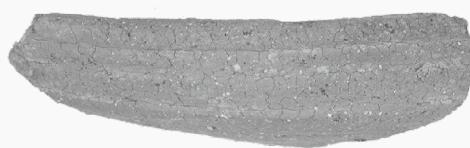
46 (Y980005) 【再】



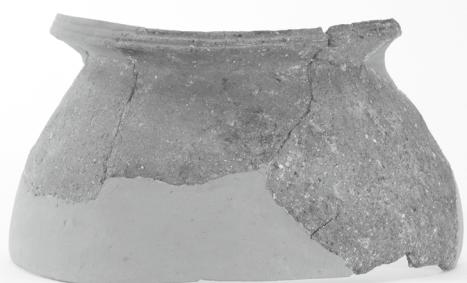
47 (Y980004) 【再】



48 (Y980002) 【再】



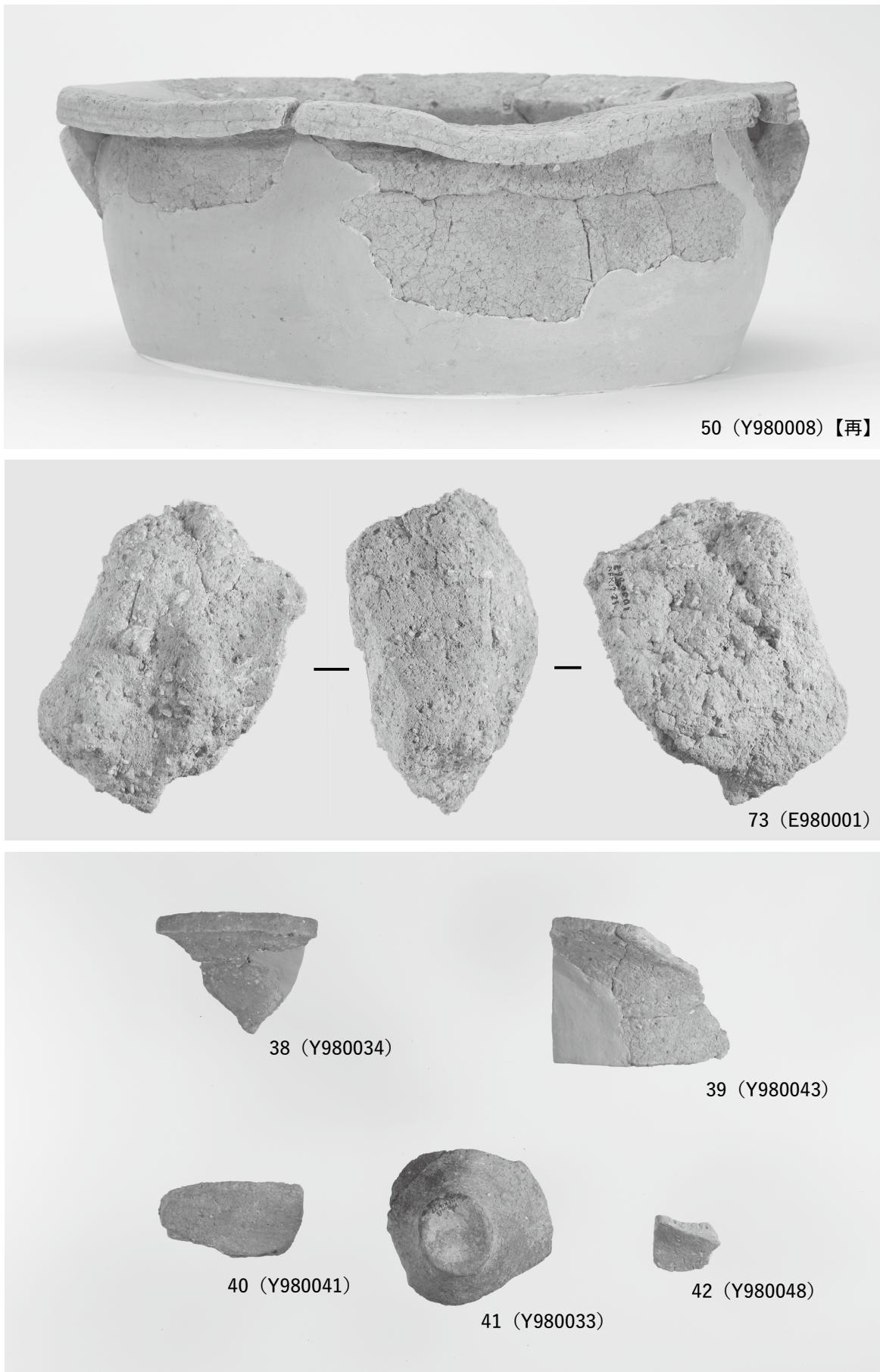
49 (Y980006) 【再】



45 (Y980007) 【再】

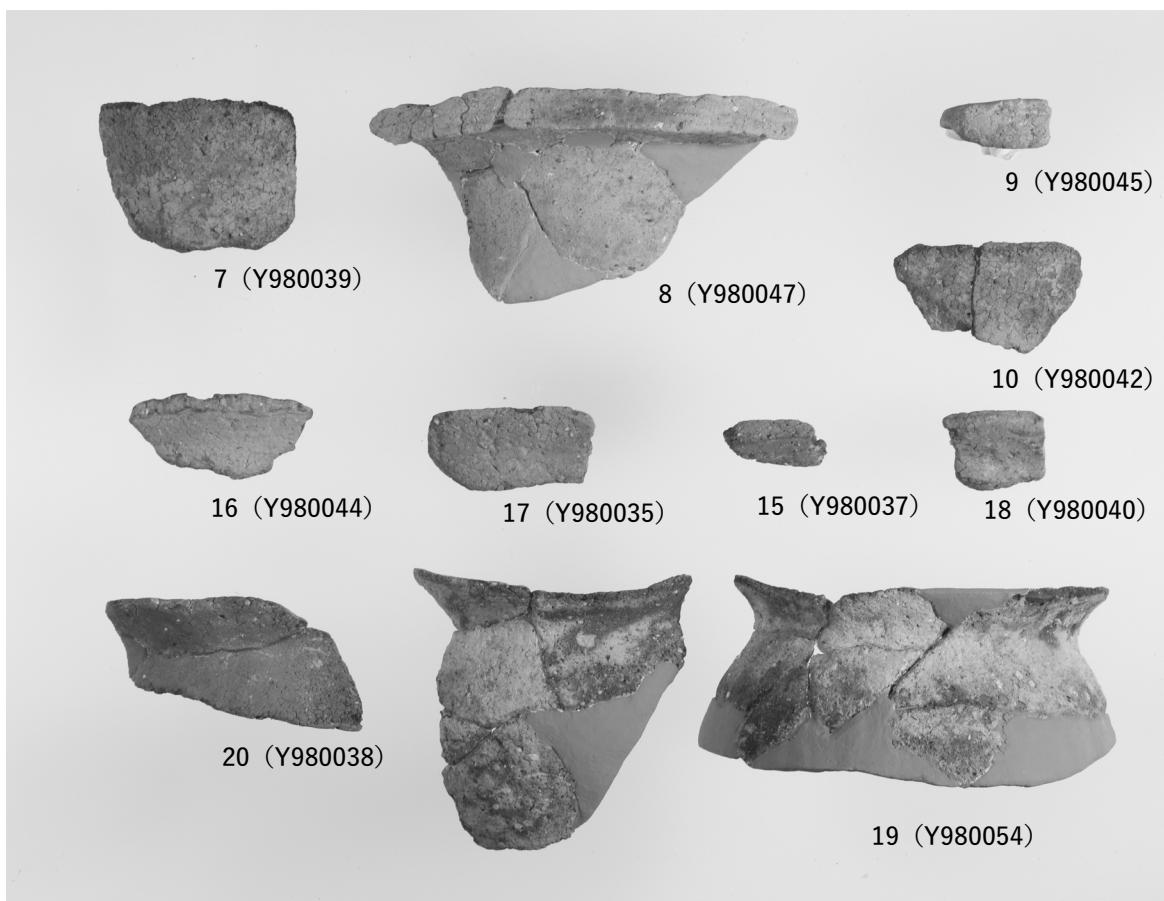
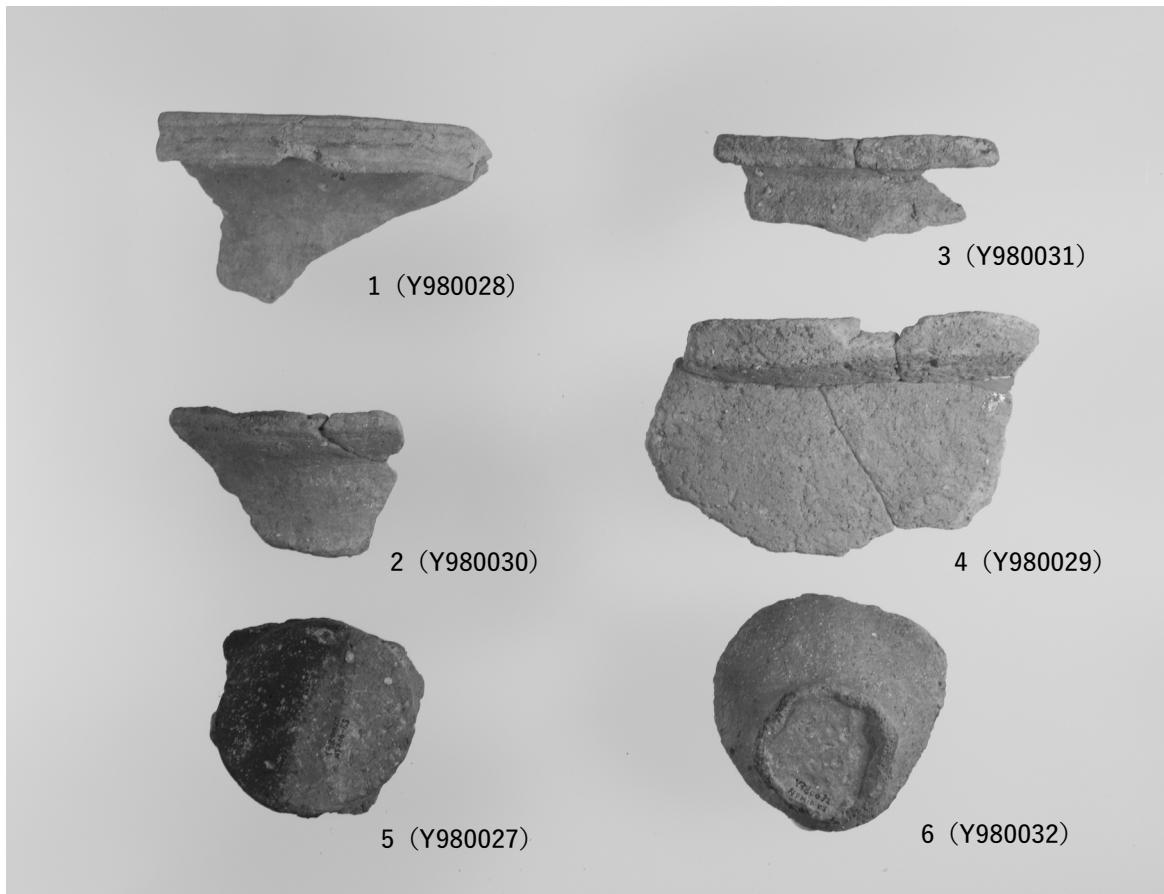
竪穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器・段状遺構 S X - 9 8 0 2 最下層出土土器

図版8 弥生土器3 土製品



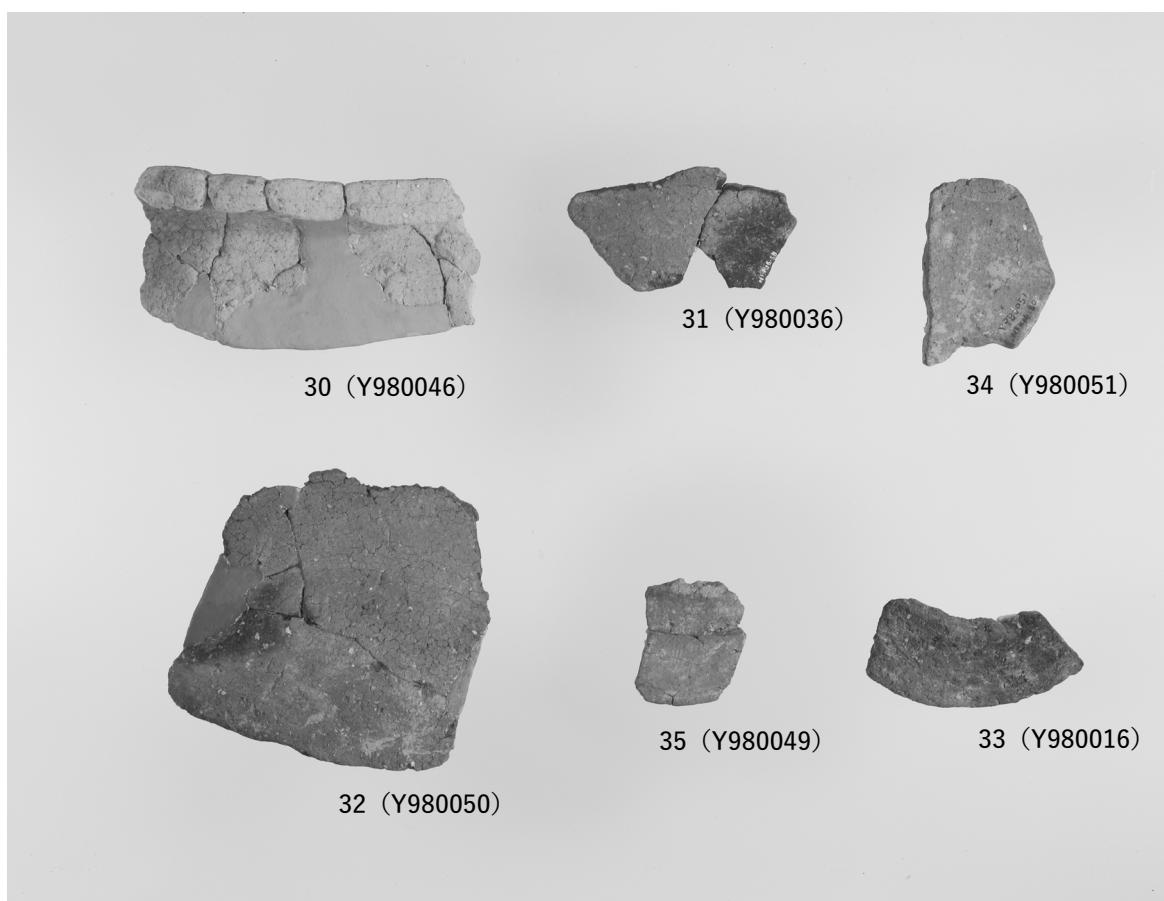
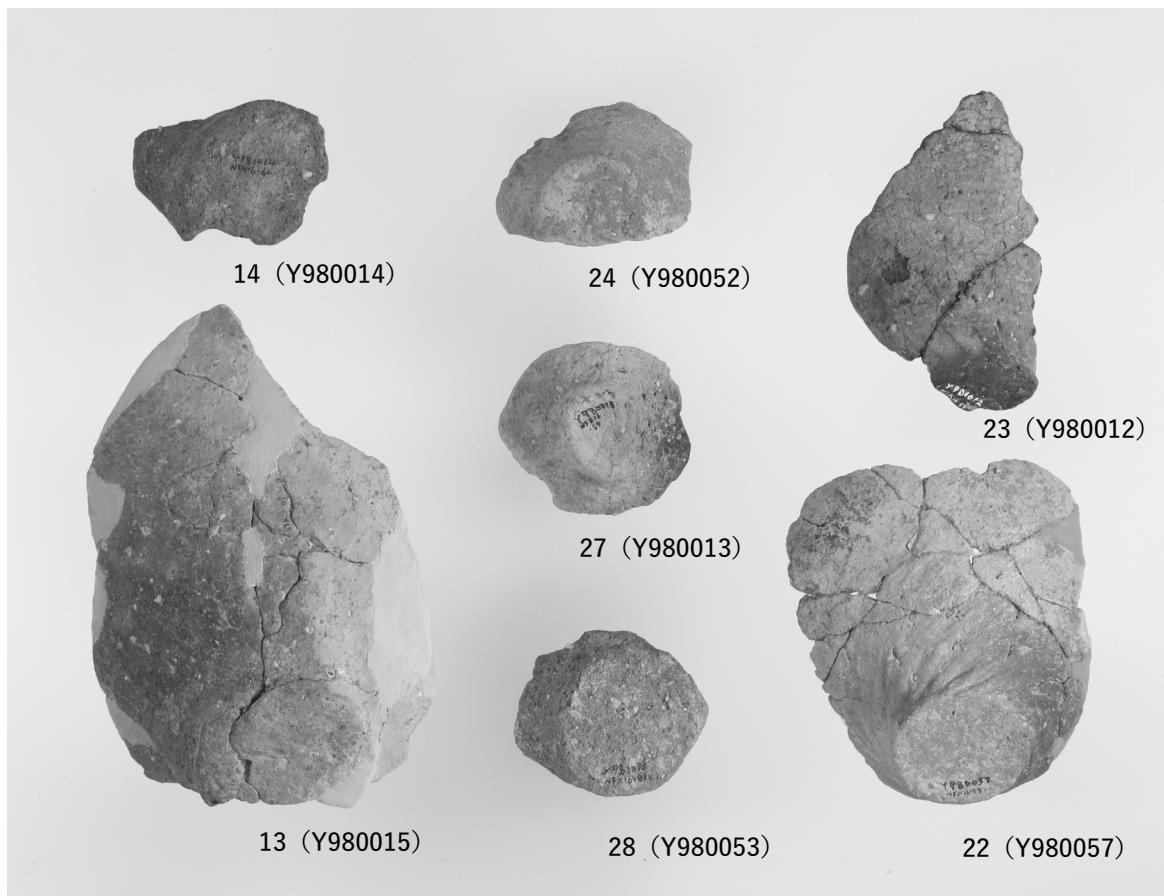
段状遺構 S X - 9 8 0 2 最下層出土土器・焼土塊・竪穴建物 S H - 9 8 0 1 上・中層出土土器

弥生土器 4 図版 9



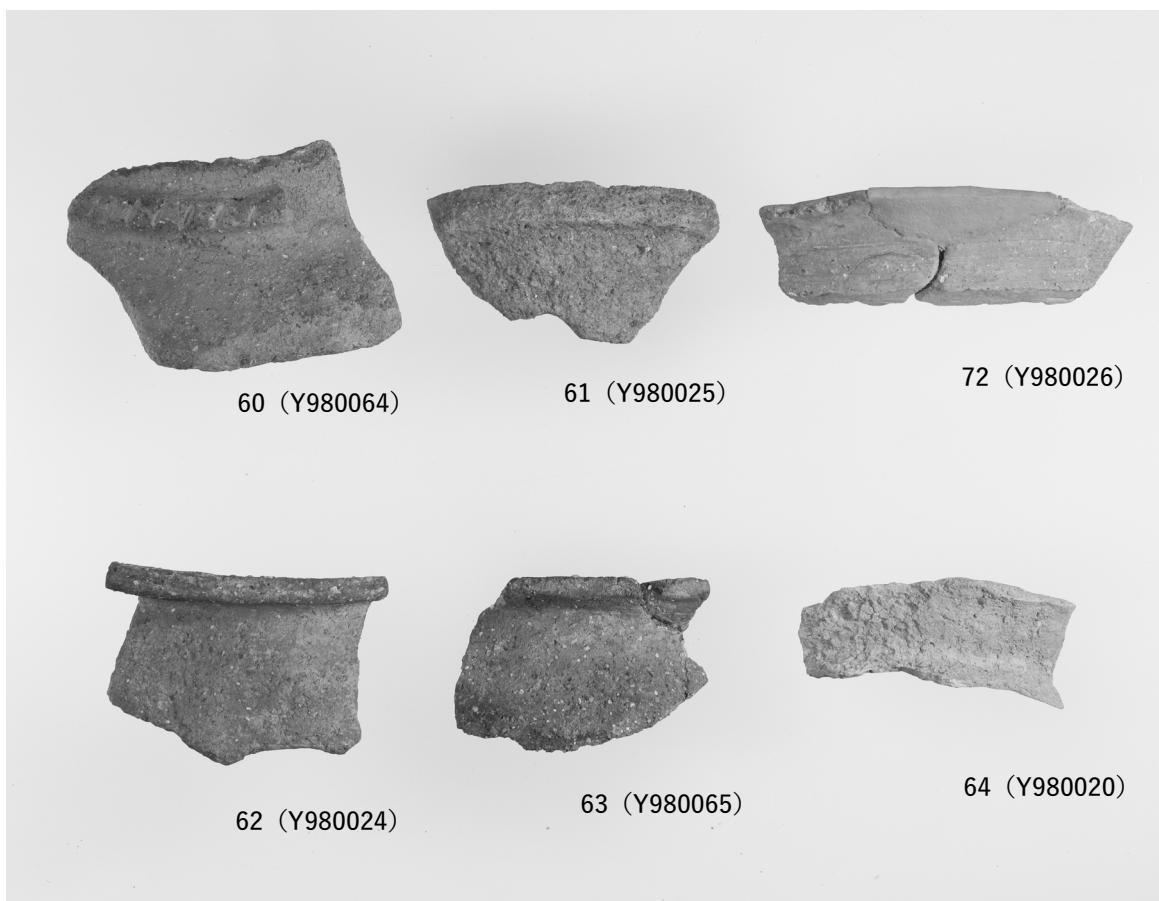
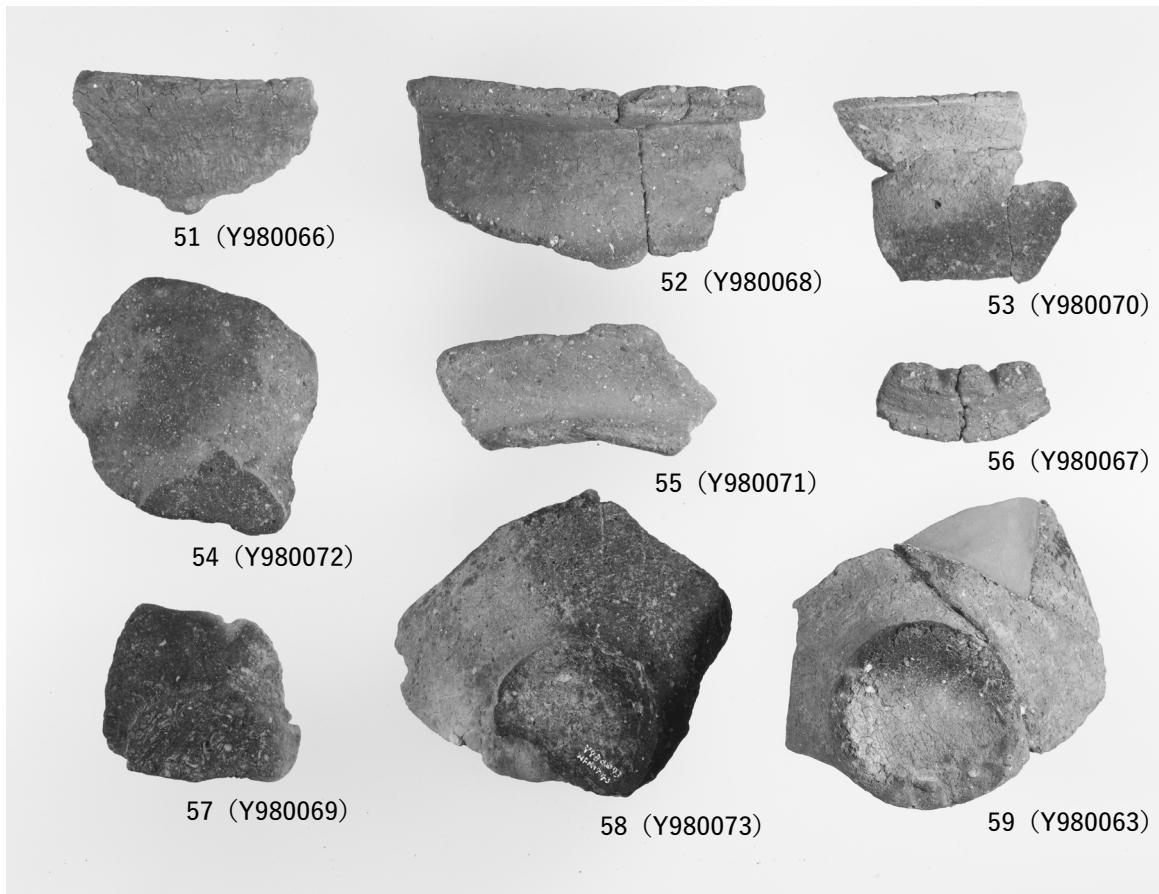
堅穴建物 S H - 9 8 0 1 西側・東側出土土器

図版10 弥生土器5



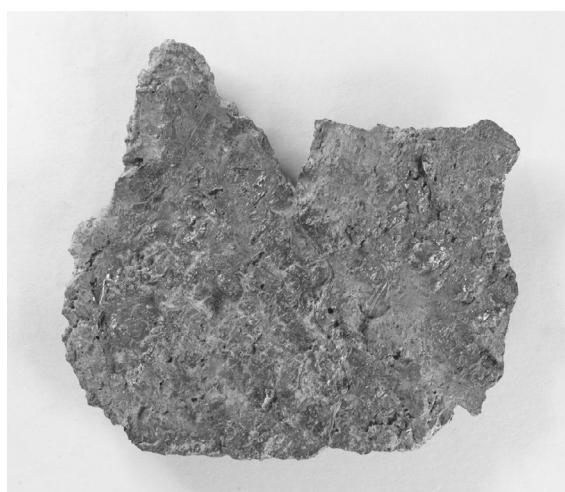
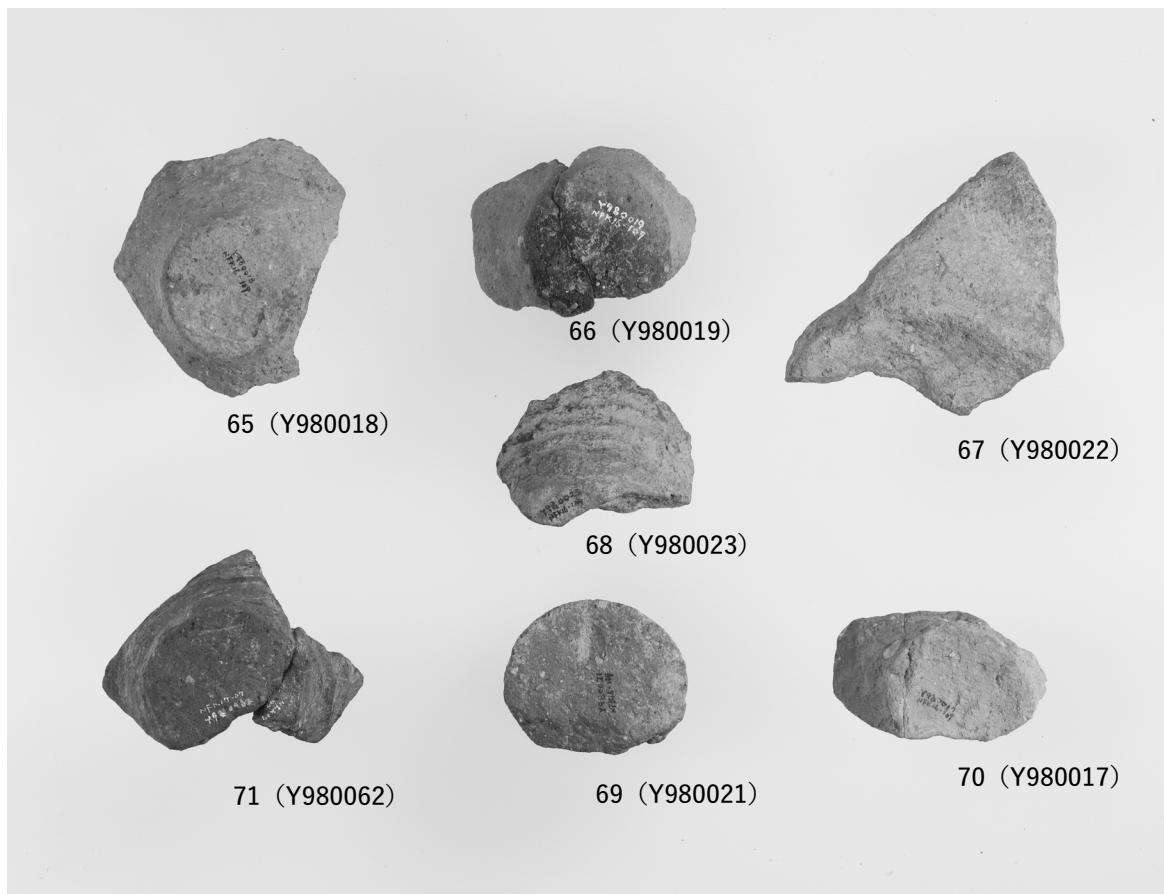
堅穴建物 S H - 9 8 0 1 東側出土土器

弥生土器 6 図版11



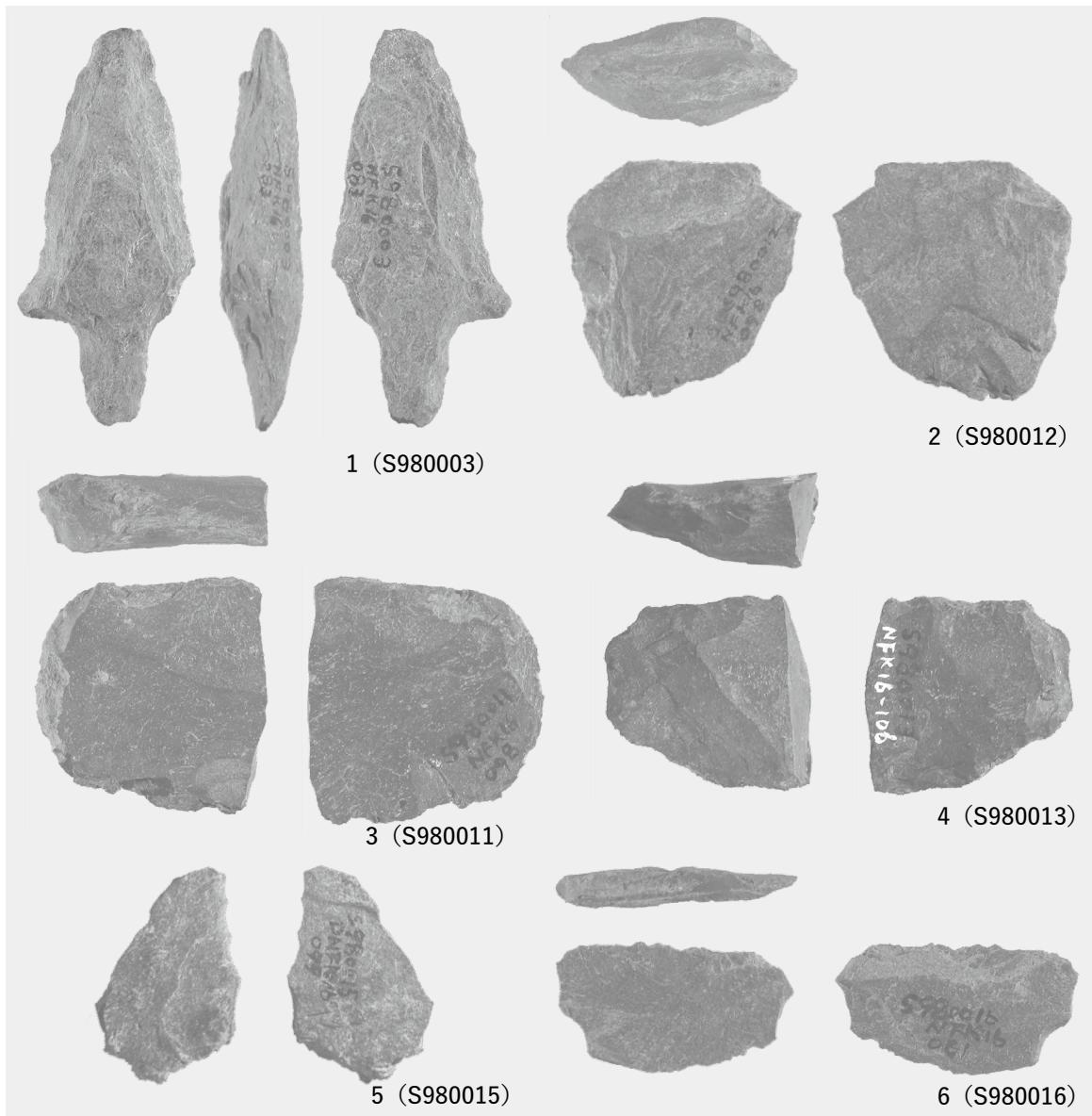
段状遺構 S X - 9 8 0 2 上・中層出土土器・遺物包含層出土土器

図版12 弥生土器 7 鉄器



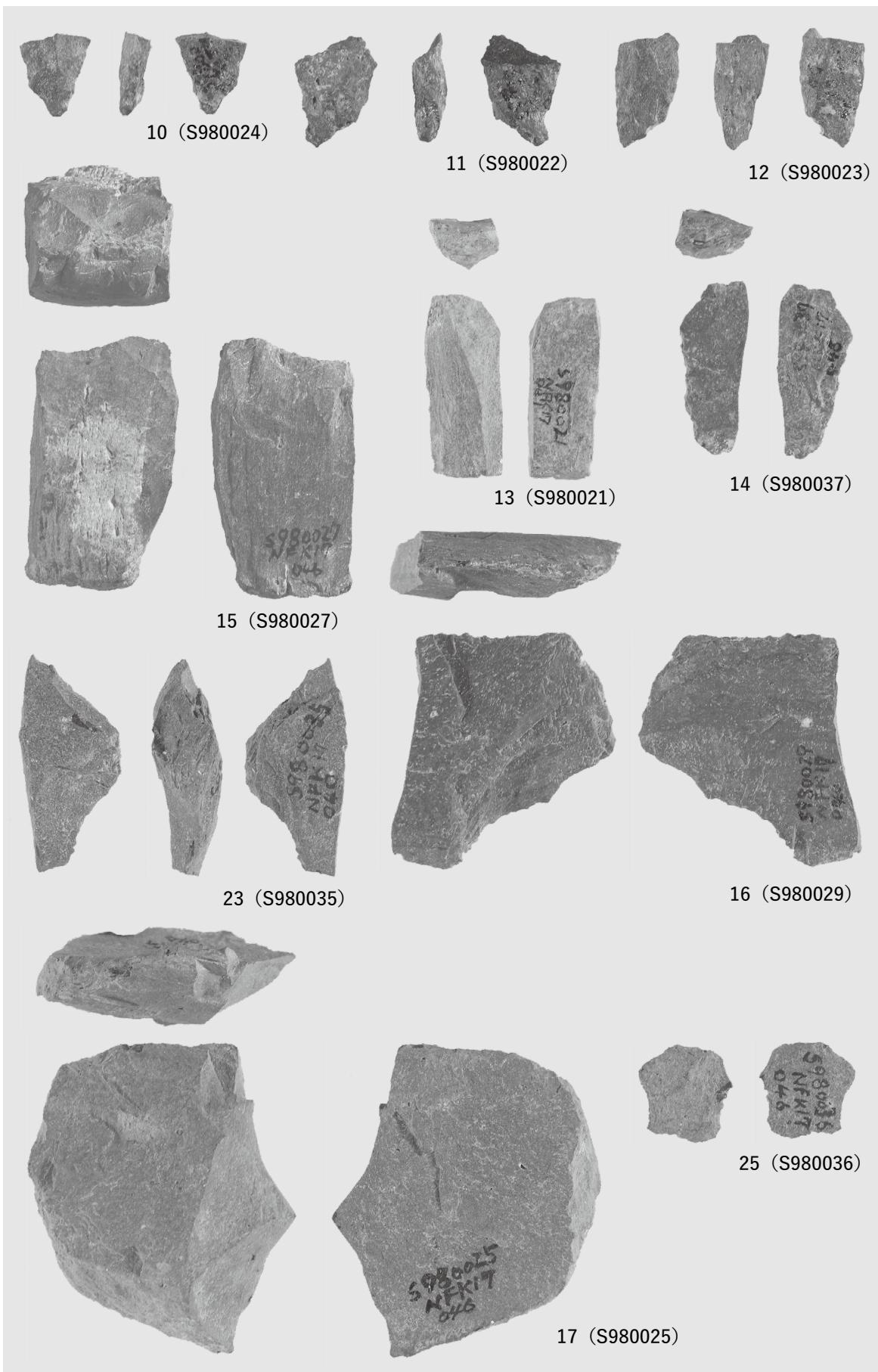
遺物包含層出土土器・鉄器

石器 1 図版13



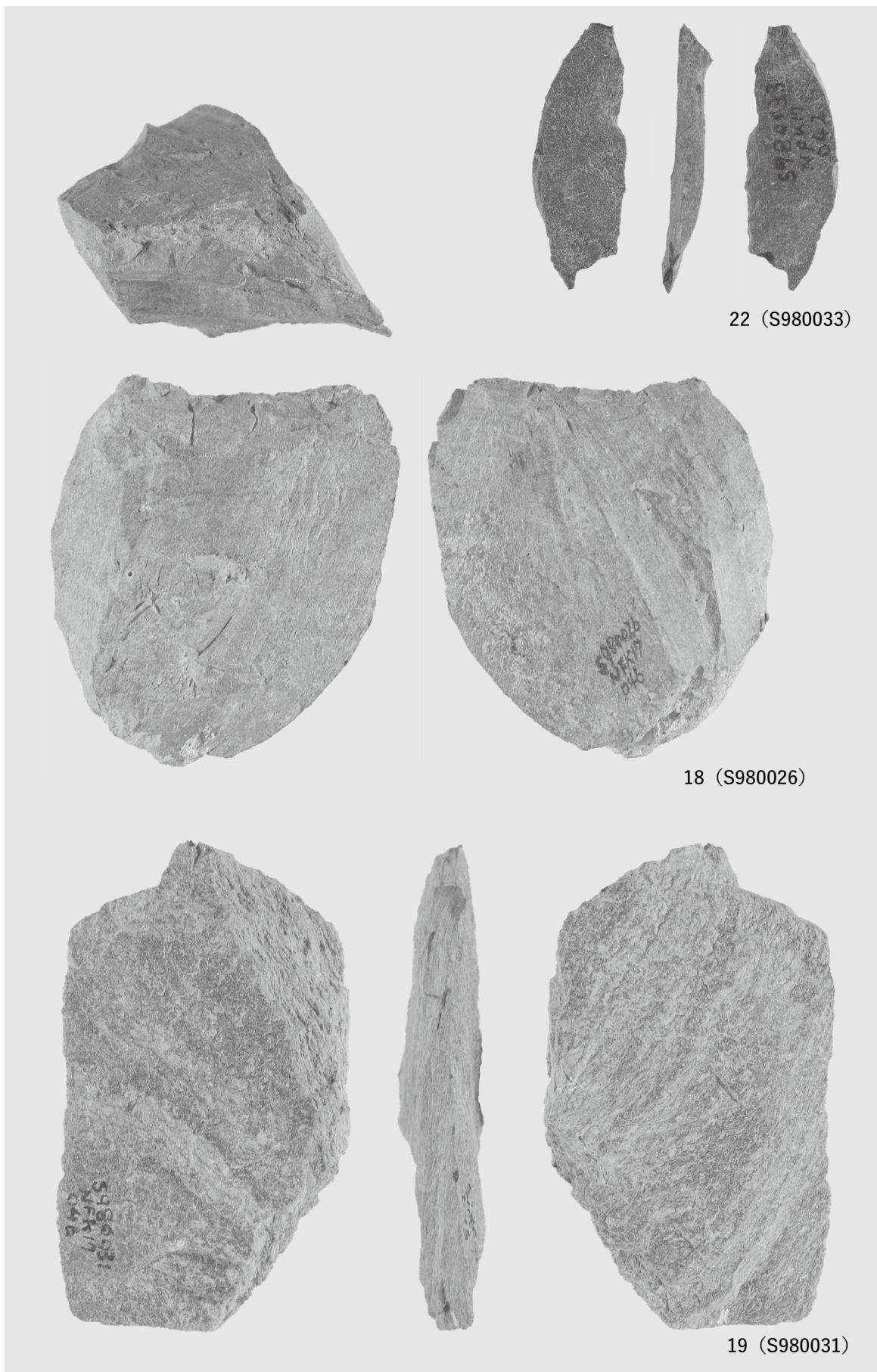
堅穴建物 S H - 9 8 0 1 出土石器・段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器

図版14 石器2



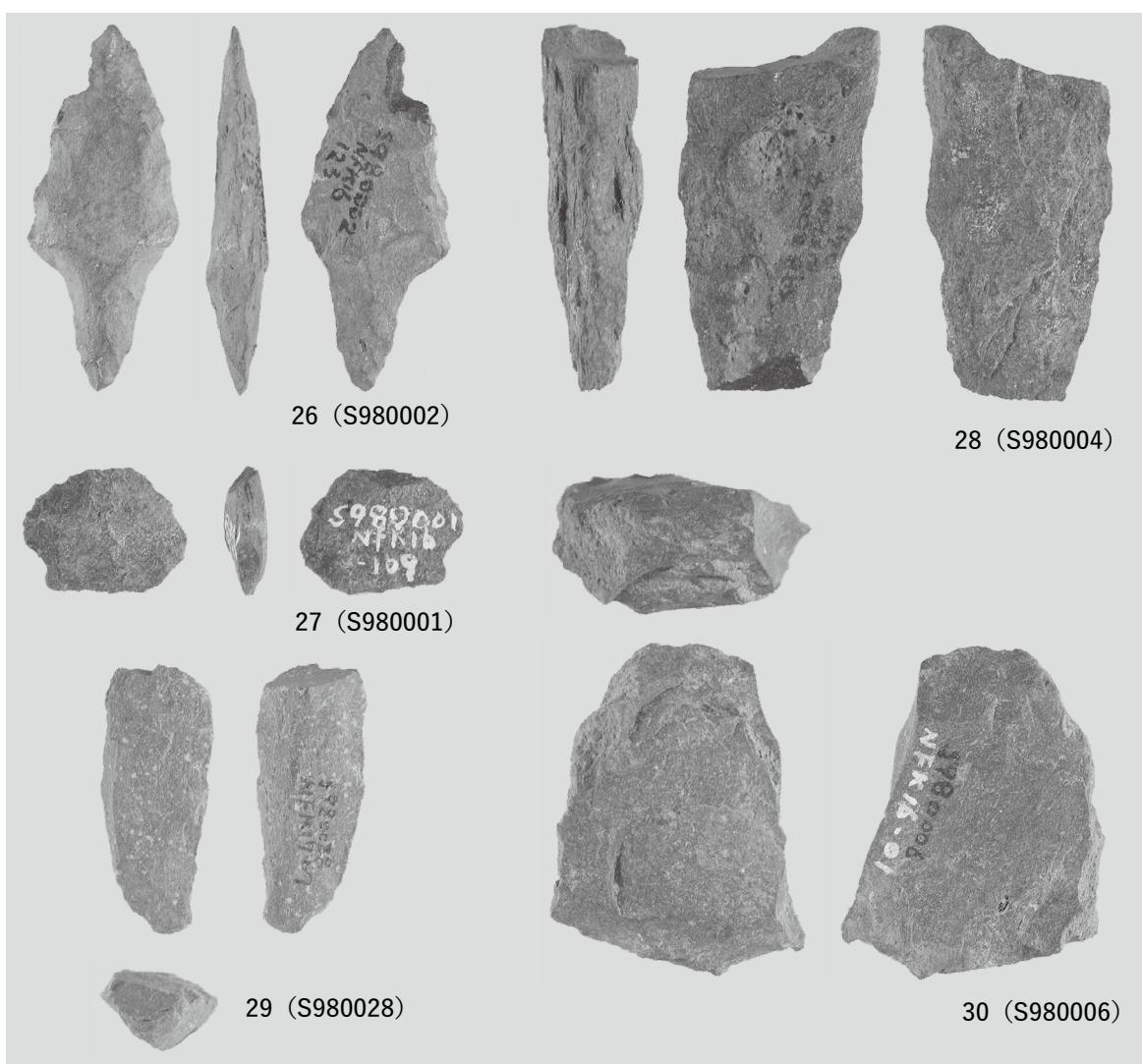
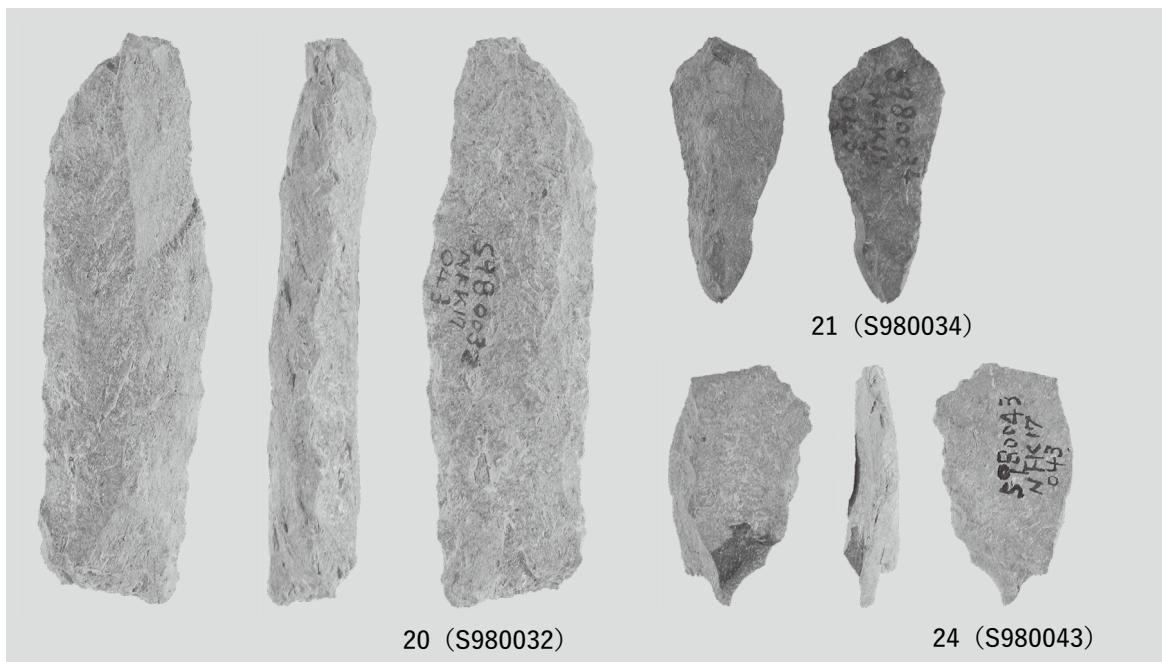
段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器

石器 3 図版15



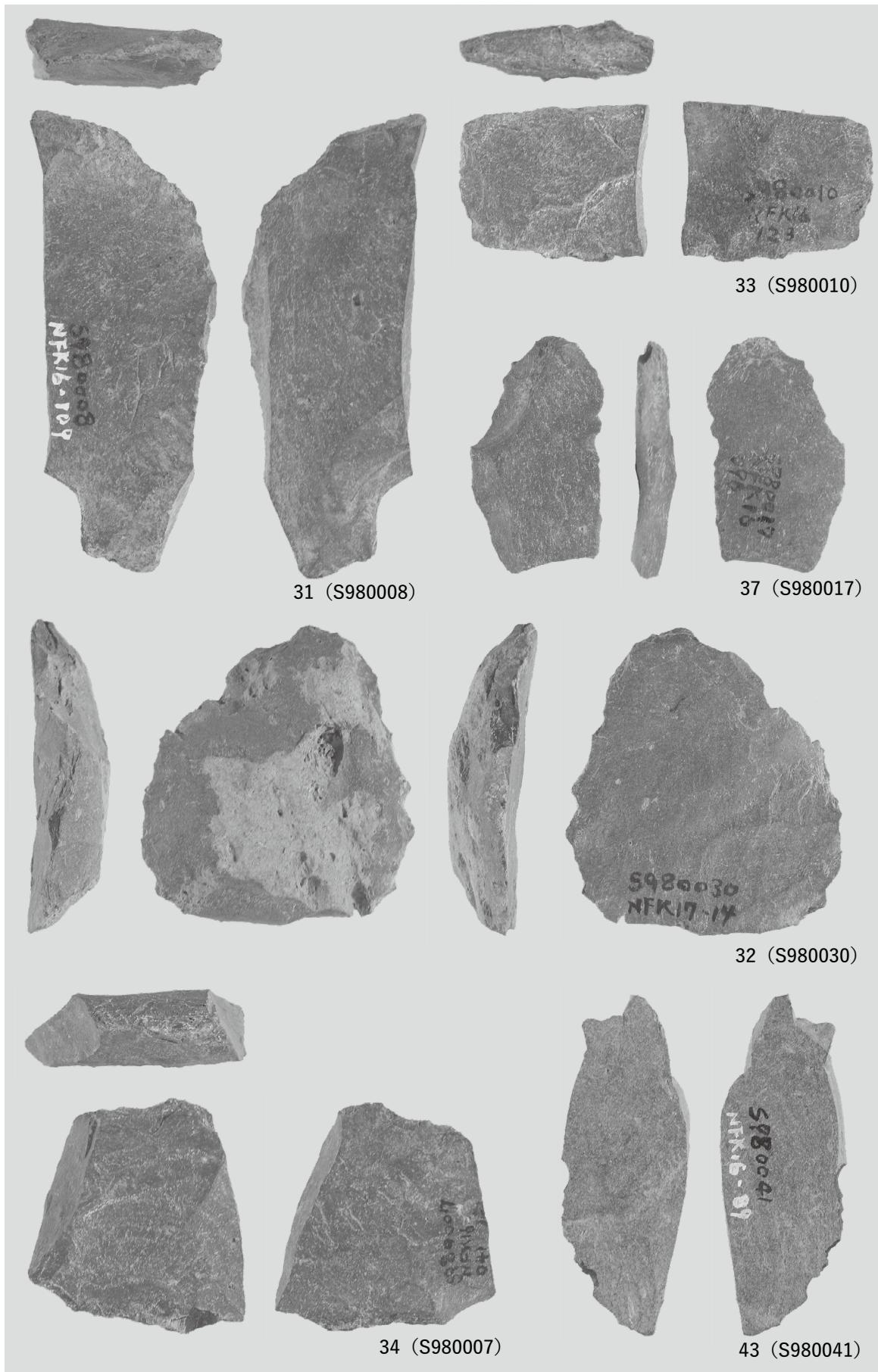
段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器

図版16 石器4



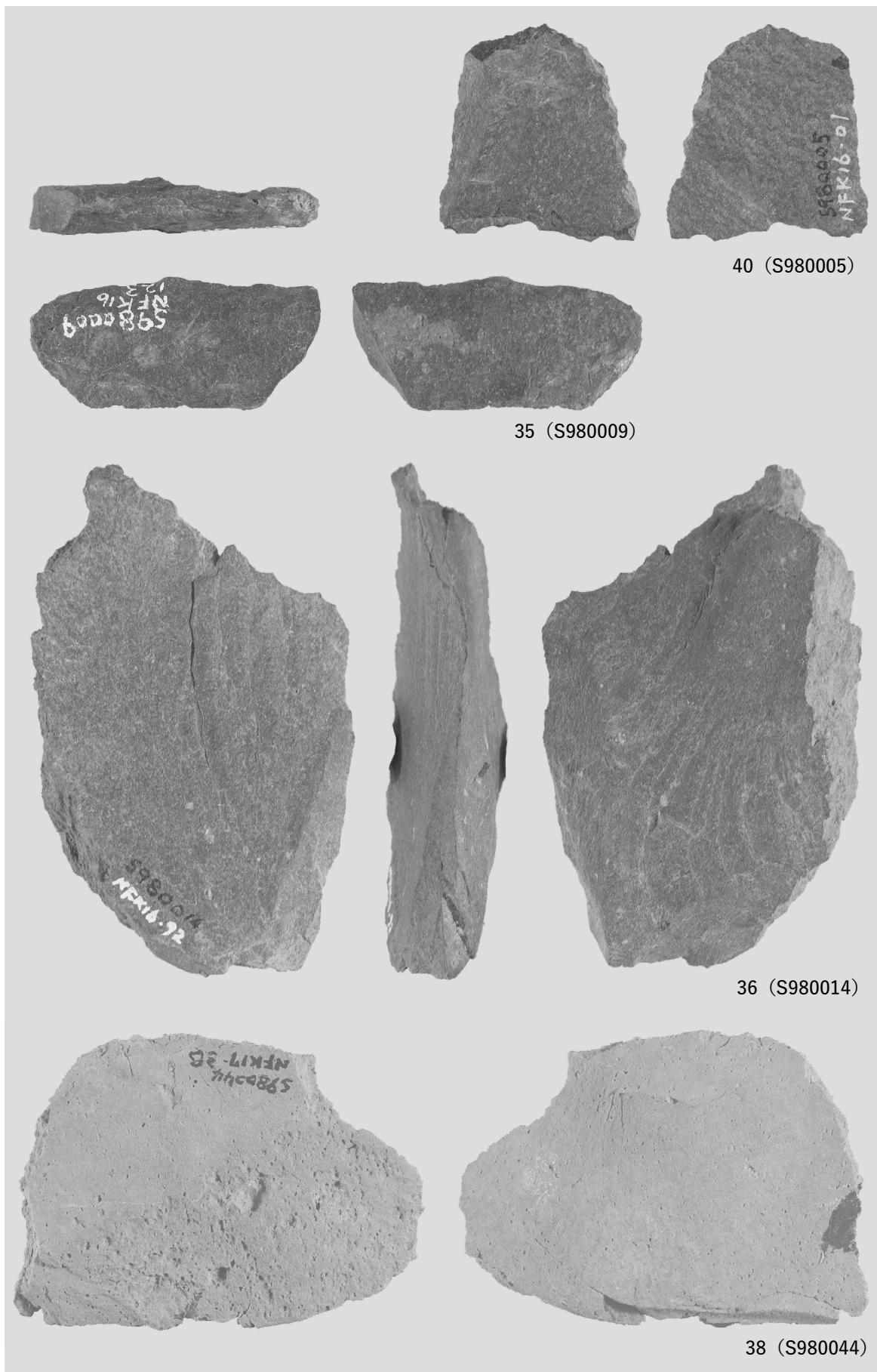
段状遺構 S X - 9 8 0 2 出土石器・遺物包含層出土石器

石器5 図版17



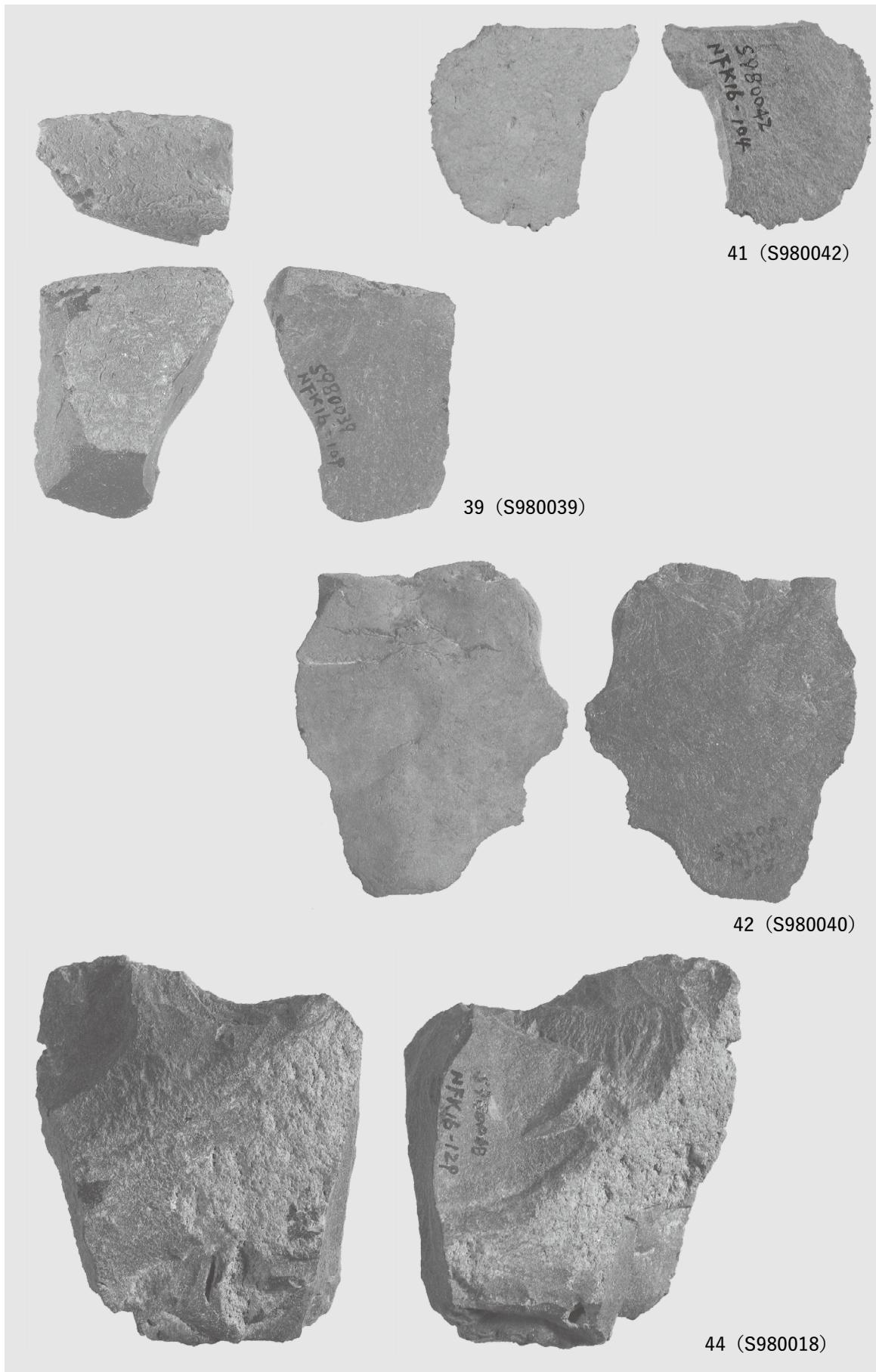
遺物包含層出土石器

図版18 石器6



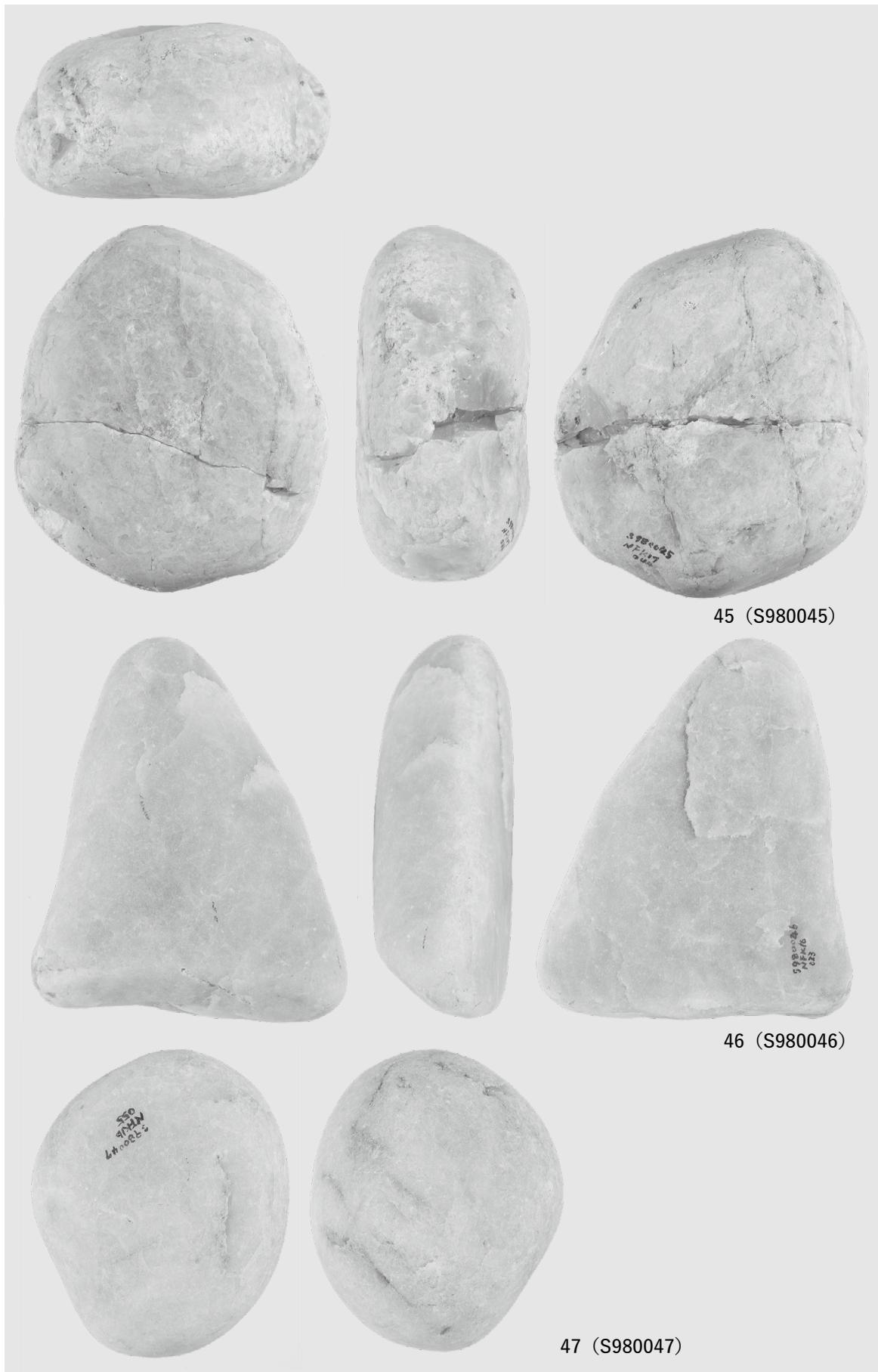
遺物包含層出土石器

石器7 図版19



遺物包含層出土石器

図版20 石器 8



その他の石器

報告書抄録

ふりがな	ふなきいせき に (えふちくにおけるへいせいじゅうねんどちょうさ)							
書名	舟木遺跡2 (F地区における平成10年度調査)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	淡路市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	新田妃三光 伊藤宏幸							
発行機関	淡路市教育委員会							
所在地	〒656-2292 兵庫県淡路市生穂新島8番地 TEL.0799-64-0001 (代表)							
発行年月日	西暦 2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふなきいせき 舟木遺跡	ひょうごけんあわじしふなき 兵庫県淡路市舟木	28226	900005	34°32'40" ~ 34°32'15"	134°57'00" ~ 134°57'20"	2016.09.30 ~ 2019.03.27	300m ²	土砂採取 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
舟木遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡 段状遺構	弥生土器、石器、鉄器、 焼土塊			弥生時代後期初頭 における舟木遺跡 出現期の一括資料 後期前半期を中心 とする土器・石器	

淡路市埋蔵文化財調査報告書 第18集

舟木遺跡2

(F地区における平成10年度調査)

2024年3月31日 発行

発 行 淡路市教育委員会

兵庫県淡路市生穂新島8番地
〒656-2292 TEL.0799-64-0001(代)
FAX.0799-64-2566

